
So what?

らいとてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

So what?

【Nコード】

N05410

【作者名】

らいとてん

【あらすじ】

異世界に転生しました。

ま、よくある話です。

それはいいとして、一つ聞いてもいいですか？

何で私……魔獣なのでしょうか？

【0】登場魔獣（人物）紹介

* ネタばれがあります。

*（ ）内は第二章時点での年齢です。

【魔獣一家】

モニカ（くろいの）（7 人間歴では24）：主人公。長女。

御母様 クリスティーナ（この大地に比べれば若輩者だ）：モニカの母

御父様 クロード（67代前の王様の子供だよ。年齢は、算数の勉強ということで自分で計算してごらん？ 王族は大体50歳前後で退位するとして、継承は、そうだね、17歳にしようか。……リーナス！ 肉球を使わずに計算しなさい！ ……というか、肉球じゃ足りないだろう？ …… エルティナ、尻尾の毛は使いづらくないかい？）：モニカの父

アルクイン（おおきいの）（7）：モニカの弟

エルティナ（おなが）（7）：モニカの妹

バルトロ（みみなが）（7）：モニカの弟

リーナス（ちいさいの）（7）：モニカの弟

【銀狼騎士団】

ヴォルデ・シュットガルト（25）：団長。前王の落とし胤。『魔王の牙』

エレナ・アンベルク・クレムス（23）：副団長。伯爵家の一人娘

『銀狼騎士団最後の良心』

ブルク・クレムス（35）：第一連隊隊長。男爵家の次男『銀狼騎士団の愉快犯』
エステラ・アンベルク・クレムス（4）：エレナとブルクの第一子。伯爵家跡継ぎ

【王家】

レヴァン・グランフォード（13）：第一王子。双子。
エミリア・グランフォード（13）：第一王女。双子。
サミュエル・グランフォード（11）：第二王子。
ロザリンド・グランフォード（9）：第二王女。

【パレヴィイダ神官】

ヴィクトル（53）：教皇『秘された聖人』
ギルバート（42）：副神官長『子豚の道化師』

シリル（21）：助祭枢機卿『魔性の聖人』『百合の君』
アルフォンス（25）：助祭枢機卿『黒壇の君』

ユーリウス（11）：神官見習い『仔犬の君』
アレッシオ（10）：神官見習い『仔羊の君』

チエーザレ（67）：一角獣の世話係『キリキリ草の爺』

【その他】

ヘレナ：王宮料理長

ハンス：ヘレナの第五子

【小坂家】

小坂大輝（42）：小坂晶の父

小坂早苗（40）：小坂晶の母

小坂晶（アキラ姉）^{ねえ}（17）：現代日本における主人公の呼称

小坂光輝（コーキ）（13）：小坂晶の弟

小坂勇輝（ユーキ）（8）：小坂晶の弟

【1】拝啓 母上様（前書き）

更新がかなりのスローペースになる予定です。

【1】拝啓 母上様

本能が『それ』を求め警鐘を鳴らす。

酷くぼんやりとした思考のまま、他者を押しのけ、探り出し、食らいつく。

満ち足りた気分で再び眠りの世界に入ろうとして、ふと違和感を覚えた。

あれ？　なんか、おかしい。

重たい瞼をこじ開けて霞む目を凝らせば、そこには――鼻先一センチまで近づいた巨大な獣の顔があった。

『おお、目が開いたか。我が愛し子』

「へ？」

声を出したはずが、耳に聞こえるのは獣の唸り声。

なにやら嫌な予感がする、と下を見れば獣の足があった。

右手を持ち上げてみる。

――右の前足が持ち上がる。

左手を持ち上げてみた。

――左の前足が持ち上がった。

「なにこれー！」

叫んだはずであった。

しかし、ある意味予想通り（是非とも外れてほしかったが）、響いたのは獣の咆哮だった。

『ほう、我が愛し子は早くも吠えるか。優秀だな。他の兄弟はまだ目すら開いておらぬというのに』

聞きなれぬ声に顔を上げれば、巨大な銀色の獣が彼女を見下ろしていた。

微笑んでいるつもりなのだろうか。

鋭い牙を剥き出し、こちらに顔を近づけてきた。

——そこで臨界点を突破した彼女の意識は暗転した。

薄れゆく意識のなか、脳裏に響くは獣の子守歌。

『寝る獣は育つという。よく眠るがよい。我が愛し子』

拝啓

母上様

お元気でいらつしやいますか。

私は変わり変わって異世界に転生したようです。

こちらの御母様は凶暴な牙をお持ちの魔獣です。

まだ乳離れもできておりませんが、優秀と褒められました。できれば夢であってほしいものです。

敬具

小坂晶

【1】拝啓 母上様（後書き）

10/2 誤字脱字を修正しました。

【2】彼女は前世コサカ・アキラだった。（多少の流血表現があります）

高校からの帰り道のことだった。

「うわぁ！」

背後から悲鳴が聞こえた。

振り返れば、目の前に車が迫っていた。

「へ？」

そこから先の記憶がない。だが——恐らくは。

「即死、だったんだろうなあ。あの車かなりスピード出してたし」

うつ伏せのまま、組んだ前足に顎を預けて目を閉じる。

17年。長いようで短い人生だった。

そのまま前世に思いを馳せる彼女の背後に近づく影があった。

それは彼女が無意識に揺らす尾に狙いを定め——飛びかかった。

突然の攻撃に飛びあがり身構えれば、見慣れた銀色の毛玉が突進してくる。

しかも、一匹でなく複数。

「かまってー。　くろいのー」

「ちよ、待て！　こらー！」

巣穴である洞窟に幼獣の悲鳴じみた鳴き声が響いた。

母親が狩から帰ってくるまで、兄弟の構え攻撃は続いた。

土産の獲物に群がる幼獣達に割り込む気力もない様子に母親が苦笑

する。

「お前は色が珍しいからな。皆、構いたくなるのだろう」

この世界では彼女の色合いは珍しいらしい。

母親と他の幼獣達は毛色が銀で瞳が蒼なのに、自分だけが毛色も瞳も「くろ」——黒だ。

前世、黒目黒髪の人間だったせいだろうか。

何故だか寂しくなつて俯く彼女の足元に鼠が一匹落とされる。

キョトンと見上げれば、蒼の瞳が優しく微笑む。

「お前の分だ。私がない間に構われすぎて消耗しているだろうと思つて別に分けておいた。ほら、早く食べるがいい。沢山食べて大きくおなり、我が愛し子」

彼女は、前世、異世界の人間だった。

ジョシコウセイでコサカ・アキラと呼ばれていた。

牙で鼠を引き裂きながら彼女は考える。

自分はかつてコサカ・アキラであった。

だが、今の自分は——魔獣だ。

母にとつての『愛し子』であり、

兄弟達にとつての『くろいの』である。

獲物の肉を飲み込み、その生温い血で喉を潤す彼女は思う。

いまだに生肉にも、四足歩行にも、牙を使うことにも、時としてある獲物の踊り食いにも、慣れることができないが、どうしてか――魔獣ライフも悪くないと思い始めている自分がいる。

「愛し子。食べ終えたのなら、こちらへおいで。お昼寝の時間だ」

「くろいのー。はやくー」

「ぼくとねようよ」

「あたちとねるのよ」

「いいや、おれとだ」

何故だろうか。

どうしようもなく心が暖かい。

きっと、理由などいらないのだ。

愛することに、理由など。

黒の獣は大きく尾を振りながら『家族』と昼寝をするために駆け出した。

【3】獣達の咆哮

それは、よく晴れた日のことだった。

「よし。そろそろ狩りの練習をするか。我が愛し子たちよ」

母親の宣言に、洞窟暮らしに飽きはじめ、外の世界に出たがっていた兄弟達が飛び跳ねる。耳をピンと立て、尻尾を振りまわす姿は、なんとも微笑ましいものだった。

「かりー。かりー」

「にくー。にくー」

「めっしっ。めっしっ」

「えっさ、えっさっ」

洞窟の中に響く舌足らずな鳴き声の内容は、物騒極まりなかったが。

母親が一匹一匹と目を合わせながら幼獣達に言い聞かせる。

「私から離れるでないぞ、我が愛し子達よ。外は、危険に満ちているのだから」

最後に、母親は、『くろいの』をしつかりと見据えて言う。

「特に、お前は絶対に私のそばから離れるな。お前のは太陽の下では注意を引きやすい」

その言葉に、『くろいの』は耳を伏せて俯く。

『黒色』が、彼らの種族において異端であると知ったのは、つい最近のことだ。

その時まで、家族にこそいないが、探せば自分と同じ色の魔獣も、きつといるのだろうと思っていた。だが、ある時、『くろいの』の毛繕いをしてやりながら母親がポツリと呟いたのだ。

「本当に、夜の闇のような色だな。万の月と日が昇り沈むのを見てきたが、ついぞ我が愛し子のような色合いの同朋には会ったことがない」

『くろいの』は、その時初めて知った。『黒色』の獣は稀少種である。

少なくとも前世でいう「アルビノ」や「四つ葉のクローバー」程度には、珍しく……人の興味を引きやすい。それは、世界が『くろいの』にとって優しい存在ではないということだ。

異端の存在は、外敵の注意を引きやすい。

それは、そばにいる母親や兄弟達をも危険に巻き込む可能性を意味する。

やはり、今日の狩りに自分は付いていけないほうがいいのではないか……。

『くろいの』が伏せた耳の下で、そんなことを考えていると、母親が彼女に近づき、ひょいっと首筋を口でくわえて、洞窟の外へと歩き出し始めた。兄弟達は母親を追いかけながら「いいな」「ぼくも」と、その足元に無邪気にじゃれつく。

「なっ、なにっ!？」

四足をばたばたさせる『くろいの』に、母親は仕様がないう奴だというような視線をやり、ペイッと首を振ってその背に乗せた。そして、ニヤリと牙をむき出しにして笑うと、大音声で吠えた。

「お前達、『くろいの』が好きかー!？」

間髪入れずに、幼獣達の吠え声が洞窟内に響き渡る。

「すーきー」

「すきだー」

「だいすきー」

「あいしてるー」

いきなり自分への愛を叫び出した彼らに、『くろいの』は眼を白黒させた。

そんな彼女を置いてきぼりにして、第5回家庭内愛の告白大合戦は続く。

「ならば、『くろいの』に仇なす奴らなぞ、我らが牙で引き裂いてくれようぞー!」

母親の魔獣が、蒼の瞳をギラギラと光らせて咆哮すれば、幼獣達が、蒼の瞳をキラキラと輝かせて雄叫びで応える。

「ひっかくぞー」

「かんでやるー」

「たべちゃうよー」

「ころちゅのー」

洞窟に響く内容は、相変わらず物騒極まりないものだった。

黒の獣は、初めて自分が黒色でよかったと思った。

だって、黒色だから、赤くなった頬に気づかれることがない。

だって、黒色だから、赤くなった眼の縁に気づかれることがない。

だって、黒色だから……家族に『くろいの』と呼んでもらえる。

母親の背の上で、『くろいの』は腹の底から大音声で吠える。

「よおし、出発だー! 狩って殺して食べまくるぞー!」

魔獣達の思考に大分染まっている『くろいの』だった。

【4】初めてのピクニック（食料は現地調達です。）

「よく見ているのだよ。愛し子達。一番簡単な狩りの方法を教えてやろう」

狩り場の草原で、母親の魔獣はそういうと瞳をギラリと光らせた。そして——次の瞬間、目の前の草むらが燃え上がった。

無残に焼けただれた大地の上で、こんがりと色づけされたえ兔がひっくり返って絶命している。3分間クッキングに勝る早技だ。……って、お母様！？

『くろいの』が、自分達の母親が魔獣であると実感した瞬間だった。

「さあ、やってごらん。ただし、間違えて兄弟達を燃やさないように気をつけなさい」

そう母親に言われたものの、はい分かりましたといって簡単にできるものではない、と『くろいの』が弟妹達を振り返れば——

「ていつ」

「とりやつ」

「えいつ」

「にくつ」

よく分からない掛け声とともに、いとも簡単に草原のあちらこちらに丸い焼け焦げを作っていた。約一匹、切実な欲望を感じさせる掛け声があった気がする。

むむ、弟妹達に引けを取るのは長女（一番最初に生まれたいらしい）

の沽券に関わると、『くろいの』も、見よう見まねで魔力を集める。

運のいいことに、鼠が一匹、目の前の草原を駆けていく。

『くろいの』は、その鼠が次に進むであろう場所を睨みつけた。

「燃えろー！」

叫んだ瞬間、目の前の草むらが燃え上がる。

燃え上がったが……火の勢いが収まらず、どんどん燃え広がっていく。

このままでは不味い。鼠は美味いが、まる焦げでは食べられない。

焦りのあまり思考の方向性がずれてしまっているが、とにかく火を消そう！ と考えて『くろいの』は叫ぶ。

「消えろ！」

次の瞬間、ぼうぼうと燃えさかる炎の上に、大量の水の塊が生まれた。

水に押しつぶされるようにして火が消えた草原には、水蒸気で靄が立ちこめる。

とりあえず火は消えたと、『くろいの』は、ほっと息をついた。

「愛し子よ」

なるほど、魔獣のイメージに合わせて魔力は発動するのか、一つ勉強になった、などと『くろいの』が考えていると、突然後ろから声をかけられた。飛び上がった彼女が振り返れば、黒い鼻面に皺を寄せ、渋い顔をした母親がいた。

『くろいの』の背から腹に冷や汗が伝い落ちる。やりすぎたか、と背後の惨状に対する叱責の予感に耳を伏せた彼女に、母親は苦い

声で言った。

「蒸し焼きとは、我が愛し子は父親に似て随分と食通のようだ」

へ？ と『くろいの』が顔を上げたが、そんな彼女に気づいていないのかいなのか、母親は構うことなく続けて言う。

「食にこだわるのは良いことだが、あまり父親に似るでないぞ。我が愛し子よ。特に女たらしなところは、な」

初めて聞く『父親』という言葉に黒い目を丸くする『くろいの』に、母親は蒼の目を細めて笑う。

「まったく。お前は父親に一番よく似たようだな。詰めが甘いところも含めて」

母親が視線をやった先を追い、『くろいの』は叫んだ。

「私の獲物――！」

見れば、『くろいの』による大規模火災の犠牲となった獲物に弟妹達が群がっている。

最初の火で、食べるのに邪魔な毛の部分が焼かれ、消された火の余熱を含んだ水蒸気に程よく火を通された獲物の味は絶品であったと、満足げに口の周りを舐める弟妹達に、褒められても嬉しくない尻尾を膨らませた『くろいの』であった。

拗ねてしまった『くろいの』に慌てて弟妹達が獲物を仕留めて貢物にする様子を、目を細めて母親は見守る。

「未だ教えぬうちに自ら火と対をなす水の魔力を使うたか。なんとも優秀なことよ。我が愛し子は本当に魔に愛されているとみえる……父親に似て」

母親は、そう呟くと、そろそろ獲物に埋もれそうなのを助けに、ゆっくりと尾を振りながら歩き出した。

【5】銀の雨降る月の夜

しとしとと降る雨音が洞窟内に響く。

既に日は落ち、魔獣達は家族皆で団子になり、眠りにつこうとしていた。

「今日の猪、美味しかったね」

「風を使うコツがわかってきたよ」

「雨で毛皮が……毛繕い……しないと……でも、ね、むい……」
「……ぐう」

よほど今日の狩りが楽しかったらしく、興奮気味に狩りや獲物の猪について熱く語る弟妹もいれば、半分夢の世界に旅立っている弟妹もいる。

「昨日御母様が仕留めた熊の丸焼きも独特の風味で美味しかったよね。……こら、毛繕いしないで寝たら、寝癖がすごいことに……しかたないなあ、今日だけやってあげる」

『くろいの』は弟妹たちの話を聞きながら、雨に濡れて乱れたままの毛皮で寝ようとする幼獣の毛繕いしてやっていた。

初めの頃は、洞窟の入口に背を向けた母親の腹を枕に兄弟仲良くならんで眠っていたが、幼獣達が大きくなるにつれ、彼らは自然と母親を囲んで半円状に伏せるようになった。

『くろいの』達は既に中型犬ほどの大きさになっていた。それでも母親の半分にもならない。熊にも勝る超大型獣であらせられる御母様からみれば、幼獣達はまだまだ仔犬のようなものであった。

「我が愛し子達よ」

眠りを誘う柔らかな声で母親の魔獣は囁く。

「そろそろお眠り。寝る魔獣はよく育つという。もっともっと大きくおなり。我が愛し子達よ」

「御母様。眠る前に何かお話を聞かせて」

弟妹の一匹が、顔を伏せたまま、上目遣いに母親にねだる。

「私からもお願いします。御母様」

「僕も聞きたい」

「……わたしも」

「……ぐう」

全員（既に夢の世界に旅立っている一匹を除く）にねだられて、母親は蒼の瞳を細めて微笑む。

「ふむ。よからう。何の話をしようかの。……何か、聞きたい話はあるかい？ 我が愛し子達よ」

母親は尾を振って、幼獣達を促す。それに、幼獣達は、どうしようかと皆で顔を合わせる。

「魔力の使い方の話は？」

『くろいの』が言うと、他の弟妹は首を傾げた。

「僕、人の話が聞きたい。僕達は将来、人と契約を結ぶのでしょうか？」

「私も人の話がいいな。大きくなったら、人の住む都に行くことになるのだし」

「……ひ、と」

「……ぐう」

夢の国に二匹目が旅立ちそうではあるが、多数決で『人の話』と

いうことになった。兄弟を代表して『くろいの』が母親にねだる。

「御母様。人の話を聞かせて」

ふむ、と母親は視線を宙にやり、一度頷くと、幼獣達の方に向き直る。

「そうか。では、我らが友であり敵である人の話をしよう。お前達、契約の話は覚えているね」

母親の問いかけに、弟妹が承知と一声鳴く。

「はい。僕達の一族は、人の王族と契約して、魔獣と人の仲介を行うのですよね」

そうだ、と母親は満足げに頷く。

「我らが魔獣はこの森に生きる存在だ。この森の中でしか生きられぬ仲間もいる。人と魔獣の相互不可侵の証として、我らが一族は人の王族と契約を結び、彼らが約束を違えぬよう、その傍にいたことになる……だが、よく覚えておくことだ、我が愛し子よ」

そういつと、母親は牙をむき出しにして、瞳をギラリと光らせた。

「人とは悪知恵に長けた一族。ゆめゆめ心を許してはならないよ」

凄みを帯びた声音に、幼獣達の尻尾が興奮で一斉に膨らむ。

「はい」

「はい」

「はい」

「……ぐう」

「……ぐう」

難しい話に、二匹目が完全に撃沈してしまったようだ。

母親は牙をしまうと苦笑しながら真剣な表情をした幼獣達に尻尾を振る。

「脅しすぎたか。まあ、悪賢いといっても、それは一握りの人間だけだ。人の性質は千差万別。お前達のような真面目な者たちもいれば、眠ってしまった愛し子達のように、のんびりとした者たちもいる。重要なのは、相手をよく見ることだが、それには、多くの人を見るしかない」

だから、と母親は続ける。

「人の心を知るために、まずは己の心を育てることだ、愛し子達よ。己を知らずして他を知ることとはできぬ」

首をかしげながら弟妹は問う。

「『己を知る』って？」

「どうやったら分かるの？」

蒼や黒の瞳をまん丸にして見上げてくる幼獣達に母親は蒼の瞳を細めて微笑む。

「よく遊び、よく食べ、よく寝る。そうして、世界の中でありのままの己で過ごしていればおのずと分かってこよう。我らが時は、永遠に少し足りぬだけある。ゆっくり考えてゆけばよい」

雨はいつの間にか止み、月が皓皓と大地を照らしていた。

洞窟に差し込む光が、巨大な銀の獣の輪郭を白く照らしだし、幾千もの歴史を見てきた蒼の瞳の色を深める。

「さあ、雨も止んだ。もうお休み、我が愛し子達よ。明日の日にま

た出会っまで」

「はい。おやすみなさい」

顔を伏せ寝る態勢に入った仔等に、銀の母親もまた瞼を閉じる。

翌朝、先に寝てしまった二匹が、起きていた幼獣達に尋ねる。

「それで、人ってどんなの？」

「足は六本あるの？」

人という生き物自体の説明を忘れていたため、幼獣達の脳内で人の姿形がとんでもないものになっていると母親が気付いたのは、随分後だった。

【5】銀の雨降る月の夜（後書き）

少しでも真面目なお話でした。

10/4 誤字脱字を訂正しました。

【6】今日も一日楽しかったね、と彼らは笑う。

「おい！ そっちに行つたぞ！」

川下の弟からの合図に、川上の弟妹たちと臨戦態勢を取る。

「鮭の丸焼き」

「蒸し焼きー。来い！」

「香草焼きだー」

「刺身もいい」

ギラギラと目を光らせた幼獣達が、川を遡る鮭を次々に川岸に飛ばし、味を損なわないように風でそつと大地に置くと、火を熾し水を呼び風で切つて各々の好みに合わせて料理していく。

「なんと。父親の食通の血は、全ての子供たちに受け継がれていた
というのか……」

熊だろつが竜だろつが生命が我が血肉となるのを感じるには生肉を貪り食うのが一番、という漢の料理すら超越したワイルドな食し方を好む母親の魔獣は、遺伝子の神秘に鼻をひくつかせる。幼獣達の調理は終盤に入り、辺り一面に鮭の焼ける香ばしい香りが漂っていた。

「御母様、丸焼き美味しい？」

「蒸し焼きもいかかですか？」

「香草焼きもお勧めです」

「刺身もどうぞ」

こんがりと焼き目が付き、ホクホクと湯気を出す鮭。
柔らかに蒸され、口の中でほろりと解れる鮭。

魚の独特の臭みが消され、爽やかな風味を加えられた鮭。
肉の部分のみを薄くそぎ、穏やかな口当たりで、口の中ですり
と溶ける鮭。

幼獣達が思い思いに調理した鮭が芭蕉のような大きな葉の上に綺麗に並べられ、御母様の御膳に置かれる。母は思う。我が愛し子達と彼らの父親の料理に対する飽くなき追求心はどこから来たのだろうか、と。そして結論付ける。旨いからよし。

母親が鮭を口にしたのを見て、幼獣達も一斉に食べ始める。しばし沈黙が川辺に訪れる。

時たま、

「刺身ってなあに？」

「お前、本当に蒸し焼きが好きだよな」

「この香草、口の中がピリピリするのがまたいいね」

「鮭って寄生虫がいるから生食は注意が必要って聞いたことがあったけど、そもそも魔獣の食事は生が基本だしなあ」

などという呟きが聞こえる程度だった。

幼獣達が満腹になり、満足げに口の周りを舐めて、お互いの料理を講評し合っている様子を母親の魔獣は微笑ましげに見つめる。

「馳走になった。このように旨いものを食べたのは久しぶりだ。ありがとう、我が愛し子達よ」

母親に褒められて幼獣達はキヤキヤイとはしゃぎ、興奮状態のまま川に飛び込んで水の掛け合いを始めた。母親は川岸に寝そべって彼らを見守る。平和でいつも通りな魔獣一家の午後だった。

幼獣達が料理に凝りだした元凶は『くろいの』だった。元女子高生として調理された料理を食べるのが当たり前だった彼女には、生は当たり前、時には生きた獲物を毛皮ごとガブリといけ、な御母様の男前な料理は少々きつかった。

身体は魔獣なので口にすれば生肉も生き血も旨いと感じるのだが、ある程度まで調理された料理を食べたいという欲求は常にあった。

そんな彼女にとって転機となったのが、初めての狩りで偶発的に蒸し焼きに成功したことだった。弟妹たちに横取りされ、その時は結局一口も口にすることができなかったが、魔獣の肉球付きプニプニ前足でも魔力さえうまく使えば料理が可能だという事実には彼女は強い衝撃を受けた。

そこから『くろいの』の奮闘が始まった。ただ、焼く・煮る・蒸す、だけでなく、肉に合う香草を探すなど、少しでも前世の形に近づけようと彼女は頑張った。

そして、そんな彼女の姿を、じーっと見ている獣達がいた。弟妹達だ。

幼子というのは年長者の真似をしたがるものである。彼らが姉である『くろいの』が料理するのを見て、見様見真似で料理を始めたのは当然の流れであった。

『くろいの』は料理を始めた弟妹達を見ながら、この料理ブームは長くは続かないだろうと思っていた。熱しやすく冷めやすい、つまり、飽きっぽいこともまた、幼子の特徴だからである。

だが、『くろいの』の予想を良い意味で裏切り、料理ブームはますます過熱していった。

その理由の一つに、幼獣達の鋭敏な味覚が調理した獲物の旨味を気に入ったことが挙げられる。この研ぎ澄まされた味覚は、食通である彼らの父親譲りなのだが、幼獣達がそれを知ることにはなかった。ちなみに、御母様の味覚が感じるのは、食えるか、食えないか、の二択である。倒せるか、倒せないか、と変換してもよい。

そして、『くろいの』は知らないが、弟妹達が料理に嵌った最大の理由は、美味しい料理を作ると『くろいの』が幸せそうな顔をするから、というものであった。

幼獣達は気づいていた。

自分達の誰よりも魔力を操るのに長けた黒の獣が、何かに急かされるように必死に魔力について学ぼうとしていることに。

幼獣達は知っていた。

自分達の誰よりも物知りな姉が、時々深い物思いに沈むことを。

幼獣達は分かっていた。

自分達の誰よりも強く賢く優しい『くろいの』が、時々寂しげに笑うことを。

だから彼らは今日も料理する、愛しい『くろいの』の喜ぶ顔を見るために。

（あんな顔をさせたくない）

（させたくないなら、できなくすればいい）

（する余裕もないほど皆で遊んで食べて寝ればいい）

（そして皆で笑おうよ。今日も一日楽しかったねって）

今日も銀の幼獣達は黒の獣に群がり、かまえ攻撃の手を緩めない。
「くろいのー。かまってるー」

「僕も」

「あたしも」

「それー。激流攻撃だー」

何も知らない『くろいの』は、四面楚歌の水攻撃に確かに余計なことを考える余裕などない。主に命の危機的な理由で。

「ちよつ。魔力を使うのは反則だよ——！」

幼獣達の思いを知ってか知らずか、母親の魔獣はそんな彼らをただ微笑み見守っていた。

「御母様、助けて……」

「存分に水遊びを楽しむがよい。我が愛し子達よ」

日が傾き、黄昏の光が川面に輝く頃、母親は立ち上がると幼獣達に呼び掛ける。

「さあ、そろそろ帰ろう。我が愛し子達よ」

ずぶ濡れの幼獣達が口々に返事をする。

「はい」

「了解です。お母様」

「あい」

「へえい」

「はい。……鮭、干物にして持って帰れないかな」

魔力で火をおこし風を温め、毛皮を乾かしてやりながら、母親の魔獣は笑う。

「よく食べ、よく遊んだな。愛し子達よ。さあ、夜の月に出会う前に帰ろうぞ」

歩き出した母親に、幼獣達は、今日は何の物語をねだろうか、と楽しげに話しながら付いて行く。

背後から聞こえる幼獣達の笑い声に、母親の魔獣もそつと蒼の目を細めたのだった。

【7】人と魔獣が結びし契約

日が沈み、月明かりが差し込む洞窟の中、いつものように幼獣達は母親に話をねだる。

それは、いつものことだった。だが、幼獣達のねだった話が問題だった。

それは――

「御母様。『御父様』について教えて下さい」

母親の魔獣は、耳をピクリと動かし、尻尾をブワツと膨らませた。
「そうだな……。父親か……」

何時もならすぐに話し始める母親の初めてみせる躊躇う様子に、聞いてはならないことを聞いたかと幼獣達が不安げな顔をする。それに気づいた母親は、安心させるように幼獣達の顔を舐めてやる。

舐め終わった後も、暫く目を伏せて思案していた母親は、最終的にこう結論付けた。

「愛し子達よ。お前達がもう少し大きくなってから父親について話してやるうぞ。あれは、情操教育に悪い存在だからな」

情操教育に悪い父親ってどんな父親だ、と『くろいの』の脳内で妄想が渦巻いた。

「じょーそーきょういく？」

弟妹達が知らない単語に首を傾げた。

「うむ。あのような浮気獣のことなど、今はまだ知らなくてよい。王宮に行く前になったら教えてやるう」

その言葉に『くろいの』は驚いた。

「御父様は王宮にいらっしゃるのですか？」

そうだ、と母親は頷いた。

「さて、それでは、今夜は森の外の危険について話をしようか」

暗に父親の話は打ち切りだと示し、母親は話を続ける。

「我々魔獣は、魔力の源である森の外に出ると魔力を失い、ただの獣になってしまう。我らが一族だと、犬に近い生き物になるらしいな」

幼獣の一匹が疑問の声を上げる。

「ですが、御母様。それでは、魔力を使って王族と契約を結ぶことができなくなります。契約の地は王都、人の住む地です」

良いところに気がついたな、と母親は幼獣に微笑みかける。

「契約を結ぶことによって、我らは人を介して魔力を得ることができるようになるのだ。」

別の幼獣が不安そうに鳴く。

「じゃあ、僕達、犬みたいに弱い獣になって王都まで行くのでしょうか？」

怯える幼獣を安心させるように母親は答える。

「大丈夫だよ、我が愛し子。私は既に王族と契約を結んでいるから、森の外でも魔獣のままだ。害意ある者はすべてこの牙で引き裂き、お前達には毛一本も触れさせはしない。それに森から王都までは王族が派遣した護衛達に運んでもらうことになる。あの者たちは中々に優秀だ」

不思議そうに幼獣が尋ねる。

「どうして森の外では魔力がなくなるのですか？」

少し長くなるぞ、と断ってから母親の魔獣は古の物語を幼獣達に語り出した。

「それが、我らが魔獣と人が結んだ契約の一環だからだ。古の時代、人は我らが敵であった。魔獣と人は、互いに互いを狩り、滅ぼしあっていた。だが、ある時、魔獣の王たる獣が一人の王族と出会った。彼らは友となり、互いの同朋を憂う心を知った。そして、彼らは契約を結んだ。人は人の地で、魔獣はこの根源の森の地で、暮らし互いお互いの領地を侵さないという契約を。そして、その契約の証として我ら魔獣はこの森から出ればただの獣となるようになり、人はこの森に入れぬようになった」

「年月が過ぎ、人が幾世も代替わりするうちに、人は我ら魔獣を恐れなくなった。そして、我ら魔獣との交流を求めた。我らもまた人の世に興味があつた。そして生まれたのが、新たな契約だ。人と魔獣が契約を結び、魔獣が魔力を持ったまま人の地で過ごすことができるようにしたのだ」

「ただし、我ら魔獣は、魔力はあれども、契約主の人間の同意なしには、己か契約主の命に危険が迫らない限り、人の地で人を害することができなくなった」

「しかし、この契約を悪用するものが現れた。魔獣にも人にも」

「そこで我らが一族は人の王族と新たな契約を結ぶことにした。契約を悪用し、世を乱す魔獣や人が現れた際に、我らが一族と人の王族が力を合わせて肅清を行うというものだ。この契約に則り、魔獣と人の仲介を行うのが、我らが使命だ」

ふむふむ、と頷いていた『くろいの』は、ふと疑問に思った。

「では、御母様。なぜ、私達の一族が、そのような使命を担うことになったのですか？」

それは、と母親は何でもないことのように告げる。

「我らが人間風に言々と魔獣の王族だからだ」

「へえ。……えっ」

そういえば、言っていなかったか、と悪びれもなく母親は言う。

「王族といっても、人間のように魔獣を統べたりはしない。我らが一族が魔獣において最強である。ただ、それだけだ」

（それって結構凄いことなのでは）

心の中で呟いた『くろいの』は、新たな疑問を抱く。

だが、聞こうかどうか迷っているうちに、弟妹の一匹が何の躊躇もなく母親に聞いた。

「では、御母様。御母様と御父様とでは、どちらの方が強いのでしょうか？」

御母様が口の端からギリリと光る牙を覗かせて嗤う。

「この私に決まっておろう」

御母様が、家庭内どころか魔獣最強の女王陛下であると知った日だった。

ちなみに、御父様がした『浮気』とは、王宮の料理長（息子5人娘3人を育て上げた女傑）に兔の蒸し焼きをねだったことらしい、と後に『くろいの』達は知ることになる。

その程度で『浮気』とは……とは口が腐つても言えない『くろいの』達であった。

なにしろ、その話をした時の御母様は毛を逆立て、尻尾を膨らませ、爪と牙をむき出しにした臨戦態勢だったからだ。お母さまがあれほど恐ろしいと感じたのは件の竜狩りくたんの時以来だった。

御母様は、御父様が自分以外の女性に食事をねだったことがよほどお気に召さなかったらしい。曰く、「我が朝一で生け捕りにして来た一角獣ユニコーンは食えず、他所の女に肉をねだるとは……！ 何たる侮辱！」だ、そうだ。

ちなみに、一角獣に対する定義は様々ある。

人間曰く、「神聖なる神の御使いであり、神殿が崇め奉る聖獣」

御母様曰く、「その肉は柔らかく、進む血は爽やかな喉越しの極上の逸品」

まだまだ出番のない憐れなお父様曰く、

「外交問題に直結するため人の地では手を出せない珍味。魔の森でならば喜んで食べるが、人の地で傷の一本でもつけようものなら、各所から非難轟々。抗議の意味でご飯のランクが下がるから、愛する奥さんが生け捕りにしてきたやつを広い心で見逃してやったら、家庭内での地位が下がった、我が逆恨み対象ナンバーワンな魔獣」

現時点では幼獣達の脳内に

「父親〃じょーそーきょういくにわるい」

という公式が燦然と輝いていることを幸か不幸か王都の父親は知らないのであった。

彼が幼獣達の誤解を解く日はまだまだ遠い。

【番外編】 3・5話、4・5話、6・5話、7・5話（前書き）

ネタバレがありますので、第7話までを読了後に読まれることをお勧めします。

【番外編】 3・5話、4・5話、6・5話、7・5話

パタパタと尻尾を振りながら『くろいの』が駆け寄ってくる。

「こんにちは！ 『くろいの』です」

『くろいの』は、元気よく一声鳴くと、後ろ足を落として座る。

「ここにあるのは、気が乗った時に活動報告に、おまけとして載せられていた小話です。作者が本編に載せられなかったネタ、妄想が止まらず書いてしまったネタ、脇役キャラクターがあまりにも哀れで書いてしまったネタなどがあります」

長いセリフを最後まで言い切り、誇らしげにこちら上目遣いに見上げてくる。

「最後に、以下の小話は、本編とは関係のないフィクションのフィクションです。実在の魔獣、群れ、『くろいの』などには多分関係ありません」

『くろいの』は最後にひときわ大きな声で鳴く。

「それでは、番外編をお楽しみください」

【第3・5話】『おまけの獣たち』

銀色の毛玉たちが、画面に向かって駆けて来た。

「こんにちはー」

「こんばんはー」

「おはよー」

「どもどもー」

画面に飛びつき、
カメラに噛みつき、
ガラス面を引っ掻く、
元気いっぱい幼獣達に、黒の獣（小坂晶）が慌てて待ったをかける。

「こちら。……はじめまして、『くろいの』です。

最近、異世界トリップを始めました。

せっかくの異世界なのですが、内実は、

『実録 大自然の大家族スペシャル』に長女役として出演している気分です」

首を傾げながら画面を見上げる『くろいの』の首筋を、巨大な銀色の獣がくわえて、持ち上げた。

「何をしているのだい？ 我が愛し子。ほら、ご飯の時間だよ」

母親の口にくわえられ、ゆらゆらと揺れながら『くろいの』は頷いた。

（成程、物心つく前の子供のほうが、この世ならぬものが見えやすいのは、人も魔獣も同じらしい）

「それでは、次の更新がいつかは分かりませんが、引き続き『So What?』をお楽しみください」

母親は心配そうに我が子を見つめた。

「……愛し子よ、腐ったネズミでも食べたのかい？
獲物は新鮮なうちに腹に納めなくては駄目だよ」

その後、大丈夫だと言っても聞いてくれない母親に、
薬草だといって青と赤の斑の茸を食べさせられた『くろいの』だ
った。

【第4・5話】『その後の彼ら』

地面に伏せて、いじけている『くろいの』に弟妹たちが、必死で
話しかける。

「『くろいの』、ほら、カエルの丸焼きだよっ」

「ネズミのしっぽ、あげるー」

「ウサギの肝臓もあるよー」

「イナゴの蒸し焼きっ」

『くろいの』の耳がびくびくと動く。

やったっ、と思わず尻尾を振る弟妹たちは気付いていなかった。

弟妹があげる、おどろおどろしい珍味の数々に、

自分の周囲がどれだけ黒魔術的なゲテモノに埋め尽くされている
のか、

怖くて『くろいの』が顔を上げられずにいたことを。

【第6・5話】『御母様の瞬殺くつきんぐー』

「まず、獲物を見つけることだ」

御母様は蒼の瞳をギラギラと輝かせた。

「そして、一撃で倒す。噛みついててもよいし、面倒なら魔力を使ってもよい」

グワツと開けた口の中には、鋭い牙が見える。

「最後に、食らう。ポイントは、骨のかけら一つも残さないことだな」

先日食べた竜を思い出したのか、舌舐めずりなさる御母様。

「命は尊いものだ。それを頂くのだから、全てあまさず腹に納めなくてはならない」

満足げな溜め息は、大物の竜を食べた時の幸福感を思い出してのものだろうか。

「以上、御母様の瞬殺くつきんぐー、でした。……後半は食べることにしか語ってなかったのは気のせいかな？」

前世ではファンタジー世界において最強を誇る竜をあつさり倒した御母様に、

『母は強し』という言葉を実感した『くろいの』だった。

【第7・5話】『かわいそうな御父様を慰める会』

頂垂れた一匹の魔獣がいる。

出番はなく、
王都に単身赴任中で寂しい男魔獣の一匹暮らしが続き、
愛する妻と幼獣たちに会うこともできない、
哀れな獣が。

そんな彼のもとに、天使のごとく銀と黒に光り輝く幼獣が舞い降りた。

一匹は涙で濡れた彼の目元を毛繕いしてやる。
「よしよし」

一匹は哀愁漂う彼の背中を前足でタシタシと叩いてやる。
「がんばれー」

一匹は彼が愛してやまない妻とよく似た声で鳴く。
「どうやって浮気に怒り狂った御母様から生き延びたの？」

一匹は彼が愛してやまない妻によく似た蒼の瞳を輝かせて問う。
「本当に、じょーそーきょうういくに悪いのー？」

そして、とどめの如く、最後の一匹が慈愛に満ちた表情で告げる。
「兎のパイは美味しかったですか？」

「天に昇らせ、遙か高みから地に落とす、か」

無垢な幼獣^{てんし}ほど残酷なものはないと、
悪夢に魘^うされ飛び起きた一匹の魔獣は、

銀色に光る水滴をその瞳から零しながら呟いた。

【8】漆黒の魔方陣

その日、草原には霧雨が降り注いでいた。

幼獣達は、魔の森と草原の狭間で身を潜ませ、じつと草原の獲物の動きを窺^{うかが}う。

彼らの視線の先で草を食^はむのは——一角獣^{ユニコーン}だ。

ことの発端は、御母様が遂に幼獣達に父親について話した時のことだった。

幼獣達の体格は、今や母親の半分ほどになっている。

そろそろ、王都に知らせをやる日も近いと思った御母様は、渋々と御父様について語り出したのだった。

その晩のことは、『くろいの』にとって、思い出さたくない出来事No.1となった。

最初の頃こそ、未知なる「父親」について瞳を好奇心で輝かしていた幼獣達だったが、次第にその耳は伏せられ、尻尾は丸められ、最後には全員がお互いを守る様に一か所に固まって丸くなることになった。

御母様は非常に御父様に対して御立腹らしかった。

話し始めのうちは、いつも通り優しく幼獣達に語りかけていた。だが、話が浮気話に移る頃には、怒りを隠しきれず、皆^{みな}を決し、牙を剥き出しにして、尻尾を膨らませ、無意識のうちに臨戦態勢となっていたのだった。

さながら竜を食らわんというが如く。

哀れな幼獣達は、話の間中「御母様こわい」と全員で固まり尻尾をぶるぶると震わせていた。

『くろいの』は、その時の光景を思い出して背筋の毛を逆立てる。

（確かに、浮気話というのは幼獣じゅむの教育に悪い。しかし、話の内容自体よりも、般若のような御母様の顔の方が、幼獣達に深刻なトラウマを残した気がする）

さて、人間とは、嫌な記憶はすぐに忘れてしまふ生き物であると『くろいの』は知っている。そして、それは魔獣にも当て嵌まることらしい。

翌日、弟妹達が覚えていたのは「一角獣は美味しい」という部分のみだった。

どうやら、昨夜の恐怖体験は、彼らの記憶の奥底にパンドラの箱として封印されたらしい。そして、当たり障りのない、自分達にとって興味深い事柄だけが記憶の表層に取り残された結果、第一回『珍味を探せ！ 一角獣狩り』が開催されることになったのだった。

茂みに潜みながら『くろいの』は、ふっと遠い眼をした。

結局、弟妹達の脳内辞書における「父親」の項目は「じょうそーきょういくに悪い」のままとなった。知ってか知らずか、御母様はそれを放置している。今のままの状態で王都に行けばどうなるだろうか。……泣き崩れる御父様の姿が見える気がする。無邪気な青の瞳でそれに追い打ちをかける弟妹達の姿も。高らかに勝利の雄叫びをあげる御母様の雄姿も。

この家庭問題を收拾できるのは自分しかない、と『くろいの』は憂鬱な溜息をひっそりとついた。夫婦喧嘩は犬も食わない。父親に似て美食家な彼女にとっては、つらい仕事になりそうだ。

『くろいの』が母親をどう説得すべきかと目を伏せた瞬間、獲物に動きがあつた。一角獣が突如として走り始めたのだ。魔の森とは反対方向に草原を一直線に駆けていく獲物を弟妹達が追いかける。一瞬遅れて、『くろいの』も走り出し、一角獣に苦い思い出のある母親は少し離れて幼獣達を追う。

この弟妹達との僅かな距離が、後に彼らの命運を分けることになる。

次第に雨脚が強まり、魔獣たちの視界を悪くする。

一角獣は思いのほか逃げ足が速かつた。

それでも、かなり森から離れてしまったが、弟妹達がようやく一角獣を囲むことに成功する。それを見て、四匹いれば十分だろうと一歩引いて彼らの狩りを見守ろうとした『くろいの』は、ふと違和感を覚える。

弟妹達は、獲物しか見ていなかった。

だから、彼らは気がつかなかった。

だが、彼らから一歩引いていた『くろいの』は気がついた。

己の足元の泥濘ぬかるみで鈍く光る——漆黒の魔法陣に。

「逃げる！」

叫ぶと同時に、魔力で風を呼び、獲物もろとも弟妹達を陣の外へと吹き飛ばす。

そして、『くろいの』自身も飛び退ろうとした瞬間、魔法陣は閃光を放った。

「しまっ——」

閃光に目を焼かれた母親と幼獣達の視力が回復した後、彼らが目にしたのは、何事もなかったかのように雨が降りしきる草原だった。そこには一角獣の姿はなく、そして……『くろいの』の姿もなかった。

その日、雨の降りしきる草原に銀の獣達の慟哭が響き渡った。

【9】謹んでお断りいたします。（流血描写あり）（前書き）

この話には多少の流血表現と残酷描写が入ります。苦手な方は、お気を付け下さい。

【9】謹んでお断りいたします。（流血描写あり）

眠りについてた意識が浮上する。

まだ重い瞼を開こうとして、『くろいの』は違和感を覚える。

（……あれ、変だな。体が重くない。何時もだったら、とつくに誰かの枕になっているはずなのに）

弟妹達は非常に寝相が悪い。

母を囲んで半円状に並んで寝たはずが、翌朝になると、

一匹は酔っ払いのごとく仰向けになって大の字で鼾をかき、

一匹は玩具である竜の頭骨を齧りながら、『御母様最強』と寝鳴^{ねい}きを洩らし、

一匹は歯ぎしりをしつつ、狩りの夢でも見ているのか、鋭い爪で地面を引っ掻き、

一匹は姉を枕に満足げに眠りにつき、

『くろいの』は鼾・寝鳴き・歯ぎしり・重みの四重奏によって素晴らしい悪夢に魘される。

……というのが幼獣達の日常であった。

だが、

（鼾も、寝鳴きも、歯ぎしりも、重みもない。それに御母様の気配も……っ！）

——漆黒の魔法陣による召喚魔法。

意識を失った理由を思い出し、『くろいの』は慌てて飛び起きる。だが、四本足で立ちあがったはずなのに、何故か視線が低いままだ。

疑問に思っ て下を向いた『くろいの』は息を呑む。

視線の先にあるのは、細く頼りない前足だった。
まるで、生まれたばかりの幼獣のような小ささだ。
震える前足を持ちあげて裏を覗きこむ。

まだ大地を踏みしめ慣れぬ幼い肉球が、そこにはあった。
いつも以上にプニプニしていた。

（なんで……！ 年齢が逆行した！？ いや、でも、なんか変だ）

そこで、『くろいの』は気がついた。

（魔力が使えない！）

己の魔力が無くなっていることに。

周囲を見回すと、己は見知らぬ部屋の檻に入れられているようだ。
魔法陣も部屋も檻も人が作り使うものだ。
つまり、『くろいの』を浚ったのは人だ。

（では、ここは人の地！？）

人が魔法陣で魔獣を人の地に飛ばす。

それは魔獣に対する敵対行為だ。

下手をしなくとも魔獣と人の友好関係を崩壊させることになる。

まともな人間のやることではない。

従って、この召喚がろくな目的であるはずがない。

違法な犯罪に使われる己を想像して、『くろいの』は身を震わせた。

（逃げないと……）

何とか冷静さを取り戻した『くろいの』だったが、状況は良くなかった。

彼女は鉄の檻に入れられていた。
魔獣であった頃ならばともかく、仔犬となった今は無理だ。

途方にくれる『くろいの』の目の前で部屋の扉が光り、一人の女が扉をすり抜けて中に入ってきた。

「あら、可愛い仔犬さん」

赤い髪の女が、自分を覗き込んでいる。

女は、真っ赤な唇をニイと歪めて仔犬に囁いた。

「良い魔獣が手に入ったわ」

獣の本能で後退さった『くろいの』に、女はクスクスと笑う。

「そんなに怖がらなくともいいのに。さて、あなたは何の魔獣だったのかしら」

毛を逆立て威嚇する『くろいの』を観察して女は首を傾げる。

「犬、ねえ。魔力が無くなったら犬になる魔獣って多いのよね。」

ああ、そういえば、と女は呟く。

「銀の女王も、犬の系統だったわよね」

『銀の女王』。

心当たりがある『くろいの』は動揺を押し隠そうと必死に女を睨みつける。

「まあ、それはないか」

女がふつと嗤う。

「天狼は蒼の瞳に銀の毛並み。こんな真っ黒な仔犬になるはずがないもの」

勝手にそう結論付けた女は、歌うように言った。

「さて、じゃあ、始めましょうか」

そう言って、女が何事かを呟き、手を無造作に振った瞬間、

赤が散った。

『くろいの』の右前脚から。

「……………」

激痛に『くろいの』は奥歯を噛みしめ、攻撃魔法を放ってきた女を睨みつけた。深く傷つけられた右前脚を庇いながら、唸り声を上げる。

そんな『くろいの』を見ながら女は口を歪める。

——嬉しくてたまらないというように。

「ごめんなさい。後で治してあげるからね」

自分で傷つけておきながら何を言うのかと『くろいの』は憤る。

「貴女の血が欲しかったの」

（血……まさかっ）

『くろいの』の脳内に、最悪の可能性が浮かぶ。

「さあ、こちらに来て。血を交換しましょう。最後に、私が貴女に名前を付ければ、契約は完成するわ」

（やつぱり。この人の狙いは、人と魔獣の契約だ）

破棄不可能な永遠の鎖。

それが魔獣と人の契約だ。

互いの血を飲み、魔獣に人が名を与えることにより成立する契約は、一度結ぶと破棄できない。永遠に魔獣と人を縛ることになる。

「ほら……早くこっちに来なさいっ！ この馬鹿魔獣！」

（絶対に、いや）

後退り、女に近寄ろうとしない『くろいの』に、女が先に痺れを切らした。

再び、女が攻撃魔法を放とうとした瞬間だった。

部屋を閃光が満たした。

目を焼かれ、何が起きているのか全く見えない状態で『くろいの』の耳に、

爆発音、

大人数が駆け込む足音、

女の呪詛、

何かが吹き飛ばされる音、

何かが引きずって行かれる音が聞こえた。

何が起こっているか分からず、固まっている『くろいの』の頭上から低い男性の声が降ってきた。

「おい、仔犬がいるぞ」

すると、誰かが近寄ってきて、若い女性の声がした。

「団長。この犬、怪我をしていますよ」

金属が歪む破壊音がして、『くろいの』は誰かに抱きあげられた。その声の調子と野生の勘で、どうやら、この人間達は敵ではないと分かってはいた。それでも、思わず身を固くした『くろいの』を宥めるように、ごつごつした手が『くろいの』の頭を撫でる。

「ブルク。治してやれ」

「はい」

優しい男性の声が詠唱を唱え、『くろいの』の額に触った。
すると、前足の痛みが消え、目の裏のチカチカが治まった。

そつと目を開けると、目の前に柔和そうな顔立ちの若い男性がいた。

この人間がブルクらしい。

「ありがとう」と一声鳴いた『くろいの』だったが、その声は可憐な仔犬のものだった。魔力を使って思念を込めたわけではない台詞が、人間達に届くわけもなく、『くろいの』を無視して彼女の頭上で彼らの会話は続く。

「団長」

長い金髪を後ろで束ねた女性が、『くろいの』を抱き上げたまま指揮を取る男に呼び掛ける。

見上げると、『団長』は黒眼黒髪の強面の男性だった。

「なんだ」

「他にも実験動物がいる可能性があります」
もっともだ、と男は頷き、他の人間達に、爆破の前に中に生き物がいないか確認しろ、と指示を出している。

そんな団長を見上げながら、『くろいの』は溜息をつく。

色々と疑問は多い。

あの女は何者だったのか。

この人間達は何者なのか。

ここはどこなのか。

もしかして自分はただの仔犬だと思われているのか。

だが、一番の問題は……自分が一角獣ユニコーンを食べのがしたことだ。

「お腹が空いた……」
腹の音と共に哀しげな仔犬の音が響いた。

【10】闇色の仔犬と銀狼騎士団

「ほら、モニカ。肉だぞ」

ほどよく焦げ目の付いた牛肉が、掌に乗せられて差し出される。運ばれてくるステーキを見た瞬間から期待に目を輝かせていた闇色の仔犬は、きちんと一口サイズに切られたそれを、慣れた様子で滴る肉汁まで余すことなく平らげた。

「団長。行儀が悪いですよ」

同じテーブルについている金髪の女性が、もはや恒例のお小言を始めるのを、その向かいに座っている亜麻色の髪の男性が宥める。

「まあまあ、いいじゃないですか、副団長。こんな田舎で王都のようにお貴族様のマナーを守ったところで意味はありませんよ」

「ですが、ブルク……」

まだ何か言いたげな副団長に苦笑して、ブルクは仔犬に目をやる。「じゃあ、副団長は、あの期待に輝く瞳に抵抗できるっていうんですか」

そう言われて、彼女は言葉につまる。

テーブルにステーキが運ばれてくる前から、牛肉の焼かれる香ばしい匂いに、仔犬はそわそわと鼻を動かし尻尾を振っていた。そして、いざ運ばれてきて団長が食事を始めれば、その一挙一動を仔犬は食い入るような視線で凝視した。団長を見つめる、まん丸な瞳は「ステーキ食いたい！」という仔犬の心からの願いを教えてくれる。加えて、空腹を訴える切なげな鳴き声というサービスピス付きだ。

仔犬の愛らしくも憐れめいたおねだりという凶悪な心理的圧迫に屈した彼が、ステーキを分け与えるまでそれほどの時間はかからな

かった。団長が与えなくとも、この最高に愛らしい仔犬のおねだりに、誰かが負けていただろう。

副団長とて、可愛い仔犬のおねだりは聞いてやりたい。だが、それも、時と場合による。団長の足元で尻尾を振っている闇色の仔犬を視界に入れないようにしながら彼女は団長に訴える。

「やはり、どんなに辛くとも心を鬼にして抵抗すべきです。ここは、我々銀狼騎士団の専用食堂なので、モニカに餌を与えるのは団長の自室であるべきでしょう」

彼女らしい真面目な台詞を愉快そうに聞きながらも、仔犬のためにステーキを切り分ける手を団長が休めることはなかった。

「エレナ。お前の真面目な性格はお長所であり短所でもある。たまには肩の力を抜くことも大事だぞ。魔の森に最も近いハイデンベルグなどという人の地かも怪しい場所で意味のない貴族の食事作法など守ってどうする。食事は楽しむことが一番大切だ。なあ、モニカ？」

己の名を呼ばれたと分かったのか、おんっ！ と幼い声でモニカが返事をする。

そして、エレナの方に向かって短い四足でトコトコと歩いてくる。「な、なにかしら」

何かを訴えるように見上げてくる、つばらな瞳にエレナがたじろぐ。

見つめあつたまま動かない一人と一匹の様子に耐え切れなくなつたブルクが嘔き出した。

「な、なんですか、ブルク」

失礼、と言いながらもまだ肩を震わせているブルクが、調理場の
ある方を指させば、エレナが頼んだ子羊のソテーを給仕が持つてく
るところだった。

どうやら、モニカの次の獲物^{ターゲット}は、エレナの子羊肉らしい。

さて、今日の勝者は、モニカ（常勝無敵の『食堂に巣くう可憐な
小悪魔』）かエレナ（鉄壁の常識を誇る『銀狼騎士団最後の良心』
）か。

背後で騎士達（団長を含む）が賭けを始めるのに、仔犬から目を
そらせずにいるエレナは気づいていなかった。

目の前に置かれたナイフを、エレナは震える手で握る。皿に乗せ
られた子羊肉に、慎重に切れ目を入れ、フォークを突き刺して口に
運ぼうとするが、まるで見えない障壁があるかのように途中で手が
止まってしまう。

軋む首を横に向ければ、期待に目を輝かせた闇色の仔犬がいる。
フォークを下に、仔犬のいる方に降ろせば、仔犬の目がぱあっと
輝く。

フォークを上、エレナの口に近づければ、仔犬の目が残念そう
に曇る。

それを何回か繰り返して、エレナは諦めたような溜息をつく。後
ろで「よし、やっぱりモニカの勝ちか！」という歓声が聞こえたよ
うな気がしたが、それどころではないエレナは気にしなかった。

おもむろに子羊の肉を刺したフォークを皿の上に置くと、団長の方に向きなおった。

「団長。用事を思い出しました。私は私室に一度戻ります」

一人と一匹の攻防を興味深げに観察していた団長から許可が下りすると、エレナは子羊肉の乗った皿を持っていそいそと自室に戻った。もちろん、仔犬が尻尾を振りながら、その後を追う。

あつけにとられた騎士達は誰がどの結果に賭けたかを書いた紙をみやる。まさかの、お持ち帰り（子羊＋仔犬）という結果を、誰が予想しえただろうか。誰もかけていなかったに違いないと不成立による賭け金の返還を要求しようとした彼らは、大穴場を当てた勇者の名が、そこに燦然と輝いているのに肩を落とした。

幸運なる本日の勝者は、満面の笑みで掛け金を胴元のブルクに要求する。

「まだまだ、お前達も読みが甘いな。エレナは真面目だが頭が固いわけではないぞ。時々この俺も驚くような奇抜な発案をするくらいだ」

団長はそう言うと、十中八九、子羊肉を全て仔犬に与えてしまうだろう勝利の女神エレナのために、軽食を彼女の部屋まで運ぶよう女性騎士に指示を出したのだった。

【11】銀の女王の御子を探せ！

闇色の仔犬は床に伏せ、組んだ前足に顎を乗せて瞑想する。

もちろん、エレナ嬢から譲ってもらった子羊肉の蕩ける様な柔らかみと濃厚な旨味について、ではなく、『くろいの』自身の現状と今後どう行動すべきかについて、だ。

銀狼騎士団の会話を盗み聞きしたところ、どうやら、『くろいの』を魔法陣で浚った女は違法魔術師だったようだ。

あの日、銀狼騎士団が部屋に押し入ったのは、あの女を違法実験と凶悪犯罪の容疑で捕えるためだった。そして、彼女の目的は、強大な力を手に入れること、それだけだったようだ。特に政治的な意味や裏で糸を引く人物もいなさそうなことに、『くろいの』は胸を撫で下ろした。万が一、『くろいの』を浚って、御母様を言いなりにしようと人間達が企んでいた場合、まず間違いなく御母様の激怒で王都が火の海に沈むことになっていただろう。

（私のために人類が滅亡することにならなくて良かった……）

あの女が単独犯であつたのなら、犠牲も彼女一人で済むだろうと、その時『くろいの』は考えた。御母様が、人を襲うところを見たくはなかったが、事が事だけに、彼女の激高を止められる存在が、魔獣にも人にもいるとは思えない『くろいの』のだった。

違法魔術師に捕らえられていた『くろいの』は無事、銀狼騎士団に保護された。『魔術の実験台にされていた犬』だと勘違いされていることには気づいていたが、女への取り調べや部屋で何が行われ

ていたかの調査の中で、自分が『銀の女王の仔』であると騎士達が気付いてくれるだろうと、『くろいの』は楽観視していた。

だが、世の中そう上手く事が運んではくれない。

まず、違法魔術師が何の自供もしないうちに自害した。

どうやら、あの女は不治の病であつたらしい。その病を治すために強大な力を求めた、というわけだ。そして、違法な魔獣召喚は彼女にとって最後の希望であつた。だが、銀狼騎士団に捕まつたことで彼女の最後の望みは絶たれた。絶望した女は、定期的に飲まなければ病状が悪化する薬をわざと飲まず、騎士団が気付いた時には、もはや手遅れの状態だつたらしい。

団長は悔しげに「事前調査が不完全なまま逮捕の許可を出した俺のミスだ」と唸っていた。『くろいの』は、落ち込んだ彼の膝に乗り、慰めるようにその顔を舐めてやった。

（あの日、貴方が踏み込んでくれなければ、私はあの女と契約することになっていた。だから、ありがとう。ヴォルデ団長）

第二の問題は、銀狼騎士団が女のアジトを捜査するところではなくなつてしまったことにある。彼らは今、別の案件に忙殺されているのだ。

それは——『銀の女王の御子誘拐事件』である。

下手をしなくとも人類滅亡の危機だ。既に死んでしまった違法魔術師ごときの事件を調べている時間も人的余裕も銀狼騎士団にはまったく無かつた。

夜のお話の中で、この大陸に国は一つしかない、と御母様はおっしゃっていた。

かつて、魔獣と人が争っていた時代に、国同士が争いを起こしている場合ではないということの一つの国に統合したらしい。国境も利害も民族も超えて人類を一致団結させた御母様の偉業は某平和賞に値する、とかつていた戦の絶えない世界を思い出しながら『くろいの』は尊敬のまなざしを御母様に向けた。

そして、人間達は、今まさに当時の恐怖を思い出していた。

今、かつて国を一つにするほど人類を追い詰めた銀の魔王の復活が迫っている。再び、人々は一致団結して、これを阻止せねばならない！

王宮のバルコニーから熱く語る国王に、王宮の広場に集まった民衆は熱狂的な喝采を叫んだという。

銀の女王の御子が何処に飛ばされたかが不明のため、国中に緊急の布令が発せられ、今や国民全員が銀の女王の御子を探していた。見つからなければ、古の銀の魔王が復活すると、歩き始めたばかりの幼児から杖をついた老人まで動員されている。

当然のことながら銀狼騎士団もまた朝から晩まで銀の女王の御子を探して領地を駆け巡っていた。

東に蒼の瞳の仔犬がいると聞けば、飛んでいき、
ただのヌイグルミに脱力し、

西に蒼の瞳の可愛い子がいると聞けば、駆けてゆき、
その可愛いウェイトレスさん、僕とお茶しないか？ とナンパ

しているところを、上司に見つかり、こつてり絞られ、

南に銀色の毛玉があると聞けば、飛んでいき、
見事なシルバーブロンドのおじいさんに「儂も探しておるんじや
が、なかなか見つからんのう」と慰められ、「おじいさんも御無理
はなさらないでくださいね」とおじいさんを気遣い、

北に銀色の光が見えたと聞き、駆けていけば、
ただの親爺のはげ頭に、最近ストレスが多い自分の後頭部が気
にかかる。

そんな生活を送っている銀狼騎士団員達は過労死寸前、といっ
た体だった。

彼らはある勘違いをしており、そのために御子を見つけれず
いた。

そう、彼らは勘違いしていた。
銀の女王の御子は、『銀色』であると。

それは、無理からぬことではあった。

銀の女王の一族は代々、蒼の瞳に銀の毛並みの天狼といわれて
きたのだから。

まさか、御子が黒い瞳に黒い毛並みであるとは、誰も思わな
かったのだ。

かくして、誰も銀狼騎士団が最近飼いだめた闇色の仔犬が、銀
の女王の御子だとはいまだ気付いていないのであった。

【12】迷子の迷子の魔獣さん、貴女のお家はどこですか？

『くろいの』が、団長のヴォルデによってモニカと名付けられ、この銀狼騎士団の飼い犬となって半月が経っていた。彼女とて魔の森に帰るよう努力しなかったわけではない。

モニカは……言語の壁にぶち当たっていた。例えるならば、正面衝突で木端微塵といった感じだ。

モニカは、銀狼騎士団員が言っていることを理解することはできた。どうやら彼らは御母様専属の精鋭騎士団らしい。魔力の強い人間で構成されており、その会話にも無意識のうちに魔力が込められ、その思念をモニカに伝えてくれる。

だが、逆にモニカがいくら彼らに話しかけても、

「なんだ、腹が減ったのか？」

「あら、ミルクが欲しいのかしら？」

「ほら、スープに使った牛の骨をやるよ」

と、いった風に、まるで分かってくれない。魔力で思念を込めていないのだから仕方がないのだが、モニカにはどうしても納得できないことがあった。

（なんで、私が鳴いたら、お腹が空いているってことになるの？）

そう、モニカが鳴くと誰かしやが何かしら食べ物を与えるのだ。

そんなに物欲しそうな顔をしているのだろうか、とモニカは眉間に皺を寄せながら、先ほどエレナ副団長から貰った牛の骨を齧る。傍から見れば、仔犬が与えられた骨に夢中になっている愛らしい光景にしか見えない。頭上の机で書類を作成しているエレナが、時々モニカを見ては満足げに微笑んでいるのだが、彼女はそれに気づいていなかった。

文字を書こうと試みたこともある。だが、一つ大きな問題があった。

それは、プニプニの肉球が筆を握るのに邪魔、ということではなく、もっと根本的な問題で、そもそもモニカはこの世界の字が読めなかった。アルファベットに似ているが、単語も文法も元の世界の者とはまるで違い、モニカにはさっぱり分からなかった。

仕方がないので、自力で魔の森に帰ろうとしたこともあった。だが、銀狼騎士団の宿舎からモニカが一步出た瞬間に……未だかつてなく怒り狂った御母様の咆哮がモニカの首元から放たれた。思わず尻尾を膨らませて見れば、モニカのしている銀色の首輪から発せられているようだ。

そして、銀狼騎士団の宿舎は、大パニックに陥った。

「なんだ！？ 魔王の来襲か！？」

「原因を探せ！」

「火事！？？」

「事件だ！」

モニカがいた裏口に、宿舎にいた騎士達が大集合することになった。

どうやら、モニカが勝手に宿舎から出ないように首輪に警報魔術がつけられていたらしい。御母様の怒りの咆哮は、銀狼騎士団にと

って非常警報と同じ扱いだった。複雑な気分になるモニカだったが、娘の自分が聞いても、御母様の怒声は、確かに生存本能が激しく警報を鳴らす音だと認めざるを得ない。

余談ではあるが、この怒りの咆哮は、例の一角獣事件の際にブルクが録音したものだそうだ。騎士団NO.3という肩書と優しい顔立ち、穏やかな物腰に騙される人間が多いが、ブルクの二つ名は『銀狼騎士団の愉快犯』である。

「団長。こんな警報魔術はいかかでしょうか？」

「ほう、面白いな。確かにコレなら寝てるやつも飛び起きて臨戦態勢をとるだろう」

好奇心から警報魔術に銀の女王の咆哮を組み込んだブルク、面白そうだからと採用したヴォルデ。まさに、この上司にしてこの部下あり、な二人組であった。

「何を考えているのですか！」

そして、そんな二人の引き起こす騒動の後始末を毎回しているのが、『銀狼騎士団最後の良心』であるエレナ副団長であった。咆哮警報事件でも、後日二人にたっぷり御説教を食らわせた。

「モニカ、ちよつとこちらへいらっしやい」

当然、モニカもお叱りを受けることになった。叱責というよりも懇願に近いものだった分、質^{たち}が悪かった。いつも料理を分けてくれるエレナが、ただの動物でも分かる思念を意識して込めて、心からモニカを心配してる『お願い』を断れるはずがなかった。

モニカはエレナの『お願い』以後、宿舎を脱出することをあきらめた。

それは、宿舎の外が自分の予想以上に危険であるとエレナの話から分かったからだ。話しているエレナはモニカが理解できるとは思っていなかっただろうが、モニカは思念の意味するところを正確に読み取っていた。

「宿舎から一步でも出れば、怖い人に浚われることになりますよ。良い仔だから外に一匹で出ないでください」

その言葉でモニカは思い出した。
すっかり忘れていたが『くろいの』は希少種であったのだと。

この世界において純粹に「黒色」の動物は非常に珍しい。それは、黒色の魔獣に限ったことではなく、闇色の仔犬モニカもまた、コレクターや研究者にとつて垂涎の的であった。モニカにわざわざ警報魔術付きの銀の首輪が贈られたのは、誘拐防止の意味もあったのだ。

満足に人間に抵抗できない仔犬の身では、魔の森まで一匹で行くのは無理だ、とモニカは尻尾を垂らした。それを見て、叱りすぎたか、とエレナが慌てたのは、また別の話だ。

モニカは、自力脱出をあきらめ、親から離れた仔の取るべき王道手段を取ることにした。すなわち——「親が迎えに来るまで動かない」。運動は中庭で十分できる。たまた、ヴォルデやエレナ達が街を散歩させてくれることで気晴らしもできる。ご飯も美味しいし、文句のない環境だった。

完全に飼い犬化する前に御母様が迎えに来てくれるのか、それだけが心配な毎日をモニカは過ごしていた。くよくよしても仕方がない、獣生^{じんせい}何とかなるさ、が座右の銘の彼女らしい、素晴らしい適応

能力だった。

【12】迷子の迷子の魔獣さん、貴女のお家はどこですか？（後書き）

10 / 17 タイトルを変更しました。

【13】銀狼騎士団の夜

魔獣は、人の地においては魔力を封じられ、ただの獣となる。例え最強を謳われる魔獣の一族といえども、モニカもまた、人の地ではただの闇色の仔犬であつた。

さて、エレナの自室でモニカが仔犬らしく牛の骨を齧っている頃、銀狼騎士団達は今日も今日とて銀の女王の御子を探して東奔西走していた。

月に照らされた裏路地で、一人の男が隣と同僚に囁いた。

「おい。聞いたか？　とうとう副団長がモニカに堕ちたらしいぞ」

ゴミ箱の蓋を開け、中を覗いていた同僚が、振り向き頷く。

「ああ。団長が自室にモニカを連れて行こうとしたら、『仕事の邪魔になります』って副団長が抱き上げて行っちゃったらしいな」

その通り、と男は持っていた牛の骨を振り、横道の先に広がる暗闇に向かって「御子様ー」と呼びかける。

「確かに御仔関連の書類が山積みとはいえ、モニカが邪魔になるってこたあない。あいつは、賢い仔犬だからな。どう考えても副団長がモニカといたかつたってえだけだろ」

「御子様、いないんですかー」と呟くと、男は何を思い出したのか、軽く嘖き出す。

「ブルクが言ってたんだが、モニカをお預けされた団長は、気に入りの玩具を奪われて半泣きの子供のようだったんだとよ。想像できるか？　仔犬を奪われて半泣きの団長なんて。『魔王の牙』とまで

言われる銀狼騎士団長様が、だぜ？」

脇に停めてある馬車の下を覗き込みながら、同僚は男の台詞を鼻で笑う。

「さてな。モニカに一昨日の晩、鶏肉のシチューを分けてやっていた奴なら知っているぞ。その誰かさんは、仔犬の体に悪いからと料理長に頼んで玉葱を抜いた特製シチューにしてもらったらしいが」

ぎくりと肩を揺らした男は、「料理長め……」と呟くと、屈んだままの同僚の背にどかりと腰を降ろして月を見上げた。降りろ、と喚く同僚を無視して男は呟く。

「俺も、この半年、モニカが一番好きな羊肉しかも骨付きしか食べていない人間だったら知ってるぜ」

ぴたり、と動かなくなつた同僚に、男は囁く。

「なあ。やっぱりお前も、あいつにするのか？」

ふんつ、と鼻を鳴らした同僚は、己に腰掛ける男を睨みあげ、返答する。

「当然だ。俺は負ける賭けはしない」

の割に人生最大の賭けである結婚相手がアレかよ、と笑う男に、余計な御世話だ、賭けをするだけの度胸もない独身男め、と笑い返す同僚。二人は視線を合わせて頷きあつた。

「『銀狼騎士団ランキング 無差別格闘級部門 第一位 予想ジヤンボ』は、モニカで決定」

『銀の女王の御仔探索 夜間部隊』所属の二人は、結局全員がモニカに賭けたために不成立になることになる賭けの金で何の骨を買うかを相談しながら、再び搜索を続けるのであつた。

魔獣は、人の地においては魔力を封じられ、ただの獣となる。例え最強を謳われる魔獣の一族といえども、モニカもまた、人の地ではただの闇色の仔犬である——はずなのだが、本獣^{ほんにん}の知らないところで最強認定されているモニカだった。

さて、如何なる敵もその円な瞳^{まなこ}には勝てない、素敵に無敵なモニカは、牛の骨を齧り終わって満足げな溜息をついていた。ちょうどいいタイミングで部屋の扉が開き、ブルクが顔を出す。

「副団長。そろそろお休みなつてはいかがですか」

あともう少し、と手を休めようとしないう副団長に、ブルクが溜息をついた。そのまま彼は扉を大きく開いて中に入ってきた。その隙間からモニカは素早く抜け出した。自然と閉まる扉の隙間から、慌てて彼女を追おうとするエレナを、ブルクが素早く抱きしめて捕まえたのが見えた。目を丸くしたモニカの前で、扉が軋んだ音ともに閉まる。

「団長の部屋に行つたのでしょうか。モニカはもともと団長の飼いだ犬ですよ？ ……ただでさえ最近は大忙しで一緒にいらねえつてのに、俺よりも仔犬を取るつていうのか？ エレナ」

「ブ、ブルク。ちょっと落ち着きなさい」

扉の向こうの様子を少し窺っていたモニカは、漏れ聞こえた会話に尻尾を膨らませ、慌てて団長の部屋に駆けて行つたのだった。

【13】銀狼騎士団の夜（後書き）

10 / 17 タイトルを変更しました。

【番外編】 8・5話、10・5話、11・5話、12・5話、13・5話（前巻）

ネタバレがありますので、13話までを読了後にお読みください。

【番外編】 8・5話、10・5話、11・5話、12・5話、13・5話

パタパタと尻尾を振りながら闇色の仔犬が駆け寄ってくる。

「こんにちは！ モニカです」

『モニカ』は、元気よく一声鳴くと、後ろ足を落として座る。

「ここにあるのは、気が乗った時に活動報告に、おまけとして載せられていた小話です。作者が本編に載せられなかったネタ、妄想が止まらず書いてしまったネタ、気に入りの脇役キャラクターへの愛があふれたネタなどがあります」

長いセリフを最後まで言い切り、誇らしげにこちら上目遣いに見上げてくる。

「最後に、以下の小話は、本編とは関係のないフィクションのフィクションです。実在の魔獣、群れ、『くろいの』、銀狼騎士団などには多分関係ありません」

では、とモニカは最後にひときわ大きな声で鳴く。

「それでは、番外編をお楽しみください」

【第8・5話】『その日、王都に衝撃が走った』

「へ、へい、陛下——！」

朝議中に駆け込んできた兵士に、国王は何事かと尋ねた。

兵士が手を震わせながら渡した伝令を、彼は思わず床に落とす。

窓辺で寝そべっていた銀の魔獣は、ゆっくり身を起こすと、その内容を覗きこむ。

そして、欠伸を一つして、こう呟いた。

「人間の食べ物も今朝の仔羊のソテーで食べおさめか」

物騒な台詞に、国王が思わず魔獣を怒鳴りつける。

「縁起でもないことを言うな！」

魔獣は鼻を鳴らした。

「縁起も何も、確定された未来の事実だろう。せいぜい竜の逆鱗^{げきりん}よりも怖いものに触れてしまった己が同朋を悔いるがいい」

冷たく言い放つが、蒼白になった国王を哀れに思ったのか、
一つ溜息をつくど、優しく声をかけてやる。

「……伝説の異世界召喚でもしたらどうだ？ 毎回、あいつと話を
つけてきたのは、他所の世界の女だろう？」

国王が肩をがっくりと落とした。

「どうせ、異世界の料理が食べてみたいだけだろう。お前は」

そんなことはないぞ、と目を泳がせる獣に、国王は深い溜息をつく。

「我が王国の事情に異世界人を巻き込めるものか。他人の家庭の事情に巻き込まれるのが如何に迷惑かは、どこぞの魔獣どものおかげで、身に染みて分かっているからな」

心当たりがありすぎる獣は、とりあえず、尻尾を振ってごまかし

てみる。

嫌みのうちはいいが、実力行使に出られて、料理のランクが下げられては、たまったものではないからだ。

「これからどうするのだ？」

「まずは」

国王は、絨毯の上に落ちた伝令を睨みつけて言う。

「この伝令を飛ばしたやつを伝令石で呼び出して、何が起ったのかを説明させる。省略しすぎだ」

だがな、と魔獣は伝令を眺めて首をかけた。

「まだ生きていればな」

赤い絨毯の上、白い伝令には、こう書かれていた。

『魔王、光臨』

【第10・5話】『銀狼騎士団の最強コンビ』

モニカに仔羊肉を与えてしまっただろうエレナのために
ライ麦パンに塩漬けのサーモンとトマト、胡瓜を挟んだサンドイ
ッチを持って

部屋に向かった女性騎士が見たのは、

満足そうに口の周りを舐めているモニカと
仔犬を抱きしめてご満悦なエレナという、

ハートを打ち抜く破壊力抜群の光景だった。

「ありがとうございます」

丁寧な礼を言いつつもモニカを離そうとしないエレナに、彼女の膝の上で丸くなって昼寝を始めるモニカ。

女性騎士は決意した。

『第13回 銀狼騎士団員が選ぶ今年一番可愛いもののランキング集計前だよ！ 予想ジャンボ』

は、エレナとモニカの同率首位に賭けよう、と。

【第11・5話】『眠りに落ちる子に物語る伝説』

料理長は、せっかく作った子牛のシチューを末っ子がつまみ食いしようとしているのに気がついた。5つにも満たない幼い子供の手が、ぐつぐつと煮込まれて良い匂いを漂わせている鍋に延びている。「こら、ハンス！」

首をすくめたハンスに、眉をしかめて怖い顔を作って母親は言う。「悪い子は、銀の魔王様に食べられてしまっんだよ！」

そこから滔々と魔王の恐ろしさについて子どもが半泣きになるまで並べ始めた料理長に、背後から複雑そうな声がかかった。

「……確かに彼女は悪食だけど、さすがに人間の子供は食べないよ」

見れば、銀の魔王、もとい、銀の女王の番が厨房の入り口つがいにいて、

しきりに鼻を動かしていた。

「君の美味しいシチューの方が何倍も魅力的だからね」

魔獣にシチューを与えた料理長は、その晩、末っ子に物語を聞かせた。

誰もが知る伝説の魔王の話を。

かつて、銀の女王は、銀の魔王と呼ばれていた。

それは、その狩りの残忍さからでもあった。

生きとし生けるものはすべて彼女の獲物とされた。

時には同朋の魔獣でさえ餌としか認識していなかった彼女に、本当に美味しいものとは何かを教え込み、ついには美味しい人間の料理が食べたいと彼女にねだって、人間との間に和議を結ばせた、

あの銀の女王の番のことを古の人はこう呼んだ。

『勇者』と。

だから、毎日、料理長は腕をふるって料理を作る。

人と魔獣に希望をもたらした、我らが愛すべき食いしん坊魔獣のために。

エレナは、夕食後の至福の一時を過ごしていた。
あむあむと牛の骨を齧るモニカに、自然と笑みが零れる。

真ん丸な漆黒の瞳

短くてふさふさの尻尾

滑らかでサラサラの毛並み

銀狼騎士団の小悪魔にすっかり骨抜きにされてしまった副団長だった。

その日、騎士団の裏教訓に新たな一文が加えられた。

「機嫌の悪い副団長にはモニカを与える」

【第13・5話】『男と同僚の会話』

男がふと思い出したように同僚に話しかける。

「そういえば、この前『銀狼騎士団員が選ぶ可愛いものランキング』があっただろう」

いきなり何の話かといぶかしげな表情で同僚が頷く。

「ああ。ブルクが表ランキンと裏共に主催したやつだろ？」

ふざけたことを、と副団長に怒られてたよな、と同僚は呟く。ちなみに、彼はモニカの単独首位に賭けて、まあまあの臨時収入を得た。

「ブルクのやつ、エレナ副団長に投票した野郎共に手加減なしで稽古をつけたらしいぜ。どんなに怪我をしてもブルクが治癒魔術で治

しちまう無限地獄だったとか、馬鹿の一人が言ってたぜ」

同僚は苦笑した。

「それは確かに馬鹿だな。エレナが可愛いだなんてブルクの前で絶対に言ってはならない台詞だろうが。ブルクは独占欲の塊だぞ？あいつの悪ふざけは、エレナに叱られたくてやってる部分があるよな。そのうちモニカにも嫉妬するようになるんじゃないのか？あいつ」

ありうる、と笑いだす二人のことを、月は呆れながらも優しく見守っていた。

（仕事中なのに、あんなにいい加減で、いいのかしら）

（モニカのことにはまだ人の一族は気付いていないのね）

（どうか、銀の血族が小さき娘とその親しき者たちに、幸多からんことを）

【14】一人と一匹の夜

部屋の扉はかすかに開き、明りが暗い廊下に洩れていた。

ちょうど、仔犬一匹が通るのにちょうどいい隙間を、モニカは尻尾を振りながら通り抜ける。室内を見渡せば、予想通り、執務机でヴォルデはまだ書類仕事をしている。モニカは板張りの床を蹴り、そのままの勢いで机に飛び乗った。

執務用の机の上には書類がうずたかく積まれていた。通常の書類に加えて、銀の女王の御子関連の書類が毎日大量に発生しており、それは、さしもの銀狼騎士団団長でも処理能力を超える量であった。それでも、彼は全ての隊員の報告書に毎晩目を通し、翌日の搜索計画を練っていた。

夜目のきく仔犬の瞳は、ヴォルデの目の下に隈ができているのを見逃さなかった。モニカは申し訳なさそうに耳を伏せ、尻尾を垂らす。彼らが必死で探している自分は、ここにいる。だが、それを伝える手段が彼女にはなかった。

（私の意志を伝える方法……。一つだけ、まだ試していないものがあるけど……）

だが、それは、本当に最後の手段だ。

モニカは首を振ると、きつと顔を上げ、トテトテと卓上をヴォルデの方へ歩いてゆく。

月は既に地に近づき、朝の日が昇る時が刻々と近づいてきていた。もう少しすれば、空が白み始めてしまっだろう。

（その前に、少しでも寝かせないと）

モニカは知っている。ヴォルデが、この半月ろくに睡眠を取っていないことを。銀の御子搜索で忙しいのは分かるが、このままでは彼が倒れてしまう。

よってモニカは最終兵器を発動させることにした。

銀狼騎士団ランキング 無差別格闘級部門 第一位の名は伊達ではない。

異世界の日本においてモニカは可愛いものが大好きな女子高生だった。

そんな彼女だからこそ、知っていることがある。

例えば……純真無垢な仔犬の、つぶらな瞳の、凶悪なほどの可愛さ、とか。

山積みの書類を上手いこと避けながら、書類の一枚の上に、ちょこんとお座りをする。そして、団長を見つめる。ひたすら、みつめる。コツは、首を横に傾げ、かすかに尻尾を振ることだ。

「……モニカ」

書類から目を離さずにヴォルデが窺めるような声でモニカを呼ぶ。

当然、無視する。そして、そのまま、キラキラと輝く瞳でモニカはヴォルデを見つめ続けた。名前を呼ばれて嬉しい！ というように尻尾を大きく振り、耳をピンと立てる。

「……」

沈黙が落ちる。団長が書類をめくる音と、モニカが尻尾を振る音のみが室内に響く。

「モニカ、その書類の上から降りろ」

沈黙を破ったのは団長だった。眉間に皺をよせ、睡眠不足から目を血走しらせている。だが、モニカは動じない。この程度、竜にかぶりついた御母様の迫力と比べたら、何でもない。

なあに？ という風に、モニカはヴォルデを見つめる。自分の四足が踏んでいる書類が、ヴォルデが次に読むべきものだ、と、気づいていないかのように。

溜息をついたヴォルデが、モニカに向かって手を伸ばしてくる。それをヒラリとかわすと、彼女は書類をくわえて机から飛び降りた。

「こらっ！ モニカ！」

モニカを捕まえようとする手を躲して、彼女はそのまま、部屋の隅にある簡易ベッドに飛び乗った。タシタシとベッドを叩くモニカとヴォルデがしばし睨みあう。

「……はあ」

溜息をつきながら、険しい表情のヴォルデがこちらに来る。モニカは書類の上に伏せて、上目遣いに彼を見上げた。

「モ―ニ―カー」

「おんっ！」

睨むヴォルデにキラキラ瞳のモニカ。そおっとモニカに両手を伸ばしたヴォルデは、そのまま彼女を抱きしめて、ベッドに横になる。書類が一人と一匹の下敷きになりぐしゃぐしゃになってしまったが、彼らはまるで気にしなかった。

「モ、ニカ。明けの刻になったら起こしてく、れ……」

そう呟くと、ヴォルデは仔犬を抱きしめたまま、寝息を立て始めた。

（お疲れ様、ヴォルデ）

ヴォルデの腕の中、モニカは彼の顔を見上げる。眉間に皺をよせ、目の下には隈を作り、髭は伸びて、肌も心なしに荒れている。

（限界、かなあ）

想像以上に大事になってしまった。このまま飼い犬ライフを楽しんでいた気もするが——きっと、弟妹達は泣いている。御母様は激怒しながら心配している。

（帰らないと）

そう、帰るのだ。己の巣へと。

モニカは前世、女子高生だった。だが、今の彼女は魔獣だ。彼女の家族も、魔獣だ。

人の地に来て、懐かしくなかったといえば、嘘になる。
二本足で歩き、笑い、戯れる人間達。
かつて自分も、世界こそ違うが、あの輪の中にいた。

だが。

（今、私が帰るべき輪は、魔の森にある私の巢、私の群れ、だ。）

眼を閉じれば、銀の毛玉達が、優しい蒼の瞳が、モニカを『くろいの』と呼ぶ声が聞こえる。夢の中、弟妹達とモニカは御母様に見守られて、狩りをする。寝ぼけて噛みついたヴォルデの悲鳴で目が覚めるまで。

【15】咆哮する闇色の獣（前書き）

軽くですが、流血描写があります。苦手な方はお気をつけください。

【15】咆哮する闇色の獣

目の前が怒りで真っ赤に染まる。

抗えぬ獣の衝動がこの身を焦がす。

目前の敵に向かい、モニカは本能の赴くままに咆哮した。

その日、闇色の仔犬は中庭で休憩中の団長と遊んでいた。モニカは、目前で揺れる麻の紐に、飛びつき、噛みつき、引っ張る。ヴォルデは、紐と戯れる仔犬を見て頬を緩めながら、絶妙なタイミングで紐を引っ張り、モニカの牙から奪還し、彼女が捕まえられそうに捕まえられない位置で再び振り始める。そんな一人と一匹に、溜息をついたエレナが、団長に仕事に戻るように説教を始めようとした時、急に表が騒がしくなった。

何事かと顔を上げたモニカとヴォルデの視界に移ったのは、揺れる腹を抱えて、ペンギンのようにえっちらおっちらと巨漢を揺らしながら中庭に入ってくる、派手な身なりの中年神官であった。一瞬眉を顰めたヴォルデは、すぐに愛想笑いを浮かべると、柔らかな声で男に挨拶をした。

「これはギルバート殿。このようなあばら屋までお越しいただくとは。さて、本日はどのような御用件でいらっしゃったのか」

ヴォルデは、片手は背に、もう片手を腹にやると、そのままゆっくりと腰を折り深く礼をした。

優雅に貴族式の礼をとったヴォルデに、神官は横柄に頷き返した。

「ふん。まったくだな。こんな魔の森近くの何の面白みもない辺境まで、わざわざ、この儂が来てやったのだ。せいぜい感謝するかい」

ひどく偉そうな台詞に、モニカは耳を立て、尾を膨らませる。だが、男に唸ろうか迷いながら団長と副団長を伺えば、二人は慣れた表情で男のもののいいを受け流していたため、彼女は三人の様子をしばらく観察することにした。

「御子探しが難航しているようだな。喜べ。パレヴィダ神殿の副神官長たるこの儂が直々に女神ローネルシアに御子の行方に関して御伺いを立ててやろう」

だが、とギルバートは下卑た笑みを浮かべてモニカを見やる。

「儀式には供物が必要だ。幸いなことにお前達にはちょうどいいものがある。なに、供物と言っても殺しはしまいよ。儀式が終わった後は、珍重な黒の獣として我が神殿で大切に世話をしよう」

三人の視線がモニカに集中した。

ギルバートの目的が、モニカであることはもはや明白であった。黒色の獣は貴重だ。闇色の仔犬を所有することで神殿に箔をつけるつもりなのだ。

モニカは不安げにヴォルデ達を見上げた。今、銀狼獅子団の地位は危なくなっている。銀の女王直属であるにも関わらず、御子を探し出せずにいるためだ。ギルバートは、その弱みに付け込むつもりのようにあった。

ヴォルデはモニカを背後に庇い、ギルバートの値踏みするような視線から彼女を隠しながら、慎重に口を開いた。

「大変ありがたいお申し出ですが、銀の女王陛下は神に属さぬ身。教徒でない御方の御子の行方を尋ねれば、女神の機嫌を損ねることになりかねないのでは？」

この国の国教は多神教であり、女神ローネルシアはそこで崇められる神の一柱に過ぎない。まして、魔獣の女王たる御母様が人が崇める神如きに膝を屈するわけがない。教徒ではないことを口実に、やんわりとギルバートの申し出をヴォルデは断った。

「ふむ。確かに、銀の女王が、我らが崇高な女神の真価を理解していないのは確かだ。しょせんアレは獣だからな。だが、我らが女神ローネルシアは慈悲深き御方。あの銀色の罪深き獣にも情けをかけて下されようぞ」

自分達が仕える銀の女王に対するあまりの言いように、たまらず、といったふうにエレナがギルバートにむかって、異議を申し立てる。

「失礼ながら、ギルバート殿。少々お言葉が過ぎるものではありませんか？」

反論されたことに気分を害したのか、ギルバートは顔を赤に染めてエレナを睨みつける。彼女睨みつけると、ギルバートはヴォルデを語気荒く怒鳴りつけた。

「部下の躰がなっておらぬな。先王の落胤だからといって思いあがるなよ。貴様が団長などという地位につけたのは、双黒の髪と瞳を国王陛下が珍しがっただけであらう。お前の無能さ加減は、幼獣一

匹見つけれぬ今回の件で、皆よく分かっておる。……ああ、無能なのは、貴様一人ではなかったな。貴様を含めた団員全員が役立たずの穀潰しよ。銀狼騎士団などという大層な名前はお前達には不相応だな」

正直に言おう。

モニカはそろそろ我慢の限界だった。

前世、女子高生であった頃の知識があるとはいえ、こちらで魔獣として生まれてまだ一年もたない彼女の思考は、年若い体に引きずられて思慮深さを欠く傾向にあった。

つまり——気が短かった。

そんな彼女にとって、御母様を馬鹿にし、ヴォルデ達を嘲るこの男の発言は許しがたいものであった。今すぐ、噛みついてやりたいと思う程度には。

魔獣にとって人に血を流させる攻撃は、契約を強制させられる可能性を含むため、本来最後の手段とされるものである。だが、その危険性を無視してでも、噛みつきたくなるほどに、この男に対してモニカは腹を立てていた。

それでも、モニカが大人しくギルバートの暴言を聞き流していたのは、ヴォルデ達の体面を慮ったことであつた。ここで、騒ぎを起こせば、ますます彼らの立場は悪くなる。そもそも、彼らの地位を危うくした原因は、モニカ自身の失踪にあつたのだ。これ以上彼らに迷惑をかけるわけにはいかないと彼女は考えていた。

だが、そんなモニカの堪忍袋の緒を切る声が、次の瞬間彼女の耳

に届いた。

「闇色の仔犬と一時的に離れることになるうとも、寂しがることはないぞ、ヴォルデ。優しき教皇様は、貴様に今回の一件の責任を取らせるために、我らが神殿に身柄を預けるよう、国王陛下にお願いしているそうだ」

それは、幽閉の宣告だった。

御子を失ったのは、人間側が原因だ。

御子が見つからないのは、人間側の不手際だ。

では、誰が責任を取る？

人間達が責任のなすりつけ合いを始めていることは知っていた。だが、まさか、その白羽の矢が、ヴォルデに立つとはモニカは思ってもいなかった。

「黒などという汚らわしい色を持つ気味の悪化け物どもめ。我らが純白の一角獣様と真反対の色を待つ貴様達は、前世でどのような悪行を犯したのであるうな？」

目の前が怒りで真っ赤に染まる。

抗えぬ獣の衝動がこの身を焦がす。

目の前に向かい、モニカは本能の赴くままに咆哮した。

（今、今、この目の前のニンゲンという獣は、何といったか？）

『黒などという汚らわしい』

（黒が汚らわしい？ 罪深い？ この、私が、瞳に、毛皮に、宿すこの闇色が？ 御母様に弟妹達に『くろいの』と呼んでもらえる、この私の誇りである、黒色が？）

己が誇りに思う黒色を貶されたモニカは怒りに打ち震えた。

突然、咆哮した仔犬に、ヴォルデは驚き振り返る。ギルバートは、そんな一人と一匹に嘲笑を浴びせる。

「まったく。本当に驕がなっておらぬな。黒色は、世間では、珍しい色合いだからと珍重されているようだが、我らが神殿は、お前達を甘やかしはしまいよ。愚かなお前達が己の罪深さを知ることができるように、仔犬共々しつかりと驕直してやろう」

そのまま、下卑た笑みを浮かべて、ギルバートは、言葉を連ねる。御子探して国が混乱している今、国側に神殿の圧力をはねのける余力はない。ヴォルデの神殿への幽閉は既に決まったも同然だ。役立たずな銀狼獅子団は、解散ということになる。

そして、彼の話が、銀の女王の討伐隊の編成についての話になり始めた時に、それまで俯いていたモニカが、いきなり顔を上げた。彼女は、険しい顔をしてギルバートを睨みつけていたヴォルデに後ろから体当たりする。

ヴォルデは、背後からの突然の衝撃に、バランスを崩して片膝をついた。何事かと、足元に顔を向けた彼の視界一杯に黒が広がる。直後、唇に温かな感触が当たった。驚いた彼が口を開ければ、生ぬるい何かが入ってきた。それが仔犬の舌だと分かると同時に、彼は鉄の味が口の中に広がるのを感じた。

突然のモ二力の奇行に空気が凍りついた中庭に、次の瞬間、猛烈な風が吹き荒ぶ。

目を開けていることができないほどの暴風に、
木々は枝という枝を鳴らし、葉を散らし、
花卉は空に舞い上がる。

ようやく風がおさまったのを感じ、恐る恐る目を開けた人間達が見たのは、一匹の魔獣であった。

夜の闇を思わせる黒の瞳、
艶やかに輝く漆黒の毛並み、
人一人を容易く飲み込む巨体、
中庭に満ちる濃密な魔力の気配。

彼らは、その魔獣が属する一族を知っていた。
忘れるはずがない。

人は彼らを恐れ、敬い、長き時を共に歩んできた。
色こそ銀と黒と異なっているが、この獣はまごうことなく――

「天狼……」

無意識のうちにエレナが呟く。

彼女をチラリと見やった魔獣は、すぐに視線を天にやり、はるか魔の森に届かんばかりの大音上で咆哮した。鳴き声に含まれる魔力が、そこに含まれる思念を、声を聞く生き物全てに伝える。

「御母様ー！ パレヴィダ神殿のバカ副神官長にいじめられましたー。助けてー。御母様ー！」

その雄々しい姿とは裏腹に、内容は、いじめられたと親に言いつける子供そのものだった。冗談ではなく、文字通り、モンスターペアレント来襲の予感に、ギルバート副神官長は固まった。

目を丸くしていたヴォルデとエレナは、その思念を聞くやいなや、モニカの目前で、片膝を地面につき、騎士の礼を取る。

「黒き、気高き、天狼の御方よ。貴女様は銀の女王が御仔であらせられましょか」

モニカは尻尾を一振りして、それに答える。

「いかにも。我は天狼が一族、銀の女王が第一子『モニカ』」

その名乗りに、やはり、と複雑な顔をするヴォルデにモニカは耳を垂らす。

「……ヴォルデは、私と契約を結ぶの、嫌だった……？」

尻尾を垂らし、しょぼんと肩を下げる姿は、見る者の罪悪感をこれでもかと刺激するものであった。慌てたのはヴォルデだ。

「いえ、私などが、銀の女王が御子様と契約を結ぶなどとは、恐れ多く……」

未だ幼さを残す丸い瞳がヴォルデを見つめる。

「ヴォルデは私のことが嫌い？」

へ？ と目を丸くするヴォルデに、畳みかけるようにモニカは鳴く。

「私はヴォルデのことが好きだよ。だから、契約を結んだ。本来、契約にふさわしいもふさわしくないもない。大事なものは本人達の意志。最上の友とする相手と結ぶのが契約なのだから。」

だから、と未だ耳を垂れたまま、モニカは言う。

「ヴォルデが私のことが嫌なのであれば、私は魔の森から人の地に出ないよ。二度と、貴方の目に触れないように」

哀しげな瞳のモニカに、ヴォルデは仕方のない方だ、と笑う。

「嫌いなどということがありませんか。我らが騎士団が、難航する御子探しに追いつめられる中、貴方様の存在にどれだけ救われたことか。結果として、その御子は、貴方様だったわけですが……」

じゃあ、とモニカは、伏せていた耳を立て、尻尾を振りながら、期待に満ちた目でヴォルデを見つめた。

「私の盟友となってくれる？ 何者もその絆を分てない永遠の相棒^{とも}に」

ヴォルデは満面の笑みで、それに答える。

「喜んで」

さて、無事契約を結んだ彼らはまだ知らなかった。

西の空からぐんぐん近づいてくる銀色の光の存在も、彼らの背後で冷や汗を流している副神官長が後に銀の女王から受けるお仕置きの数々も、モニカが魔の森に帰ってから心配をかけた弟妹達の突撃を受けて押しつぶされることも。

そして、その次の春、銀の女王は四匹の御子を連れて魔の森から王都に帰還した。母親に生き写しの銀の毛並みに蒼の瞳を持つ御子達は、銀の女王とその番、国王夫妻や貴族達が見守る中、無事に各々が盟友とした王族と契約を結んだ。

王都では盛大な祝典が開かれ、その警備に奔走する銀狼騎士団団

長の隣には、常に闇色の仔犬が付き従っていたという。

【番外編】 14・5話、15・5話、幕間その1（前書き）

ネタバレがありますので、14話までを読了後にお読みください。
幕間その1『黒色を囲む銀色に細められた蒼色の瞳』は、活動報告
に掲載時よりも加筆修正してあります。

【番外編】 14・5話、15・5話、幕間その1

銀色の獣が悠然とした足取りで歩み寄ってくる。

「こんにちは。『おなが』と申します」

『おなが』は、流れるような動作で伏せて、こちらを上目遣いに見る。

「ここにあるのは、気が乗った時に活動報告に、おまけとして載せられていた小話だそうですね。作者が本編に載せられなかったネタ、妄想が止まらず書いてしまったネタ、感想欄等にあったりクエストにお答えしたものになりますの」

懐かしそうに蒼の瞳を細めると、『おなが』は夜の闇によく響く声で遠吠えをする。

「最後に、作者は一角獣が嫌いなわけではないそうよ。むしろ、フアンタジー小説の中ではお気に入りのお獣だと言っていましたわ。……私も、一角獣は嫌いではありませんわよ？ だって美味しいですもの。御母様とモニカお姉さまの好物でもありますし」

それでは、と『おなが』は最後にひときわ大きく咆哮する。

「どうぞ、心行くまで番外編をお楽しみになつて下さいませ」

***【第14・5話】『皆で食べるご飯は美味しいものです』

「まづい……」

御母様が狩ってきた鹿を食べながら、『ちいさいの』のが呟く。
無言で前足をかじっていた『おおきいの』は、それを聞き咎めて、
彼を窘める。

「与えられた命に文句を言ったらだめだよ、『ちいさいの』」

「でも、『ちいさいの』の気持ちもわかるわ。ずうっと、この洞窟の中で御母様が狩ってきた獲物を食べるだけなのですもの」

既に食べ終えた『おなが』が嘆息する。

食べ終えた『ちいさいの』と『おおきいの』が彼女のもとへやってくる。

「『くろいの』、見つからないね」

「御母様が毎日、人の地にある砦に行っているのに」

「魔力がないから、なかなか見つからないんだって」

うつむいた『ちいさいの』が、ぽつりとこぼす。

「『くろいの』、戻って来るよね？」

『おなが』が『ちいさいの』の頭を慰めるように舐める。

「もちろんよ。『くろいの』は私たちの誰よりも賢くて強いわ。
きつと帰ってくる」

それまで黙々と獲物を食べていた『みみなが』が、血まみれの顔を上げ、笑って言う。

「『くろいの』は俺たちの姉で、あの御母様の娘なんだ。心配することはないよ」

『おおきいの』が大きくうなづき、尻尾を振る。

「僕たちをこんなに心配させたんだ。帰ってきたら、『くろいの』に色んな料理を作ってもらおうよ」

弟妹たちは、口々に食べたい料理をあげていく。

「私は、鮭の刺身がいいわ」

「俺は、熊の丸焼きかな」

「じゃあ、僕は、兎の蒸し焼きがいいなあ」

『みみなが』は？ と聞いてくる幼獣達に、彼は笑って答えた。

「一角獣の踊り食いがいいな。今度こそ、捕まえて食ってやるよ」

幼獣達は、獣の笑いを浮かべる。

「そうね」

「あいつのせいでもあるし」

「御母様も恨みがあるって言ってたよ」

「いっそのこと、最後の一匹まで、狩っちゃおうか？」

生物多様性、などという言葉は彼らの辞書には載っていない。

幼獣達の不気味な笑い声が洞窟に響く。

荘厳な造りの神殿において、人間たちに崇められていた一角獣は、警鐘を鳴らす第六感に背筋の毛を逆立てて魔の森のある方向へ顔を向けた。生命どころか一族存亡の危機が彼らに迫っていた。

「息子&娘達よー」

御父様は、初めて我が仔に会うことができた感動に目を潤ませていた。

「初めまして、御父様。お噂はかねがね御母様から伺っておりまして」

御母様似の『おなが』が優雅に尾を振れば、

「美味しい料理を一杯知っているんですね？ 今度、教えていただけませんか？ ……一角獣の一番美味しい食べ方を」

御母様によく似た牙を剥き出しにして『おおきいの』が笑いかけ、
「魔力の扱いも上手いって御母様がおっしゃっていました！ モニカ姉さんの探索の時には、毛一本ほども役に立たなかったらしいですけど」

御母様によく似た蒼の瞳を『ちいさいの』がキラキラと輝かせ、

「情操教育に悪い存在だとも、おっしゃっていましたよ？ それで、御母様の機嫌を直す策は思いつかれましたか？ 王都に着いてから、ずっと避けられているようでしたが」

御母様によく似た銀色の毛並みの『みみなが』が面白がっている声で鳴いた。

あれ、これ何でデジャブ？ と御父様は耳を伏せ、尾を垂らして去って行った。

からかいすぎたかと焦った弟妹たちに、御母様に御父様を許すように説得に行っていたモニカは、一角獣の丸焼きでも送ったら喜ぶんじゃないの？ と提案した。

この彼女の一言により、後の世まで神殿の歴史書に残る一角獣の苦難の時代が幕を開けたが、それはまた別の話だ。

【幕間その1】『黒色を囲む銀色に細められた蒼色の瞳』

「ばかつ。ばかつ。『くろいの』のばかぁー」

「『おおきいの』なんて、ずっと『くろいの』を呼んで鳴いてたんだよ」

「それは内緒って言ったのに！ 『ちいさいの』だって、『くろいの』がないと、ご飯がまずいってずっと文句言ってたんだよっ」
「お腹空いたよー。『くろいの』の料理が食べたいよー」

住処の洞窟に入った瞬間、モニカは弟妹達に押しつぶされた。

完全に銀色の毛玉に埋もれることになったモニカに、御母様が苦笑する。

「こらこら。気持ちは分かるが、モニカが埋もれてしまっているよ、我が愛し子達よ」

その言葉に、弟妹達は、しゅしゅモニカの上からどいて、だが、まだ離れがたくて、各々モニカを取り囲んで甲斐甲斐しく乱れた毛並みを舐めて整えてやる。暫くして、モニカの顔を舐めていた『おなが』が、はっとしたように耳を立てる。

「『モニカ』……？」

モニカは照れたように耳を伏せ、しかし尻尾を盛大に振りながら胸を張って弟妹に告げる。

「人間と契約を結んで、名前を付けてもらったの。私の名前はこれからはモニカだよ」

弟妹達は、驚きに尻尾を膨らませて、モニカに詰め寄った。

「モニカ姉さん一匹だけ、ずるいー」

「モニカお姉様、どうして契約することになりましたの？」

「契約ってどんなだった？ モニカお姉ちゃん」

「その人間はモニカ姉に美味しいご飯一杯食べさせてくれる？」

弟妹達の口から改めて自分の名を聞き、気恥ずかしくなったモニカは、少し膨らんだ尻尾をごまかすように振ると、銀狼騎士団での生活を語り始めたのだった。子羊のソテーや子牛のシチューの話に、弟妹達は瞳をキラキラと輝かせて聞いている。

御母様は、そんな愛し子達の様子を、蒼の瞳を細めて見守る。銀の毛玉に黒の毛玉、ようやく、いつも通りの日常が彼らのもとに戻ってきた。

モニカが人の地で早くも契約を結んだことは御母様にとって予想外だったが、ヴォルデは彼女直属の護衛集団である銀狼騎士団団長であり、その人となりはよく知っている。

（あやつになれば、我が愛し子を任せても問題あるまい）

一応、これ見よがしに爪を光らせ、牙を剥き、唸るような声で、「我が愛し子を泣かせたら、どうなるか分かっていような……？」と、釘をさしておいたから大丈夫だろう。

ちらりとボロ雑巾のようになった副神官長に目をやるのも忘れなかった。目の前に分かりやすい実例があるのは大変良いことだ。人間の言葉で「百聞は一見に如かず」と言うらしい。なかなか良いことを言う、とお母様は満足そうに頷いた。

モニカから人の料理の話を聞き、食欲を刺激された幼獣達が、久しぶりに家族で狩りに行きたいとねだるのに、御母様は牙を光らせて笑う。

「御母様、今度こそ一角獣を捕まえましょう！」

「蒸し焼きだっ」

「刺身にしてやるぞー！」

「踊り食いもいいな……」

「『みみなが』、それは料理ではないのでは。あれ？ 踊り食いも食文化かな？ ん？」

よかるう、と御母様は獰猛な獣の唸りを洞窟に響き渡らせた。

「近々する、神殿狩りの予行演習とするか」

狩りの御許しが出た喜びに、盛大に尻尾を振る弟妹たち。

さらりと落とされた爆弾発言に頭を抱えるモニカ。

（神殿狩りって、紅葉狩りみたいに気軽に言っているけど、御母様、何をなさるおつもりですか！？）

本当に、彼らにとって、いつも通りの生活が戻ってきた。

【番外編】幕間その2 御父様の昔語り（1）

延々と広がる、赤く染まった大地。

その赤は、銀の魔王の炎が生んだ色。

その赤は、人と魔獣の血が生んだ色。

その赤は、憎悪に染まった命が生んだ色。

絶望に染まった世界の中、人間達の憎悪を、魔獣達の絶望を、一身に受けた銀の魔王は、ただ目前の命を食らい己が命を守ることのみを考えて日々を過ごしていた。彼女は、ただ生きるためだけに生きていたのだ。

項垂れた一匹の獣がいる。

彼の本名はクロードというが、人は彼のことを「銀の魔王の番」

「勇者」「食欲大魔獣」「へたれ御父様」「銀の賢獣」「要の天狼」

などと呼び、久しく彼の本名を呼ぶ者（獣）はいなかった。

（ああ、どうすればよいのだろうか）

夜の闇に沈む王庭で、クロードは一匹落ち込んでいた。耳を伏せ、尻尾を垂らし、項垂れる彼の背には哀愁が漂っている。彼は、とある家庭内問題を抱えていた。

事の起こりは、一年ほど前に突然妻が実家である魔の森に帰ったことから始まる。

その日、心優しい妻が彼の好物である一角獣を生け捕りにしてくれた。

クロードとしては嬉しかったが、哀しいことに、魔獣と人の橋渡しをする存在としての責任から、彼は人の地で一角獣を食べることができなかった。

一角獣は、女神ローネルシアが遣わした聖獣として3大宗派の一つパレヴィダ聖教が保護している魔獣だ。魔の森でこっそり密猟するならともかく、人の地で堂々と食べれば人間との間で外交問題が発生してしまう。

だから、クロードは、目の前で震えている大好物しかも愛する妻が彼のために生け捕りにしてくれた一角獣を泣く泣く逃がした。

後に抗議に来たパレヴィダ教皇には、「一角獣？ なにそれ、美味しいの？」と、誤魔化しておいた。真つ青になったパレヴィダ教皇が、「いいえっ。なんでもございません。ええ、食欲大魔獣様が御興味を持たれるようなものではありませんので、どうぞ、お忘れください。ささ、こちらは我らから銀の女王の番様に贈らせて頂く牛の丸焼きでございます。どうぞ、御賞味くださいませ」と必死に話を反らしてきたので、牛の丸焼きは美味しく頂戴した。

その後、一角獣を受け取らなかったことに不満げに尻尾を膨らませて早足に去っていた妻の御機嫌を取るために、クロードは彼女が好きな兎の蒸し焼きを作ってもらおうと料理長の下に向かった。

「先ほど牛の丸焼きを食べたばかりでしょう。太りますよ。私は、国王陛下に勇者様の健康管理もきちんとするようにいわれております。今週に入って勇者様は、はつきりいつて食べすぎです」

腕組みをして断固として拒否する料理長にクロードは慌てて尻尾

を振って鳴く。

「いや、私が食べるのではなくて妻にね」

懐疑的な目で料理長はクロードを見つめる。

「そうおっしゃって、先週も豚の腸詰めを御一匹で食べられておりましたよね」

渋る料理長に、焦るクロード。結局、彼は必殺上目遣いでウルウル目を使うことになった。

この「おねだり」は、外交上のカードとして非常に有効な手段である。だが、諸刃の剣でもあった。人間に換算すると30代の雄がする仕草ではないと、使う度にクロード自身も深い精神的ダメージを負うことになるのだ。だが、妻の機嫌を直すための料理が手に入るならばこの程度の恥、耐えてみせる！ と、彼は頑張った。

だが、彼は、この時、気づいていなかった。

他所の女に媚び媚びしている夫を、牙を剥き出して目をぎらつかせた妻が木陰から見つめていたことに。

結果として、彼の行為は妻の燃え盛る不満の炎に嫉妬という油を注ぎこみ、「実家に帰らせてもらおう！」という三行半宣言という衝撃の展開を引き起こす。クロードは慌てて王都の端まで妻を追いかけて行ったが、既に彼女は銀色の点ほどにしか見えぬほど彼方まで行ってしまった。

クロードは銀の女王を追いかけたい衝動を必死に押し殺した。彼は王都を離れるわけにはいかなかった。彼が王都を出れば、再び戦乱を人と魔獣の間に引き起こすことになってしまう。

それだけの要職を彼は担っていた。

それは、彼自身が望んだ事であった。

全ては銀の女王の番になるために。

その後、魔の森にいる妻に、王都に戻るように嘆願する思念を込めた伝令石を送るも、「どうやら腹に仔がいるらしい。ちょうどいいから、ここで生むことにする」とそっけなく断られた。だが、断られたこと自体より、伝令石の内容が問題であった。

「こ、こ、こども。こどもって――!」

事実に驚き、仔に喜び、傍にいられない己に悔しがるクロードを、「とりあえず、落ち着け」と国王が宥める。既に五児を王妃との間にもうけている彼に、父親として先輩の余裕を感じたクロードであった。

【番外編】幕間その2 御母様の昔語り（1）（前書き）

残酷描写がありますので苦手な方はご注意ください。

【番外編】幕間その2 御母様の昔語り（1）

人と魔獣の争いは幾世にも渡って続いた。人の住む大地は疲弊し、魔獣の住む魔の森も次第に魔力が枯渇しつつあった。

赤く染まる大地、

徐々に枯れてゆく魔の森の木々、

空しく失われてゆく数多の命達。

天狼の娘は、それをただ無感動な目で見ていた。

天狼は生きるために膨大な量の魔力を必要とする。魔の森から魔力を得て、足りぬ分は他の魔獣を食らうことで、ようやく彼らの体は満たされる。だが、長引く戦乱により、魔獣の頭数は減り、魔の森は疲弊した。生きるための魔力が足りず、同族は次々と倒れていった。

生き残ったのは族長が娘であつた彼女だけであつた。

彼女は生きた。天狼の最後の一匹としてその命を大地に魔の森に刻みつけるかのように。

銀の魔王だと、人に襲われたこともあつた。

——彼女は、魔の炎で『敵』を焼き払った。

魔獣の王を食らうことで力を得ようとした魔獣に狙われたこともあつた。

——彼女は、魔の炎で魔獣を焼き、『獲物』の魔力を食らった。

彼女は、ただ生きるためだけに生きていた。

どれほどの時を過ごした後であつたか、銀の魔王と同じ色彩を持つ、銀の髪に蒼の瞳を持った女が銀の魔王の元へと訪れた。女は、自分は異世界の民であり、銀の魔王の怒りを解くべく召喚されたといった。

銀の魔王は吠える。

「くだらぬ。怒り？　そのような感情を私は持つてはおらぬ。私が人を倒し魔獣を食らうのは、ただ己が生きるためのみ」

今にも己を食らわんとする魔獣に、怯えることなく女は懇願する。「このままでは、人と魔獣は、互いの最後の一人と一匹まで争いを続けるでしょう。銀の魔王、貴女は、魔獣の頂点に立つ獣としての戦乱に終止符を打つ義務がある。それは、貴女の御仔が生きる次の世を守ることにもつながります。銀の魔王よ。どうか、御力をお貸し下さい」

銀の魔王は思う。天狼は彼女一匹を残して滅びた。もはや、彼女が仔を抱くことはなからうと。人が滅びようと他の魔獣が滅びようともはや彼女には関係がない。

だが、何の気まぐれか、銀の魔王は女の願いを聞き入れた。

それは、愛しげに己の腹を撫でる彼女を見た時だった。自分の命ではなく、仔の命のために懸命な彼女の姿は、銀の魔王の心に小さな波紋を広げた。銀の魔王は、ふと、その命の行く末を見たいと思つたのだ。

その日、魔の森と人の地の境に、異変が起きた。

突如として、天空まで伸びる、銀に輝く薄絹のような障壁ができたのだ。

通り抜けることはできる。

だが、魔獣が人の地へ行けば、魔力を失いたただの獣となり、人が魔の森へ行けば、魔力を失い無力な獲物となった。

自然と、人は人の地で、魔獣は魔の森で、生きるようになった。戦乱以前のような住み分けがされるようになり、暗黙のうちに相互不可侵が守られた。

後に人は、これを魔獣と人の間に結ばれた契約によるものだと言い始めた。

結んだのは、人の王族と銀の魔王であると。

王族ではなく、異世界の女こそが契約者であるということは、時が流れた今となっては、銀の女王と少数の王族のみが知ることであった。だが、あの女が王族であるというのは、ある意味正しかった。正確には王族に『なった』だが。

人の地の王族は、銀の女王と同じ色彩の、銀の髪に蒼の瞳の者が多い。幾世も前の正妃の血は、確かに彼らに流れているようであった。銀の女王は時折、目を細めて彼らを見つめる。「食われるっ！？」と怯える者もいるが、彼女は意味深に尻尾を振って牙を剥きだすだけだった。

【番外編】幕間その2 御母様の昔語り（2）

後に銀の賢者と呼ばれる少年にとって人生は退屈なだけのものではあった。

願ったこともあった。

——温かな母の腕に抱かれてみたい。

だが、彼女は少年に触れようともしない。顔を見ることすら稀であつた。

祈ったこともあった。

——明日こそ、兄弟達と遊べますように。

だが、彼らは少年に近づきもしない。怯えた表情で遠巻きに彼を見てくるだけだ。

父王の命めいにより、幽閉された塔の中、本に埋もれた少年は今日も思う。

（今日の晩餐は何にしてもらおう）

「ご飯さえ美味しければ、後はどうでもいい」と齡よわい十にして諦観を蒼の瞳に浮かべた幼子は、扉を叩く音に魔術の教本から顔を上げた。これが、彼の人生を変える出会いの知らせであるとは知らずに。

銀の魔王が銀の女と契約を結んでから、数百年の時が流れた。その間ずっと、銀の魔王は、魔の森と人の地の間に障壁を張り巡らせ続け、魔獣と人の均衡を保たせてきた。魔の森では、枯れかけていた木々が息を吹き返し、再び濃密な魔力を魔獣達に与えるようにな

り、人の地もまた、赤く染まった大地が再び緑を取り戻し、人の活気で満ちあふれていた。

その日、木漏れ日に銀の毛皮を淡く光らせて、大樹の天蓋の下、銀の魔王は微睡^{まどろ}んでいた。ふと、彼女の耳が人の地がある方角に向く。伏せていた瞼の下から蒼の瞳が現れ、何かを探るように王都の方を見やった。

（何だ、私にも匹敵する、この魔力は）

銀の魔王は、ありえぬほど強大な魔力が人の地に突如として生まれたのを感じた。魔獣において最強を誇る天狼が最後の一頭、銀の魔王。彼女に比類するほどの魔力を持つ何者かが人の地に現れ、その濃密な魔力の波動が、遙か遠くにある、ここ魔の森まで届いたのだ。

（ありえぬ。人が、このような魔力を持つなど）

人間は本来的に魔力量の器が小さい一族である。太古の時代、魔の森に生きていた彼らは、強大な魔獣が跋扈する魔の森を逃れ、不毛の地である平原に移り住んだ。幾千もの時が流れ、平原は王都をはじめとする人の巢に埋め尽くされた。安定した暮らしを得た人の一族は、その高い技術力により、魔獣には行使できない複雑な術式を生みだし、魔獣に対抗するようになった。

だが、人の一族の、生物としての根本的な限界は変わっていない。例え、魔術具の助けを借りて強大な魔力を行使しようと、彼らの生来の魔力の器は小さいままだ。魔獣の王と同等の強大な魔力を持つ人間が生まれるなど前代未聞だった。

そこまで考えて、銀の魔王は一人の女を思い出す。銀の髪に蒼の瞳、銀の魔王と同じ色彩を持つ異世界の女は、王族の子を孕んでいた。銀の女の血は今でも王族に受け継がれている。

（あの異世界の女は高位の魔獣に匹敵するほど魔力が高かった。…先祖返りしたものが生まれたか。祖先である異世界の女を超える魔力をも持って。さて、どうしたものか）

尻尾を揺らしながら銀の魔王は思案に暮れていたが、日の光に温められた穏やかな風に、くあつと最奥の牙まで覗かせて欠伸をし、「まあ、少し様子を見るか」と再び昼寝に戻ったのだった。

魔獣にとつての『少しの時間』は、人間にとつて途方もなく長い時間になる。それは、彼らの寿命の長さの違いからくるものであった。

強大な魔力を持った人間が生まれてから、人の暦で十年ほどが経ったある日、何時も感じる強大な魔力の波動が弱まった。魔力自体が小さくなったというよりも、何かに遮られて感知できないようだ。

（人の子に何かあったのだろうか）

草むらに伏せた体勢のまま銀の魔王は暫し考えていたが、目の前を駆け抜けようとした一角獣に反射的に飛びつき、骨も残さず平らげようと食らいついた時に、良案を思いついた。

「久々に、王都へ行くか」

自分の不在中も障壁が維持されるように魔力を注ぎこみながら、銀の魔王は蒼の瞳を細める。思い出すのは、愛しげに己の腹を撫でる銀の女だ。あの女が、己の命をなげうってまで救おうとした子の子孫は、どのような人間であろうか。あの女のように、無謀で、無邪気で、変わった人間なのだろうか。銀の女と同じ、銀の髪に蒼の瞳を持つ人間を脳裏に描きながら、銀の魔王は牙を剥き出し微笑んだ。

二、三百年放置しても大丈夫なほど障壁に魔力が溜まったのを確認して、銀の魔王は人の地に降り立った。魔獣の王ともなれば、魔力を保持したまま人の地を訪れることも可能であり、彼女は天狼の姿のまま王宮を目指すつもりであった。

だが、障壁を通り抜けた瞬間、彼女は眩暈を覚えた。思わず四足を折り、そのまま平原に崩れ落ちる。

（なんとこの魔力の薄さだ……！）

濃密な魔力に包まれた魔の森に慣らされた彼女にとって、人の地の魔力は呼吸さえもままならぬほど薄く感じられた。立てぬほどの脱力感に、彼女は仕方が無く魔獣の形態を解き、魔力を持たぬ獣の姿を取る。

（獣の姿になったはよいが、目線が妙に低い）

銀の魔王は困ったというふうに短い尾を垂らし、耳を伏せる。数百年分の魔力を障壁に注ぎ込む作業は、本人が自覚する以上に彼女の魔力を削ったようだ。その影響で彼女は成獣の姿がとれず、仔犬になってしまっていた。

(……一度、魔の森に戻り、少し魔力を回復させるか)
溜息をついた銀の魔王が立ちあがろうとした時だ。

「あー！ 仔犬がいるー！」

突然、上から降ってきた幼い子供の声に慌てて顔を上げれば、少女が目を輝かせて彼女を見下ろしており、小さな紅葉の手が彼女の体を持ち上げた。固まった銀の魔王を抱きしめて、少女は歓声を上げる。

「ちっちゃーい。わあ、銀色だ。まるで、お伽噺の銀の女王様みたいだね！」

「おとーさん」と叫ぶ少女に銀の魔王が目をやれば、馬に乗り弓矢を持った男が、こちらに駆けてくる。

「リズ！ この馬鹿！ 危ないから一人でいくなつていったらうがっ」

馬から飛びおり、娘に怪我が無いか確認しながら、父親は彼女を厳しく叱る。ごめんなさいと謝り、腕の中の仔犬を強く抱きしめた少女に、苦しいと銀の魔王が四足をばたつかせた。仔犬の存在に気付いた父親の目が見開かれる。

「銀の毛並みに、蒼の瞳……？」

暫く仔犬を凝視していた男は、唐突に笑いだすと、仔犬ごと娘を抱きしめる。

「よくやった！ リズ！ この犬は金になるぞ！」

売るの？ と不満げな娘を片手に抱え上げ、父親は馬に乗る。

「銀の毛並みに蒼の瞳と言えば、銀の魔王陛下と同じだ。滅多にある色合いじゃないからな。この仔犬は、珍しいものが大好きな御貴族様御用達の商人に高く売れるぞ！」

自分の頭の上で親子が交わす会話を聞きながら、銀の魔王は、ふうむと丸い瞳を天に向ける。

（このまま売られるのも一興か。貴族が使う商人ともなれば、私を王都まで連れて行くかもしれない。商品を傷つけることはなからうし、愛玩動物として扱われるのであれば、貴族も悪い扱いはしまい。上手くいけば、楽に王都まで行くことができるな）

いざとなれば、魔獣の姿に戻り、周囲を火の海に沈めた隙に逃げればよい、と銀の魔王は頷く。

「私が見つけたんだから、私の仔犬なのー！」と泣き出した娘を慌てて宥める父親は、気づいていなかった。自分の娘が抱きしめている仔犬は、娘を泣かせたことでお叱りを受けることになる、愛する妻よりも、よほど恐ろしく、かなり物騒な伝説の生き物であることに。

【番外編】幕間その2 御父様の昔語り（2）

「国王陛下がクロード様を謁見の間にお呼びです」

少年——クロード・グランフォードは、溜息をつきそうになるのをぐっと堪えた。

（どうせ、ろくでもないことだろう。ああ、晚餐を食べ損ねたな。

……夜食は豪華にして貰おう。何を頼もうかな）

現実逃避しながらも、クロードは王に謁見するにふさわしい格好に機械的に着替えていた。何を言われ、何を命じられても、決して己が傷つくことが無いように、心に鎧を何枚も着せながら。

中央に王家の紋を配し、その周囲に繊細な金細工が施された重厚な扉に近づけば、左右にいる近衛兵が機敏な動作で敬礼し、謁見の間への扉を開いた。まず、目の前に広がるのは深紅の大河だ。王座に向かい広げられた、毛足の長い天鰲絨の絨毯。その心地良い踏み心地を堪能する余裕もなく、クロードは足を進める。

等間隔に吊るされたクリスタルシャンデリアには、夕刻であることもあり、既に灯りがともされ、澄んだ輝きを放っていた。天井に描かれた絵物語を縁取る彫刻にはめ込まれた宝石もまた、灯りに照らされ、色取り取りに輝いている。今のクロードの心境とは間逆に。

左右に続く白壁には、十二流の旗が掲げられている。まだ人の世が一つの国にまとまっていなかった古にあったという、十二の国それぞれの国旗だ。書物によれば、銀の魔王に対抗するために十二の

国は一つになったらいい。馬鹿馬鹿しい、とクロードは内心嗤った。少なくとも、ここ数百年誰も見たことがない銀の魔王なぞ、いるかどうかも分らないお伽噺の存在だ。十二国が一つになったのは、長く続いた人と魔獣の争乱の結果、国を一つにしなければ生き残れないほど、国々が疲弊したためだろうと、クロードは睨んでいた。

（都合の悪いことは、全て銀の魔王のせいにする。まったく、何時の世も人は変わらない）

王座に座るのは初老に差し掛かった男性だ。その隣に王妃が座り、王子王女が左右に並んでいた。自分を含め王族全員が揃うなど、滅多にあることではない。てっきり、自分一人が王に呼び出されたのだと思っていたのだが。

（一体、どうしたというのだろうか）

怪訝そうな表情を一瞬で消し、クロードは薄く微笑み、一段高いところにいる『家族』に礼を取った。

「クロード・グランフォード、参上いたしました」

長つたらしい口上も知っているが、少しでも早く塔に帰りたい、とクロードは簡潔な挨拶のみを述べる。

「うむ。お前を呼んだのは他でもない……我が子供全員に機会を与えてやろうと思ってな」

何の機会だと、怪訝に思いクロードが王を見やれば、その隣にいる王太子が「まあ、貴様が選ばれることはないだろうがな」と嘲笑を浮かべた。

「あれを、ここへ」

王の命令と共に、横の扉から銀の檻を抱えた近衛兵が入ってきた。その中にいたのは、一匹の仔犬であった。

「銀の毛並みに、蒼の瞳……！？」

クロードは驚きの声を上げた。仔犬は、伝説の銀の魔王と同じ色彩を持っていた。王が、普段冷静沈着な彼を驚かせることができるとに満足げな声で言う。

「お前が驚くのも無理はない。これは、ある貴族が、我ら王族こそが銀の魔王を従えるにふさわしいと献上してきたものだ。お前達の誰かにやろうと思っているのだ」

末姫が、欲しい！と王を見上げる。それを見て、他の兄弟達も是非自分にと王にねだりはじめた。それを手で制して、王は告げる。

「まあ、待て。全員が欲しがることは分かっていた。そこで、だ」

王は人の悪い笑みを浮かべた。

「仔犬に己の主人を選んでもらうことにする」

王座の前に一列に子供達は並ばされた。

彼らの前には、檻から出された仔犬がいる。

（くだらない）

クロードは、特に何をするでもなく、他の兄弟達から少し離れて立っていた。他の兄弟達は必死に仔犬の気を引こうとしている。己の所に来れば、銀の女王と同じ色彩を持つ、貴重な犬が手に入るのだから、自ずと熱が入ろう、とクロードはそれを冷めた目で見てい

た。

彼は動物に好かれた試しが無かった。クロードの持つ膨大な魔力に動物が本能的に怯えてしまうからだ。それは、人も例外ではない。己が腹にいた時から「腹にいるのは化け物ではないか」と言っていたらしい母も、「人ではないのでは」と己に近づかない兄弟も、「お前のためだ」といつて五年かけて作り上げた魔力を遮断する塔にクロードを閉じ込めた王も、皆、この魔力ゆえに自分を嫌う。

——だからきつと、今回も自分は選ばれない。

クロードは退屈しのぎに天井に描かれた絵物語を一つ一つ見ていった。白塗りの天井には、神話から歴代王家の英雄伝まで、多種多様な古から伝わる物語の絵が描かれている。それら全てが意味する話を、既にクロードは本から学んでいた。愚かにも、何時か兄弟に教えてやるのだと必死に覚えていた過去の自分を思い出し、クロードは小さく笑いを零した。

「おんっ！」

物語を辿っていたクロードの視線が止まる。

今、己の足元で、何かが幼い声で鳴かなったか？

恐る恐る目線を下げれば、そこには――

銀の綿毛のような、ふわふわの毛並みに、将来有望な太くて丸い手足を持つ仔犬が、短い尻尾はパタパタと振りながら、蒼色のつばらな瞳で、彼を見上げていた。

「勝負あつたな」

王の厳かな声が謁見の間に響く。

他の兄弟が抗議するのを無視して、王はクロードに微笑みかけた。

「その仔犬は、お前のものだ」

クロードは生まれて初めて仔犬を抱き上げた。

震える腕で抱きしめた命は、泣きたくなるほど暖かな存在だった。

後に銀の賢者と呼ばれた少年にとって人生は退屈なだけのものであった。

その仔犬に出会うまでは。

願ったこともあった。

——温かな母の腕に抱かれてみたい。

今、彼の隣には常に温かな仔犬がいる。

祈ったこともあった。

——明日こそ、兄弟達と遊べますように。

今、本を読むに夢中な振りをしている彼には、彼の服の裾を引っ張り、かまえーと訴える仔犬がいる。

何とか少年の気を引こうと必死な仔犬を可笑しそうに見ていた少年は、本を放り出し、仔犬を抱きしめる。彼の周囲にうず高く積み重ねていた書物が雪崩を起こしたが、一人と一匹は気にしなかった。

父王の命により幽閉された塔の中、本に埋もれ、仔犬を抱きしめたまま彼は悩む。

「晚餐は兎のパイにしてもらおうかな、それとも、クリステイーナが好きな兎の蒸し焼きにしてもらおうかな」

「うん。やっぱりクリスが好きな蒸し焼きにして貰おう」と少年は微笑み、腕の中の仔犬の頭を撫でる。仔犬は、おんつ、と嬉しげに一声鳴くと、自分を撫でる少年の手を舐めた。一人と一匹は、塔の番人が本に埋まった彼らに気づき、慌てて助け出すまで、ずっと寄り添っていた。

これが、彼女と彼の始まりの物語。

後に、銀の女王とその番つがいと呼ばれる、人と魔獣の關係に新たな形をもたらした魔獣夫妻の昔々の物語。

少年が魔獣となり、銀の女王の番となってから、人の世では長き時が流れた。今では、その正しい馴れ初めを知っているのは当人達のみとなってしまうた。人の世に残ったのは、多大な誇張と誤解を伴いながら語り継がれている『銀の魔王と勇者様』の物語だけだ。

さて、数々の偉業を称えられている『勇者様』は、今、人生最大の敵に挑もうとしていた。それは、人であることを捨て魔獣になつてまで番となることを望んだ彼の最愛の妻だ。なんとか幼獣達と和解することができたクロードに、残された最後にして最難関の使命は『拗ねた妻の御機嫌取り』であった。

「ク、クリス。私が悪かった」

伏せたまま彼をちらりとも見ない銀の女王——クリスに、クロードの背から腹を嫌な汗が流れた。どうすれば……と彼の尾は落ちて着

きなく左右に振られる。クリスマスもクリスマスで、拗ねたいいが、仲直りするきっかけをつかめず、内心焦っていることを彼は知らない。

固まったままの両獣の沈黙を破ったのは、銀と黒の毛玉による突撃だった。未だ王族と契約を結んでいない弟妹達と、魔力をあえて封印している長女は、いずれも仔犬姿であり、衝撃はまるでなかった。しかし、彼らの両親にとってありがたいことに、止まった時間を再び動かすには十分であった。

「おかーさま！ おとーさま！」

「料理長が、兎の蒸し焼きを作ってくれましたっ」

「御母様の好物なんだろう？」

「皆で食べましょう！」

「中庭に用意しました。早くしないと冷めてしまいますよ？」

はやくーと、自分の毛を口で軽くくわえて引つ張る幼獣達に、銀の女王は苦笑を洩らした。

「そうだな。食事は、家族皆で食べるのが一番美味しい」

御父様も、それに深く頷く。

「ああ。私が今まで食べた中で一番美味しかった食事は、君と一緒に初めて食べた兎の蒸し焼きだ。だが、」

自分達を先導しながら、じゃれあっている幼獣達に目を細めながら、御父様は続ける。

「きっと、今から君と我が愛し子達と一緒に食べる兎の蒸し焼きが、私にとって一番美味しい食事になる」

晴れ渡った青空の下、王宮の中庭で彼らは昼食を楽しんだ。食べ終わり、余韻を楽しみながら、口の周りを舐める幼獣達に、兎の取り合いで乱れた彼らの毛並みを舐めて直してやる魔獣夫妻。中庭にある大樹の下、仲良く寄り添う両親を枕に幼獣達は満足げに眠りに

落ちた。

（上手くいったねっ）

（ちょろいな）

（うふふ。良かったわ）

（御父様はへたれだからね）

（へたれって何？）

この後、御父様は時々、幼獣達に『へたれ御父様』と呼ばれることになる。彼が『へたれ』の意味を知って、耳をへたらせたというのは、また別の話だ。

【番外編】『後ろの幼獣達』『trick or treat』『Trick

ネタばれがありますので、番外編その2までを読了後にお読みください。

【番外編】『後ろの幼獣達』『trick or treat』『Trick

銀色の獣がこちらに駆けてくる。

「こんにちは。『ちいさいの』つていいます！」

『ちいさいの』は、えっと、とカンペを見ながら、元気良く鳴く。

「ここにあるのは、気が乗った時に活動報告に、おまけとして載せられていた小話だそうです。作者が本編に載せられなかったネタ、妄想が止まらず書いてしまったネタ、感想欄等にあったりクエストにお答えしたものなど、です」

最後までつまらずに言えた喜びに、尻尾を盛大に振り、『ちいさいの』は、ほめてーと蒼の瞳を輝かせる。

それでは、と『ちいさいの』は最後にひときわ大きく咆哮する。
「番外編をお楽しみ下さい」

【番外編】幕間2・5話『後ろの幼獣達』

「まずいよー」

「困ったわね」

「ううむ」

「どうしようかー」

「予想以上にへこんでるね」

夜の王庭で一匹落ち込んでいる御父様を、王宮の柱からのぞく五対の瞳があつた。

幼獣達は昼間に父親をからかいすぎたことを謝るために彼を探してここまでできたのだった。だが、あまりに彼が深く落ち込んでいるため、声をかけることができずにいた。

「昼間のアレはやりすぎだったかなー」

「そうね。……ちゃんと、ごめんなさいしないと」

「父さん、しつぽがしょぼんとしてた」

「耳もな」

「……『お詫びの品』も用意したし、ちゃんと謝ればゆるしてくれるよ。きっと。それにしても、どうやって声をかければいいんだろう。物凄く近づきにくい空気だね」

ふつむ、と夜空に光る月を見上げて、『みみなが』は呟く。

「ここは、家族恒例のアレにするか」

それに『ちいさいの』が耳をピクリと動かす

「え、アレ？」

『おなが』が小首を傾げる。

「御父様、つぶれてしまわないかしら？」

『おおきいの』が不安げに鳴く。

「下手をすれば、父さんに止めを刺すことになるのではないかな」

モニカは、うーんと唸って父親を見やる。

（止めて、精神的に？ 肉体的に？ どっちにしろ、アレを受けて、ただで済むはずがない。……でも）

「いいんじゃないかな」

ポツリ、と呟いたモニカに四対の蒼の瞳が向けられる。それらに笑いながら彼女は鳴く。

「私はうれしかったよ？ アレ」

伏せたまま、御母様とのあれやこれやを思い出していた御父様は、背後から突然聞こえた獣達の足音にゆるりと振りむいた。その瞬間、彼の視界いっぱい広がる銀と黒。温かな毛玉達に押しつぶされ、完全に埋まった彼の耳に聞こえる愛し子達の鳴声。

「御父様、昼間はごめんなさい」

「からかいすぎました、反省しています」

「ごめんなさい。嫌いにならないでー」

「ごめん、親爺、やりすぎた」

「ごめんなさい。お父さん。……さて、我が弟妹たちよ、御父様が好きかー!?」

黒の獣が、天の月に向かい咆哮すれば、銀の幼獣達がそれに続き遠吠えをする。

「御父様、大好きですわ！ 御母様は、ここに来るまでの道中ずっと御父様のお話ばかりなさっていましたの。私、ずっと、御父様にお会いしたいと思っておりましたのよ」

「僕の耳は御父様似だってお母様が言ってたよ！ 父様、大好きー」

「私の瞳の形は、父さん似だそうですよ。父さん、大好きですっ」

「俺の尻尾の長さと毛並みは親爺そっくりだってさ。親爺……好きだぜ」

「私の魔力はお父さんとそっくりなんだって。お父さん、大好き！」

幼獣達に押しつぶされたまま、蒼の瞳を真ん丸に見開いていた御

父様は、ゆるりとその目を細める。

（そうか。彼女にばかり似ていると思っていたが、言われてみれば）

「……我が愛し子達よ。父もお前達のこと大好きだぞー！」

こうして、御父様が初参加なさった第12回家庭内愛の告白大会戦は、安眠を妨げられた国王が人間を代表して魔獣たちに苦情を申し入れるまで続いた。

そして、その後、王宮の柱の陰に隠され、魔力で嚴重に縛られた『生け捕り一角獣』を幼獣達からサプライズプレゼントとして贈られ、どうする！？俺！？と、どこぞの獣生を決める選択肢が書かれたカードの幻影を御父様は見たのだった。

【番外編】幕間2.5(2)『trick or treat』

「おにくー。肉をよこせー」

「お肉を下さいな。レアがいいですね。でないと、食べてしまいまずわよ？」

「僕は魚がいいな。新鮮なのをお願いします。まあ、人から貰うよりも、目の前の獲物を狩るほうが好きだから、くれなくてもいいけどね」

「俺は生肉がいい。新鮮な熊のをくれ。でなけりや、喰っちまうぞ」
「私はお菓子でもいいですよ？ ま、一角獣の血の方が甘味としては好きだけどね」

期待にギラギラした目で見つめられて、パレヴィダ教皇は引き攣った笑いを浮かべた。

彼は、神殿の奥庭に続くこの扉を死守しなければならなかった。

扉の向こうから神官達の、

「誰だ！ ハロウィンなんて御子様方にお教えしたのは！？」

「一刻も早く一角獣様を避難させる！」

「おいっ。肉と魚はまだかつ！？」

「何、長女殿がお菓子を要求したと！？ くっ、予想外だ」

「そのっ、教皇様のとっておきのがあっただろう、全部かつぱらっ
て来い！」

という切迫した声が聞こえる。

さて、trick or treat どちらを幼獣達が選択したかは、「良いもの一杯貰ったー！」と嬉しげに尻尾を振る幼獣達からお裾分けをもらった彼らの両親と、「神よー！ 何故、我らにこのような試練をおあたえになるのです！？」と、女神像の前で絶叫した教皇のみが知っている。

【番外編】『Trick and Trick』

「Trick”and”Treat!」

期待に目を輝かせて己を見上げる銀の女王夫妻に、国王は不敵に笑う。

「ふははっ。伊達に毎年襲撃を受けていないぞ。見よ、この珍味味の料理の数々を!」

国王が指差した王庭には、数え切れないほどのテーブルが並べられ、その上には、仔羊の丸焼きから、鮭の燻製、馬の刺身と多種多様な料理が乗せられていた。

そして、それを、あむあむと美味しそうに食べる、国王陛下の子供様御一行がいた。

「って、お前達、何をしているんだ!？」

慌てる国王に食べる手を止めない王子王女（王太子を含む）。

「だって、御父様、料理人達が国王陛下の命令のほうが先だと言って、朝ご飯を作ってくれなかったのですもの」

「そうそう。僕達、お腹が空いて我慢できなくて……」

「銀の女王の御仔様方は神官で遊ぶって、朝早くに出かけて行ってしまったし」

「遊び相手がいなくてつまらないから、私達は父上で遊ぼうって思っ
って」

「父上のところに来たはいいが、腹が減っていい匂いをしている料理を思わず食べ始めたんだ。それにしても、さすが料理長が作った品々だ。美味しい」

そのまま料理の講評を始めた子供達に、国王は冷汗を掻いて後ろを振り向く。

銀の女王夫妻が、さて、代わりの品は、『あの聖獣』だ、分っているな……？ と、目を爛々と輝かせていた。

神殿と争いを起こすわけにはいかない！ という国王の必死の説得もあり、後日改めて食事会を開くことにして、銀の女王夫妻は自室へと戻ってきていた。

さすがに王子王女も、全皿は食べきれなかったため、彼らが残した分を食べた魔獣夫妻は、満足そうに御互いの毛繕いを始める。

ふとクロードの瞳に悪戯な光が灯る。

「なあ。わが愛すべき番^{つがい}よ」

彼に顔を向け、首を傾げた銀の女王に、クロードは牙を剥いて笑う。

「Trick or Treat」

怪訝な顔をした銀の女王に、お菓子をくれないのか？ とクロードは笑みを深める。何か企んでいる顔だな、これは、と身構える彼女の耳をクロードはゆっくりと舐める。

ただ単なる毛繕いではなく、明らかに別の意図を持って。

「では、お菓子よりも、もっと甘いものを貰おうか……？」

獣の鋭敏な耳に、砂糖菓子よりも甘やかで、艶を含んだ声が吹き込まれ、銀の女王は背筋の毛を逆立てた。それに気を良くしたクロードが彼女の耳を食もつとした瞬間だった。

「おかーさまー！ おとーさまー！」

「お肉を貰いましたの」

「御父様の好きな仔羊も御母様の好きな兎もあります！」

「王都では珍しい熊肉もな」

「お菓子もありますよ。『親切な』神官達がくれました」

がつくりと肩を落としたクロードは、キラキラとした瞳で、褒めてーと彼を見つめる五対の瞳に苦笑する。

「よくやった。我が愛し子達よ」

クロードに半ば申し掛かられていた銀の女王は、彼を振り落とすと、母の窮地を救ってくれるとは、さすがは我が愛し子、と幼獣達の頬を舐めてやっている。クロードも立ち上がり、偉いぞ、と幼獣達の額を舐める。

両親に褒められた幼獣達が歓声を上げる。

クロードには、幼獣達の脳内に、『神官で遊んで肉をゲット』御母様と御父様に褒められる』の方程式が書き込まれたことが分かったが、あえて放置した。

なぜならば、幼獣達が神官達で遊んでいる時間は、仔育てに忙しく、中々妻と二匹だけの時間が取れないクロードにとって、彼が一番愛する獣を捕食できる数少ない機会の一つだからだった。

この後、外交問題にならない程度に神官で遊ぶ方法を熱心に幼獣達に教え込むクロードの姿が見かけられたという。

【16】モニカとヴォルデの朝

モニカの朝は早い。日が昇る前に朝の匂いを嗅ぎつけ、彼女はゆるりと漆黒の目を開いた。隣で眠る男を起こさぬよう、そっと、質素な寝台から板張りの床へと足音を立てることなく飛び降りれば、朝の冷気が肌に突き刺さる。彼女はぶるりと身を震わせ、毛を膨らませた。寝癖がついた毛並みを毛繕い、窓の外を見やれば、夜の闇が徐々に朝の色に染められていくのが見える。

（うん。そろそろかな）

モニカは寝台から少し離れて助走距離を取った。彼女は寝台目指して走る。その駆けた勢いのまま強く床を蹴ると、彼女は――ヴォルデの腹めがけて飛んだ。

「ぐえっ」

肉球の下で、潰れた蛙のような鳴き声を出したヴォルデに、モニカは牙を剥きだして微笑む。最近、御母様にますます良く似てきたとパレヴィダ教皇に言われた笑い方だ。ちなみに、性格は御父様似だと言われた。

「おはよう。ヴォルデ。もう朝だよ」

「モ、モニカ。お前、その起こし方はやめると何度言ったら分かるんだ。もう仔犬じゃないのだから、いい加減、自分の」

モニカは、力強く肉球を足元の柔らかな肉に押し付けた。

「……まさか、ヴォルデ。レディに向かつて、『重い』とか『凶暴』とか『腹黒』とか、言わないよね？」

「も、もちろんだ。お前は可愛い仔犬だよ。モニカ……」

引き攣った笑いをヴォルデは浮かべる。昨日、パレヴィダ神殿がもはや恒例になりつつある銀の女王の御子襲撃を受けた。だが、今回はどう考えても神殿側の自業自得であった。

きっかけはパレヴィダ教皇の失言にあった。彼は朝の礼拝における説教の中でこう言っただけらしい。

「最近、銀の女王に似てお子様方が、ますます凶暴になってきた」

「あの笑いを見る。まさに魔王に瓜二つだ」

「このままでは、一角獣様は毛一本も残さず食われてしまうだろう」
「特に長女には要注意だ。あの銀の女王の番に似たずる賢さはどうだ」

「凶暴で狡猾な次代の魔王はもはや我々の手には負えぬ。なんとかせねば」

説教中に愚痴を零す教皇もどうかと思うが、身内（神官）だけの集まりだから気を抜いてしまったのだらうと、ヴォルデは同情した。彼らの運の悪さに。

パレヴィダ教皇が銀の魔王とその番及びお子様方について延々と愚痴をこぼすのを、礼拝堂の窓の下で当の魔獣一家が聞いていたのだ。何故そのような場所に、とは聞いてはいけない。愚問というものだ。そこに獲物がいれば、虎視眈々と狙うのが肉食獣という生物だ。

結果として、怒り狂った魔王一家の咆哮が白亜の礼拝堂に響き渡ることになった。脱兎の如く逃走する一角獣、それを死守せんとする神官達、ギラギラとした目で彼らを睨み唸る天狼。

銀の女王の咆哮に駆け付けた銀狼騎士団員達は気が遠くなった。ヴォルデとモニカが契約を結んで五年になるが、あのように怒り狂った彼女を見るのは久しぶりであったと、後に彼は語る。

（アレの間に入れと？）

（……無理です）

（俺達まで食われる方に、100ダラ賭けますよ）

頼みの綱のモニカとクロードまでもが怒り狂っていたのだ。本能のまま暴走する魔獣一家のストツパーが役目を放棄した今、彼らを止められるものはいなかった。

どうにか魔獣一家を説得すると、銀狼騎士団員達はパレヴェダ神殿に復旧の手伝いを申し出た。大理石に刻まれた生々しい爪痕、散乱した椅子、割れたガラスに、ヴォルデ達は溜息をついた。結局、彼らはその日を後片付けに費やすことになった。

「おお。女神よ」

復旧後、一心不乱に女神ローネルシアに祈る教皇と神官達に、ヴォルデ達銀狼騎士団員は同情のまなざしを向けた。

パレヴィダ教皇と神官達は知らない。彼らが王宮側から『銀の魔

王の玩具』^{おもちゃ}と認識されていることを。

獣は時として本能のままに暴走する。

それは、魔獣の頂点に立つ天狼の一族も変わらない。

だが、普通の獣と違うのはその被害が甚大であることだ。

だから、王宮は玩具を用意した。魔獣一家のガス抜きにすべく。そして、その憐れな生け贄の子羊が、パレヴィダ神殿であった。薄くなった教皇の後頭部を思い出して、ヴォルデは苦笑を浮かべた。

「ヴォルデ……？」

黙り込んだ自分を、不安げに見降ろす闇色の獣。横になったヴォルデをほぼ覆い尽くすほど大きく成長した彼女は、もはや庇護の対象である仔犬ではない。

やり過ぎたかと己を伺うように見る獣は、大切な自分の相棒だ。

ヴォルデはモニカの頭を優しく撫でる。

「おはよう、モニカ」

ほっとしたように、モニカは尻尾を振る。

「おはよう、ヴォルデ」

彼らの一日が始まった。

【17】モニカと魔獣一家の勉強会（別名：へたれ御父様を囲む会）

『愛してる』

届かないと分かっているけど、彼は心の中で、そつと呟いた。
風にたなびく白煙。ああ、天に向かって昇っていく、あれは。

『アキラ姉^{ねえ}』

馬鹿みたいに晴れた青空を少年は睨みつけた。そうでもしなければ、零れ落ちてしまおうと思ったのだ。己の心が、銀の光となって。

ぐつと拳を強く握った瞬間だった。目の前がふつと暗くなり、足元の地面が崩れるのを感じた。

目を赤く泣き腫らした母親が、慌てたように自分に手を伸ばすのが見えた。

唇を噛みしめていた父親が、何かを叫ぶのが聞こえた。
黒服に身を包んだ弟が、こちらに駆けて来ようとしている。

「来るな！」

己の叫び声を最後に、少年の記憶は途絶えた。

良く晴れた青空の下、魔獣一家の青空教室が王宮の中庭で開かれていた。講師は御父様ことクロード、生徒は彼の愛し子達だ。御母様は、何やら面白そうな予感がする、と何処かに行ってしまった。

魔獣の一族の記憶は、その血に宿る。だが、それは本能に支配された感覚的なものが多い、とクロードは言う。例えば、御母様に言われれば、魔獣と人の騒乱の時代は「腹が減って、腹が立った時代」となる。

さすがに大雑把過ぎると、クロードは、人間の教育制度のように何が起ったのかの出来事を系統立てて幼獣達に教えようとしていた。幸いなことに齢七歳になる愛し子達は親の欲目抜きでも聡明であり、特にモニカは銀の賢者と言われてたクロードでも思いつかないような歴史の矛盾点や疑問点を突いてくる。

今日のお題は『異世界人』だったが、珍しいことに初歩の初歩でクロードは躓いていた。

「ととさま。異世界人って、足が三本あるの？」

『ちいさいの』ことリーナスは小首を傾げてクロードを見上げた。

「違うわ。リーナス。触角があるのよ。ねえ、御父様」

『おなが』ことエルティナは自慢の優美な尾で小柄な弟をぺしぺしと叩いた。

「いや。目が三つあるんじゃないかな。でしょう？ 父さん」

『おおきいの』ことアルクインは、伸びをしながら呟いた。

「美味いかが気になる。どうなんだ？ 親爺」

『みみなが』ことバルトロが形のいい耳を後ろ足で搔く。

こら、行儀が悪いよ、とモニカはバルトロを叱る。

「えと、異世界人も、姿形は人間と変わらないのではないのではしょ

うか、御父様」

自分も前世は『小坂晶』こさかあきら という異世界人であつたが、断じてそんなびっくり生物ではなかったと心の中で突っ込みながら、モニカがフォローを入れる。

自分の予想は当たっているかとキラキラと期待に瞳を輝かせてくる幼獣達を、如何にかっかりさせることなく訂正したものかと耳をへたらせていた御父様は、モニカの助け船に飛びついた。

「その通りだよ！　というか、我が愛し子達よ。君達も僕の子供である以上、異世界人の血を引いているのだからね。僕をどんなとんでも生物だと思っているのだい、君達は。特にバルトロ。異世界人を食べたらだめだよ。共食いになってしまふからね。さすがの僕でも、共食いはしないよ」

へ？　とモニカは尻尾を膨らませた。
ちつ、とバルトロは舌打ちをした。

「ととさま、異世界人なの？」
好奇心の塊のリーナスがクロードの匂いをふんふんと嗅ぎながら尋ねる。

「いや、匂いをかいでも分からないだろう、リーナス。僕は今でこそ魔獣だけど、嘗ては人の王族だったからね。古の王族に異世界人を王妃に迎えた王がいた話はしたらう？」

今度こそ、モニカは絶叫した。
「御父様、人間だったのー！？」

落ちつかないに尻尾を振るモニカに、昼食を取るヴォルデは首を傾げた。

「どうした？ 子牛のステーキは気に食わなかったか？」

そうではない、とモニカは首を振り、耳を伏せて、ヴォルデに尋ねる。

「……ヴォルデ、御父様が元王族って、知ってた？」

当然だろう、とヴォルデは頷く。

「俺も、望むと望まざるとに関わらず、王族の端くれだからな」

ああ、そういえばと、モニカは絶妙の火加減の肉に齧り付きながら唸る。滴る肉汁まで余すことなく飲み込みながら、彼女は頷いた。

（今度、詳しい話をして貰おうと）

書類作業の傍ら、食後のコーヒをヴォルデが楽しみ、モニカが毛繕いをしていると、若い団員が執務室に駆けこんできた。

「だ、だんちょう！ 事件です！」

書類を睨んだまま、コーヒ一片手にヴォルデは言う。

「どうした？ また神殿がバカでもしたか？ ……いや、それはないか。昨日の今日だからな」

団員は焦ったように早口に事情を説明する。

「いいえ！ 大正解です。神殿がバカやらかしました。それも、前代未聞の大馬鹿です。奴ら異世界召喚で『勇者』を呼びだしたそうです！」

「な、なにっ!？」

ヴォルデは椅子を蹴倒す勢いで立ちあがる。

「不味いことに、こちらよりも先に銀の女王陛下が召喚を嗅ぎつけてしまいました、現在、神殿側と交戦中です！ エレナ副団長から、団長を至急呼ぶようにとの御命令で」

早くそれを言わんか、とヴォルデは机に立てかけてあつた剣をひつつかみ、己の相棒を見つめる。

「モニカ」

「分かつてる」

モニカの背に乗り、神殿へと駆ける一人と一匹に、団員が叫ぶ。

「勇者の条件は『魔王を倒しうるもの』。勇者の名は『小坂光輝^{こさかみつひ}』。黒服に身を包んだ少年です！」

その名を聞いた黒獣の尾が膨らみ、耳がピンと立ったことに気付いたものはいなかった。

【18】宝物はキラキラと

「おかーさん。この子が私のおとーと？」

舌足らずな声で少女は母親に尋ねた。

「そうよ。ほら、光輝^{ひかり}、晶^{あき}お姉ちゃんですよ」

少女は母親の腕の中を覗く。

「こっさき？」

確かめるように名を呟いた少女の頭を父親はゆっくりと撫でた。

「ああ。光り輝くと書いて光輝だ」

首を傾げた少女が父親を見上げる。

「キラキラした名前だね」

クスクスと、可笑しそうに母親は笑う。

「そうね。ねえ、晶。貴女の名前もキラキラした名前よ。澄みきつて光り輝いた子どもになりますようにって、お父さんがつけたのよ」
我ながらピッタリだろう、と父親は胸を張る。

「晶も光輝も、二人とも俺達の大事な宝物だ。宝物はキラキラしているものだろう？ さあ、我が家のお姫様。チビ助に挨拶してやろう」

不意に、母親の胸に抱かれた赤子が目を開き、少女に向かって手を伸ばした。小さな手だった。精巧な人形のような、信じられないほど小さな手を晶は恐る恐る握った。

「よろしくね。コーキ」

王都の外れにある小高い丘に建てられた白亜の神殿は、日の光に輝いていた。キラキラと。神官達に毎日磨かれ、繊細な彫刻が施さ

れ、ステンドグラスが色とりどりに光を染める神殿は、確かに美しかった。

（でも、私の宝物はもっと）

——キラキラした私の大事な宝物。「キーキ」弟。

モニカは力の限り空を駆る。少しでも早く、勇者が異世界召喚された神殿に着きたくて。彼女は、己の背に載る相棒に早口に告げる。
「ヴォルデ。神殿の中庭に巨大な魔力の塊が二つあるみたい。一つは御母様だけど、もう一つは知らない魔力だよ。……見えた」

神殿の中庭は酷い有様だった。聖樹と呼ばれる木々は折れ、石造りの東屋は瓦礫と化し、庭園の花々は吹き飛ばされている。其処此処で燻ぶる炎が、この惨状が膨大な魔力が暴走した結果だと告げる。優美な庭園を焦土と化した元凶は唸り声を挙げ、怒りの咆哮を上げた。

「我が一族に仇なす者は、例え不可侵を約しし人の子であろうとも、許さぬ！」

銀の女王が睨み据える先には、神官達と一人の少年がいた。
樽腹の副神官長は、勝ち誇った声で叫ぶ。

「ふん。魔王は勇者に倒されるのが世の常。先代の勇者は貴様に誑

かされ、墮落してしまった。だが、今代の勇者は違うぞ。コサカコウキ様は異世界から我々が呼び出した真の勇者だ。貴様なぞ敵ではない……コサカコウキ様。あれこそがこの世の罪惡、銀の魔王でございます。どうか勇者様の御力であの獸めをお倒し下さい」

銀の女王にギラギラとした目を向けられた少年——小坂光輝は、顔を引き攣らせた。

「倒せって言われても……」

尻込みする光輝の背を神官達が押していく。

「神殿の帳簿は、魔獸一家のための経費で火の車なのです」

「このままでは、神殿を差し押さえられてしまいます！」

「教皇様は祈るだけだし、副神官長様は食べるだけ。神殿内引きこもりとメタボ親爺は頼りになりません！」

「もはや貴方しかいないのです。コサカコウキ様！　どうか我々に希望を！」

銀の女王と直接対峙させるべく、神官に無理矢理引きずり出された光輝は、思わず突っ込みを入れる。

「いやいや。後半はほぼ上司に関する苦情だよな。ていうか、俺、さつき目が覚めたばかりなんですけど。何、このスピード展開」

そもそも、最初から魔王^{ラスボス}っておかしくないか、と最近ついていない光輝は呟いた。眼前の巨大な銀の獸が天に向かい雄叫びを上げる空に浮かぶ火の塊達。それらが、一直線に向ってくるのに、やけに冷静な自分に彼は力なく笑った。

視界一杯に広がる炎。この赤く輝く光に燃え尽くされたら、

（もう一度、アキラ姉に、会える？）

そつと目を閉じた瞬間、誰かが彼の襟首を引っ張った。あまりの強さに一瞬息が詰まった光輝が、次に感じたのは浮遊感だった。

（へ？）

驚き目を開けば、目の前に広がる青空と輝く太陽。

「え……ええ！？」

中空に仰向けになる体勢で四肢を投げだした光輝が悲鳴を上げれば、力強い腕が彼を抱き止めた。何かが起こったか分からず固まる光輝を氣遣うように腕の主は彼に優しく声をかけた。

「大丈夫ですか。勇者殿」

「だ、だいじょうぶです」

まだ動揺している光輝の頭を撫でると、男は光輝を抱え直し、己の前に座らせた。さらりとした黒の毛並みの獣に跨った光輝は眼下を見下ろし目を丸くした。

「飛んでる！」

遙か下でキラキラと輝くのは先ほどまでいた神殿だろうか。そうならば、あの右往左往している米粒は己を召喚した神官達だろう。

……なんだか、爆発音や獣の咆哮、煙や閃光が見えるのは気のせいにしておこう。

男が黒獣の背を撫でると、獣は何処かに向かって空を駆け始めた。

「あ、あの」

光輝は体を後ろにひねり、男を見上げた。

「助けて頂いたようで、ありがとうございます」

ペコリと頭を下げた光輝に、青年は少し目を丸くすると、ふっと笑った。

「いいえ。当然のことでしたんです。御挨拶が遅れて申し訳ありません。私は銀狼騎士団団長ヴォルデ・シュツトガルトと申します」
騎士団……ファンタジーだなーと思いながら、光輝も名乗る。

「俺は小坂光輝です。コサカが姓で、コウキが名前です」

神官達は何故かフルネームで彼を呼んでいたので、一応光輝が名前だと注意すると、ヴォルデは頷き、何故か獣の背を軽く叩いた。

「どうした？ 挨拶しないのか？」

首を傾げた光輝の耳に、信じられない声が聞こえた。

「……す、するよ。私はモニカ。よろしくね」

自分に乗せている獣が発した声だと分かるまでに、少し時間がかかった。なぜなら、この声は、あまりにも……。

「ちなみに、さっき君を襲っていた銀の女王の娘だよ」

食べられなくてよかったね、というモニカに、え、俺、魔王軍にさらわれたの！？ とパニックになった光輝を宥めるのに苦労したヴォルデだった。

【19】仲良きことは美しきかな

銀狼騎士団の応接室は、異様な沈黙に包まれていた。

難しい顔をして黙り込んでいた少年が、ぽつりと呟いた。

「……えっと、つまり、勇者はお呼びじゃない？」

ゆうしや 光輝の身も蓋もない台詞に、ヴォルデは苦笑いを浮かべる。

「そうですね。人と魔獣は契約を結び、互いを尊重し合う盟友として認めています。私とモニカのように。今では古の『銀の魔王』も、盟友である魔獣の長として『銀の女王』とお呼びしています。『魔王』がいない以上、『勇者』は……必要が無いのだがな、あの馬鹿どもが……、失礼。とにかく、魔王を倒す必要はありません」

一瞬地が出てたよー、とモニカがヴォルデの足を尻尾で叩く。そんな一人と一匹を見て「確かに敵同士ではなさそうですね」と光輝は頷いた。

ヴォルデは、一先ず光輝を銀狼騎士団で保護することにした。光輝のもつ『勇者』という称号、異常な魔力量、異世界人という地位、いずれをとっても放置できるものではなかった。勿論、そのような事情が無くとも、身寄りのない（ヴォルデの基準からすると）七、八歳に見える少年を保護しないという選択肢は、彼には存在しなかったが。光輝に簡単ながらこの世界や人と魔獣の関係について説明し終わり、大体の事情を理解してもらえたようである。どうか、魔王が人類の敵という誤解も解けたようで、ほっと息を吐いたヴォルデだった。

ヴォルデが王宮へと報告のために出ていくと、応接室は再び沈黙に包まれた。警護のために残ったモニカは、窓辺に伏せたまま、緊張で少し尻尾が膨らませた。

（ちよつ。気まず過ぎる。今さらお姉ちゃんですよーとか名乗れないよ……）

ちらりとソファーに座っている光輝を上目遣いに見つめて、モニカはギョツとした。

「え、なんで泣いてるの!？」

どこか怪我したの？ 痛いのか？ と慌てて駆け寄ってきたモニカに光輝は抱きついた。そのまま柔らかい黒の毛並みに顔を埋めて彼は呟く。

「怖いよう。おねーちゃん」

彼女の脳裏に五歳ぐらいの弟の姿が浮かぶ。泣き虫で怖がりで、そのくせ意地っ張りな弟。泣きそうな時は必ず、すぐるように彼女の手を握り締めてきた。そんな彼に、いつも自分が言うことは決まっていた。

「大丈夫だよ、コーキ。お姉ちゃんがついてるよ」

慰めるように光輝の背を前足でタシタシと叩いてやると、モニカを抱きしめる腕に力がこもった。

「……やっぱり、アキラ姉^{あね}だったんだ」

唸るような声が聞こえた。弟妹達が、目の前の獲物を逃がすまいとあげる類のものだ。モニカは、彼女の首筋に顔を埋めている弟に恐

る恐る視線をやった。そして、思っていた以上に近い位置にあった彼の顔に、思わずのけ反った。

彼は、泣いていなかった。激怒していた。

「ふむ。では、アレを食らうてはならぬ、ということか」

澄んだ蒼の瞳に睨みつけられたヴォルデは真剣な表情で頷く。

「はい。あの少年は陛下御自身にも御一家にも、害意を持たぬ、ただの召喚被害者です」

そして、と御母様は不満げに唸る。

「神殿にも一切咎めはなし、か」

牙を剥きだす御母様の背を、御父様の尾が宥めるように叩く。

「今回、神殿の暴挙は僕達にも原因があったからね。ここのところ、苛めすぎたかな」

それでもまだ唸っていた銀の女王は、ふと、いいことを思いついたというように顔を上げ、蒼の瞳をキラキラと輝かせてヴォルデに告げる。

「よかるう。人の子よ。その代わりに、あの少年を私の子にしたい。今はまだ幼くはあるが、魔力の大きさといい、毛並みの黒さといい、我が愛し子モニカの番候補つがいにあれほどふさわしい雄はいまい」

御母様の爆弾発言に、固まること暫し。解凍された御父様とヴォルデが猛然と反論し始めた。

己の知らないところで実弟を許嫁にされる危機を迎えているモニ

力は、現在、別の危機に瀕していた。当の実弟による怒涛の質問攻めだ。

「なんで異世界にいるんだよ」

「っていうか、何故に魔獣？」

「盟友とか言ってたけど、あのヴォルデって男はアキラ姉の何」

「アキラ姉に跨ってたよね。許せないよね。闇打ち決定だよね」

「あの男、絞めていい？」

そういや、この子、シスコンだった……。項垂れて耳をへたらせたモニカは自覚していなかった。自分も結構なブラコンだということ。

【20】祈りを捧げる夜の星空

モニカは満天の星空を見上げた。

手が届きそうで、届かない輝きたち。

彼女は以前に魔の森でやはり同じように夜空を見上げたことがあった。

その度に思ったことがある。

まるで——前世の家族のようだと。

王宮の夜は魔の森よりも明るく騒がしい。城内には魔石の炎が灯り、夜を楽しむ人間達の笑い声がモニカの耳に届く。それでも夜は夜だ。現代日本の夜など比べものにならないほどの闇が王都を支配していた。その暗闇に溶けこんだ獣は夜空を見上げる。王宮の尖塔の上、黒の獣は物思いに沈みながら、その毛を風になびかせ、黒の瞳に星の光を映し続けていた。

脳裏に蘇るのは先ほど泣き疲れて眠りについた弟の寝顔だ。あどけない顔立ちの少年は、モニカの中にある『小坂晶』の記憶そのままだった。少年は言った。彼は、姉を失った一週間後の世界から来た。

「ばかつ。アキラ姉のばかつ。俺が、親爺が、母さんが、優輝が、どれだけっ……アキラ姉のおおばかつ……！」

言葉を詰まらせた光輝は、そのままモニカの首に抱きつき、さんざん彼女の毛並みを濡らして、そのまま眠りに就いてしまった。寝息を立て始めた光輝をモニカは風を起こして寝室まで運び、毛布を

駆けてやる。暫く寝顔を眺めていた彼女は、ふいに己の瞳から一筋また一筋と流れ落ちていく涙に気付いた。慌てて前足で拭うが、後から後から湧いきて一向に止まらない。このままでは高そうな絨毯に染みを作ってしまう。そう考えた彼女は、窓から見えた尖塔の上で気分を落ち着かせるために、そつと部屋から抜け出した。

宙を彩る宝石のような星々が、澄んだ大気の中できらきらと輝いている。幼獣の頃から、モニカは夜空を見上げるのが好きだった。空で輝く星と月は、前世と変わらない気がしたからだ。

『家族』に会いたいと、何度心の中で願っただろうか。叶うはずのない願いが叶って、最初に思ったことは――帰りたい。……でも、私が帰るべき場所はどこ？

モニカは覚えている。

黒髪の女性の優しい微笑みを。

良い子ねと己の頭を撫でる、家事で少しかさついた手を。

けれども、モニカは知ってしまった。

愛おしくてたまらないと細められる蒼の瞳を。

優しく己を包む銀の毛皮を。

どちらも大切でどちらも大好きな彼女の『母』だ。

母だけではない。どちらの世界にも、大好きな家族いて友がいる。選ぶことなど、できないほど、愛おしい存在が。

そもそも、一度死んだ己が『あちらの世界』に戻るかもわからない。

……まったく、獣生というものは分からないことだらけだ。

あるはずもない答えを探し求める思考を止め、モニカは天を見上げた。

そして、彼女は祈る。

（あちらで死んでしまった私はともかく、コウキはまだあちらに居れるはず。どうか、あの子が『家族』のもとに帰れますように）

晶だけでなく、光輝まで続けて失った家族の悲しみを思い、伏せられたモニカの耳に、聞き覚えのある人間の悲鳴が聞こえた。

「光輝の声だ！」

慌てて駆け付けたモニカが見たのは、寝台の上にできた魔獣団子だった。巨大な銀の毛玉の下から、光輝の「お、おもいつ。つぶれる！」という悲鳴が聞こえる。どうやら異世界人に興味津々だった弟妹達が彼を襲撃したらしい。

「異世界人、ゲットだぜー！」

リーナスが光輝の上に乗リ、捕獲宣言の雄叫びを上げれば、

「良い毛並みね。あら、香水のような香りもするわ」

どういいうお手入れをしているの？ とエルティナが光輝の髪を毛繕い、

「指が五本あるんだね。なんだ、あまり人間と変わらないじゃないか」

と、腕に乗ったアルクウィンが残念そうに尻尾を垂らし、

「あんまり、美味そうじゃないな」

と、光輝の匂いを嗅いでいたバルトロが牙を剥きだし笑う。

光輝を潰さないために魔力を抑えて犬の姿になっているとはいえ、大型犬程度の大きさの弟妹達である。四頭分の銀の毛皮に埋もれて、もはや完全に姿が見えない光輝が「助けて、アキラ姉ー！」と叫ぶのに、モニカは苦笑した。

魔力で風を起こし弟妹達を光輝の上からどかしながらモニカは思う。

妙なところで行動力のある弟妹達に振りまわされるのは、前世も今世も変わらない、と。

【20】祈りを捧げる夜の星空（後書き）

再来週からしばらくプライベートでPCをいじれない環境になるため、次話の投稿は、おそらく来年になります。皆様、よいお年を。

【21】弟妹は可愛いものです。

懐かしい声に呼ばれている気がする。

聞こえるはずのない声が

誰も知らないはずの名を

呼んでいる気がする。

「……え……ラねえ、アキラ姉！ 朝だよ！」

「あと十分……」

まどろみの中、モニカは己の耳元で怒鳴るナニカを前足で抱え込み、丸くなる。

うわ、ちょ、とか奇妙な人間の鳴き声が聞こえた気がした。

知らないはずなのに、どこか懐かしい鳴き声が。

んーねむいーと、己の尾を枕にモニカは低く唸った。

もう一度、深く眠りの底に沈もうとしたモニカの顔をナニカが叩いた。

（肉球が無い……人？ 魔獣^{わたし}を叩く度胸のある人間という……）

「……ヴォルデ？」

無意識の呟きに応えたのは低い唸り声だった。

「やっぱり、あの男、締め^しめる」

物騒な台詞に一瞬で目が覚めたモニカがその日最初に見たのは――

「おはよう、アキラ姉」

己の毛皮に埋もれた、まぶしい笑顔の愛弟^{こいで}だった。

「お、おはよう、コーキ。締め^しめるって、その、誰を？」

「あはは、やだなあ。決まってるじゃん。アキラ姉、まだ寝ぼけて

るの？」

明るく笑う弟の目は笑っていなかった……。

どうにか、弟に『第二次ヴォルデ闇打ち計画』の実行を思いとどまらせる頃には、随分と日が高くなっていた。

部屋付きのメイドに頼んで弁当を作って貰い、モニカは光輝を背に王都の空をのんびりと走る。

「すごい！」

ブランチのはいった大きなバスケットを抱えた光輝が歓声を上げた。

弟の機嫌が直ったらしいことに内心ほっとしたモニカは走りながら背中の子を振りかえる。

「そんなに空中散歩が気に入った？」

「うん！ あ、アキラ姉。鳩の群れが飛んでるよ。何処に行くのかな？」

身乗り出した弟に、こら、落ちるよ、とモニカは小さく笑う。

昨晚、弟妹達を自室へと戻し、光輝を寝かしつけた後、モニカは両親のもとへ向かった。そしてそこで「勇者光輝殿の御世話は全て私に御一任下さい」と魔獣の女王たる御母様に嘆願した。

「ほう。それ程にあの人間が気に入ったか」

面白そうに蒼の目を細めると、御母様は「よし、我ら魔獣としての勇者へのもてなしは全て我が愛し子にまかせることにしよう」と、あっさりと許しが下りた。

モニカは、何かを企んでいそうな御母様が気になったものの、尋ねたのは別の疑問だった。

「あの、御母様。どうして御父様の毛皮がところどころ焦げているのでしょうか？」

まさか、家庭内暴力？　でーぶい？　とモニカが不安げに見上げれば、御母様は優しく彼女の頬を舐めてやる。

「なに、少々意見の相違があっただけだ。案ずることはない。我が愛し子よ」

そうだよ、と御父様も苦笑しながら同意する。

「ちよつとだけ、クリスのお前に対する愛情が迸ってしまっただけのことだよ。心配しなくても大丈夫さ。クリスが本気なら今頃、僕ごと王都は跡形もなく焼き払われているはずだからね」

それよりも、と御父様は落ちつかなげに尻尾を振る。

「そんなに、あの人間の子供が気に入ったのかい？」

「はい。新しい弟ができたかのようにで」

自分と同じ毛色だから、というと御母様は少し耳を垂らし「弟……そうか弟か……」と呟き、御父様は尻尾をぶんぶん振り回し「弟！　そうか弟か！」と叫んだ。

対照的な二匹に首を傾げたモニカは知らなかった。

御母様が光輝をモニカの婚約者にすると言いだしたのを、御父様とヴォルデが、モニカの意志に任せるように必死で説得を行い、今の発言でモニカ自身が無意識のうちに完全に光輝の婚約者フラグをへし折ったなどとは。

魔獣側の光輝に対する世話役になったモニカは、その権限で弟妹たちに『光輝禁止令』を出した。

「ずるいーっ」

リーナスが不満げに唸り声をあげれば、

「モニカお姉様、横暴ですわ！」

と、エルティナが不満げに長い尾をフルフルと震わせ、

「僕も異世界人と遊びたいです。……どうしてもだめですか？ モニカ姉様」

と、アルクウィンが蒼の瞳を潤ませながらねだり、

「俺は異世界人で遊びたい」

と、バルトロが大音声で吠えた。

最後の発言はどうかと思うが、確かに抜け駆けではあるため、弟妹達を説得するのに苦労したモニカは結局、明日から『光輝解禁』を約束してしまった。今日一日で光輝と口裏を合わせなければならぬことに、内心ため息をついたモニカだった。

全ては、可愛すぎる弟妹達が悪い。

不満げに肉球パンチとかどんな最終兵器だ。

モニカを傷つけないよう爪をしまっているリーナスを、思わず人間の感覚で、前足で撫でてしまったところ、肉球パンチを返したと勘違いしたリーナスを含む弟妹たち全員との肉球パンチ合戦になっ

てしまったのだ。最後には永遠に続けそうな彼らに「分かった。分かったから」とギブアップ宣言するしかなかったモニカだった。

光輝が魔獣と人間、両者の王族の客人待遇となった所までを説明したモニカは、ずずい、と鼻先を弟に近付けた。食後のオレンジを剥いていたコーキが思わず持っていた一房をモニカの口元に放ったのを飲み込み、彼女は言う。

「とりあえず、私のことはモニカって呼んで、コーキ」

光輝はモニカにオレンジを更に一房食べさせながら首を傾げた。

「モニカって、こつちでのアキラ姉の名前だよね」

うん、と彼女は頷いてオレンジの爽やかな酸味に黒の瞳を細めた。魔獣の身であるモニカは、柑橘類を一々魔力で剥くのが面倒だとどうしても皮ごと食べがちであった。

だが、そうするとどうしても苦味で甘味や酸味が殺されがちとなる。

やっぱり、ちゃんと皮を剥いてもらったオレンジが一番美味しい、とおかわりを尻尾でぺしぺしと地面を叩いて要求しながら、モニカは黒の瞳を細めて懐かしそうに光輝に告げる。

「ヴォルデに名付けてもらったんだよ」

「却下」

モニカの発言を聞くや否やの即答だった。

追加のオレンジも光輝の口に入れられてしまった。

何が光輝の気に食わなかったかは、明白だ。

モニカは耳をへたらせて弟を見下ろした。

「……だからヴォルデとは恋人とかそういうんじゃない、相棒なんだよ。光輝が心配するような関係じゃないんだって」

それでも気に食わない、と弟は眉間に皺を寄せて姉の首に抱きつく。サラサラとした艶やかな毛を指で梳きながら光輝は低く唸る。
「うー。だってさー、あの人、ずるい。俺だってモニカの相棒になつて、ずっと……ずっと一緒にいたいのに」

光輝の腕に力が込められたのを感じながら、モニカはその背を尾で慰めるように叩く。なんで私の弟妹達ってこんなに可愛いんだろ、などと考えながら。

彼女は気付いていなかった。

最愛の娘が元婚約者候補と王宮の外にデートに行ったと聞かされた御父様が、さんざん悩んで唸った末に、こっそりと王都内でのみ使える魔鏡でその様子を見ていることに。さすがに盗み聞きは自粛したものの、親密そうに己の娘に抱きつく勇者（光輝）に、御父様は尻尾を震わせて低く唸った。

「今だったら、王都を燃やしつくせるかもしれない……」

ちよつと暴走しかけた御父様を止めた銀狼騎士団長ヴォルデは、その晩、珍しく副団長エレナに愚痴を零した。

「何故、勇者が召喚されてからの方が王都が滅亡しかける回数が増えているんだ」

苦笑しながらエレナは首を振った。

「パレヴィイダ神殿のすることがまともなはずがないじゃないですか」

私の母もパレヴィダ教徒なのですが、母曰く『あの清々しいまでの駄目っぷりが堪らなく放っておけない』のだそうですよ」

頭を抱えたヴォルデは知らない。

厄介事が次々に舞い込んでくる中、その原因の一つである勇者^{ユウセイ}が、魔王よりも姉^{ヴォルデ}についた悪い虫を退治したいなどと考えているとは。

【21】弟妹は可愛いものです。（後書き）

2 / 13 に更新予定だったものを前倒し更新してみました。

【22】店内でお召し上がり下さい。

とある異世界のとある王宮で、勇者は魔王一家の御仔様方に相對していた。

異世界基準で6、7歳ほどに見える少年を、熊より大きい魔獣の四対の蒼の瞳が見つめる様は、一見まさに捕食まで秒読み状態である。一角獣ならば泡を吹いて気絶しているだろう。

モニカは、そんな一人と四匹たちの様子を少し離れた所から落ちつかないに尾を揺らしながら見守っていた。

（できれば、仲良くなつて欲しいな。でも、光輝ってリーナス達のことをどう思ってるんだろう……。ヴォルデとのことを納得させるので必死で、結局、聞けないままだったんだよね。よくも僕のお姉ちゃんをとったなーとか、昔みたいに暴れたりはしないよね……。？）

まだ光輝が幼稚園児であつた頃に、小学生であつた晶の男友達候補（悪い虫）を、彼が実力行使で追い払おうとした時のことを思い出しながら、モニカは唸る。

件の喧嘩は、小学生に幼稚園児が勝てるはずもなく、光輝が惨敗して終わった。

今回も、もし光輝が弟妹たちに喧嘩を売ったとしても、如何に勇者とはいえ、魔力の扱い方も知らない彼が勝てるとは思えない。

（ちょっとでも雲行きが怪しくなったら即止めないと！）

はらはらしながら弟妹たち（前世＋今世）を見守るモ二力は知らなかったりする。

件の事件では、『偶然』通りかかった先生が、小学生（悪い虫）に一方的に殴られる幼稚園児（ゆうしゃ光輝）を見つけ、慌てて二人を止め、保護者呼び出しとあいなった。そして、「年下を虐めるとは何事か」と親御さんにさんざん叱られた小学生（悪い虫）は、光輝に頭を下げて謝る羽目になったのである。

モ二力は気付いていない。

結局彼女は、自分の可愛い弟を殴った相手を許しはせず、件の男の子は、今では顔も名前も思い出せない存在となってしまうっていることに。

愛する弟の背後でウニヨウニヨしている黒いギザギザ尻尾に彼女が気付く日は来るのだろうか。

ところで、ちまっこコーキは勿論、分かっている「肉を切らせて骨を断つ作戦」を実行した。

「何処の世界に、あえて相手に殴られて姉の不興を買わせる幼稚園児がいるんだ、お願いだから自重しろ」とは、教師に呼び出され大まかな事情を知った父の談である。が、愛娘の勘違いを訂正しなかった彼は、やはり光輝の父であった。

ちなみに、光輝曰く、件の事件は彼の黒歴史であるそうだ。

「アキラ姉にばれて心配させてしまった時点で作戦失敗。あの頃は俺も若かった」とは彼の談である。

さて、当時から未恐ろしいと親戚一同から評価を受けていた幼稚園児コーキ。そのちまっこコーキをして「若かった」と評する勇者コウキ。主にシスコン面で進化した中学生ヴァージョン光輝というある意味で魔王よりも恐ろしい生き物を召喚してしまったパレヴィイダ神殿の明日はどっちだ。

さて、実は腹の底まで真っ黒な中学生とは知らずに、仔魔獣達は初めて出会った異世界人とあって好奇心に瞳を輝かせていた。

「えっと、リーナスですつ。この前は潰してごめんなさい。ねえねえ、異世界ってどんな食べ物があるの？ 一角獣はいる？」

リーナスがパタパタと尾を振れば、

「私はエルティナと申します。お目にかかれて光栄ですわ、艶やかな毛並みをお持ちの勇者コウキ様。異世界でのお手入れの方法を教えてくださいませんか？」

と、エルティナが優雅に尾を振り、

「僕はアルクインです。明日から一緒に魔力の使い方を御父様に習うことになるそうですよ。よろしくお願いします」

と、アルクインが蒼の瞳を細めて、ふわりと微笑み、

「俺はバルトロだ。なあ、攻撃系の魔力の使い方を覚えたら、一緒に一角獣狩りに行こうぜ！」

と、バルトロが牙を剥き出して豪快に笑った。

エンジェル・スマイル

そんな個性あふれる弟妹たちを、余所行き用の笑顔を浮かべたまま、じーっと見つめていた光輝は、突然くるりとモニ力を振り返った。背後から彼を見守っていた彼女は、思わずびくりと背筋の毛を逆立てて、上目遣いに彼にお伺いを立てる。

「ど、どうしたの？ コーキ」

何かを耐えるように感情を抑えた声で光輝は彼女に告げた。

「ねえ、お持ち帰りしてもいい？」

目を点にしたモニカは、次の瞬間、勇者が銀の毛玉にダイブする様を目撃する。

まさに、勇者。誰もがしたくとも自重していたことを何の躊躇いもなくするとは……とは、女官長の談である。

なにはともあれ、勇者は魔獣一家が大変お気に召した様子であり、後日開かれた一角獣狩りにも非常に楽しげに参加なさっていたということである。

【番外編】 17・5話、18・5話、20・5話、22・5話

黒髪の少年がこちらに向かって駆けてくる。

「こんにちは。小坂光輝です。モニカ姉の弟で、現在は勇者を……してるのかな？ どちらかというと魔王一家の皆さんのほうが好きです。大好きです。お持ち帰り希望です。モニカ姉は勿論のこと、あの一番小さい一頭が特に気に入っています」

姉とリーナスの愛らしさについて語りそうになった勇者光輝はコホンと咳ばらいをした。

改めて余所行きエンジェル・スマイルの笑顔を浮かべた彼は、小首を傾げ上目遣いこちらを見上げている。その後ろで黒いギザギザ尻尾がウニョウニョしているのは幻影なのだろうか。

「ここにあるのは、気が乗った時に活動報告におまけとして載せられていた小話だそうです。作者が本編に載せられなかったネタ、妄想が止まらず書いてしまったネタ等です。ただし、活動報告時とは表現等が一部異なります。いまいち気に入らない表現等を改訂したそうです。」

それでは、と勇者光輝は最後に礼儀正しくお辞儀をする。
「どうぞ番外編をお楽しみ下さい」

【第17・5話】『晴れた日は皆でお昼寝』

「御母様のお話って、御父様のお話よりも、人間の間に伝わる『魔王と勇者の御伽話』に近い気がするのですが、どうしてですか？」
首をかしげて聞いてくるモニカに、御父様は頷いて答える。

「それはだね。魔獣というのは、長い年月を過ごすから、出来事よりも感情を優先して記憶に残すようなんだ。だから、正直言って、クリスは当時のことをほとんど覚えていないのではないかな」

「魔獣の血に宿る記憶は、長い歴史を承継するのには便利だけど、そういう点で完璧とは言えないと僕は思うね、そもそも……」

銀の賢者と呼ばれた御父様の話は、彼が自分の世界に入ると途端に長く難しくなる。幼獣達は、くわっと大きく欠伸をすると空を見上げた。

「今日もいい天気ー」

「そう、ね……」

「ね、む、い……」

「ぐー」

「これが……抗えぬ本能……というや、つ、か……」

魔獣団子になって寝ている幼獣達に気付いたクロードが、あまりの愛らしさに髭を下げ相好を崩すのはもう少し後だ。

【第18・5話】『副神官長は飛べない』

視界一杯に広がる豚面。

「おお、御目覚めになりましたか。勇者様」

にっこりと笑った肉団子に、小坂光輝こさかみつ輝は叫んだ。

「豚がしゃべった!？」

後世にまで伝わるパレヴィダ經典に載せられた勇者コーキ生誕の一言であつた。その經典において、聖人コーキは光の翼を広げ神々しい姿で挿絵に描かれている。だが、彼の目覚めの時に立ち会った副神官長ギルバートは丸々と太り、どこか食欲を誘う姿であつたりする。

【20・5話】『母さん編と弟編もあります（親爺は自分で何とかしろ）』

「小坂様は、人間の王と魔獣の長、両者の客人として御迎えすることになりました」

何故だか軍服のあちらこちらを焼け焦げさせたヴォルデは、そういうと深い溜息をついた。彼のやけに疲れ切った様子にモニカは心配げに首を傾げ、彼の片手を慰めるように舐めてやる。

光輝は、エンジェル・スマイル余所行きの笑顔を浮かべたまま、そんな一人と一匹の様子を眺めていた。その目が笑っておらず、光輝の『悪い虫リスト』アキラ姉編』に、ヴォルデの名が載せられたことに、彼らはまだ

気付いていなかった。

【第22・5話】『御父様と勇者コーキ』

「はじめまして。私はクロード。君の前代の勇者だ。人は私のことを『魔王の番』あるいは『銀の賢獣』とも呼ぶが、君の好きな名で呼んでかまわない」

威厳たつぷりに光輝に告げた銀の獣。

思わず背筋を伸ばした光輝に御父様はふっと笑うと口調を和らげて続けた。

「たまに我が愛し子達に

『へたれ御父様』

と呼ばれるのだけど、最近の若い子たちの言葉なのかいまいち意味が分からないんだよね。君、分かる？」

と可愛らしく小首を傾げた御父様に、

光輝は「へたれ御父様……」と呟いた。

その台詞をクロードが聞くや否や、再び空間を緊張が走った。銀の瞳を不穏に揺らめかせて御父様は告げる。

「悪いけど……『お義父様』とだけは呼ばせないよ……？」

勇者コークは思った。

この世界では勇者の条件に愛娘（アキラ姉）ラブであることが加えられているのだろうか、と。

【番外編】『御父様は草食系』、『懐かしくも愛おしい日々』

銀の獣がこちらに向かって駆けてくる。

鋭い爪が岩を削り、大地に己の足跡を刻む。

「よう。俺はバルトロだ」

蒼の瞳をギラリと光らせ、バルトロは咆哮する。

「ここにあるのは、気が乗った時に活動報告におまけとして載せられていた小話だ。作者が本編に載せられなかったネタ、妄想が止まらず書いてしまったネタなんだと。ただし、活動報告時とは表現等が一部違うそうだぜ。いまいち気に入らない表現等を改訂したんだとよ。」

優美な耳を持つ獣はにやりと牙をむき出し、最後にひと際大きく吼えた。

「さあ、思う存分、番外編を楽しんでいてくれ」

【番外編】『御父様は草食系』

「御母様って肉食系女子だよね」

逃げ惑う一角獣を追いつめる御母様を見ながら、モニカがふと呟いた。

勇者光輝を交えての一角獣狩りはフィナーレに突入していた。頭

数が多いと逆に効率が悪いということで、モニカと光輝、御父様は待機組となり、御母様と弟妹たちの狩りを離れた所から見守っている。

彼らの役割は、時々、一角獣を守らんと特攻する神官を安全圏まで風の魔力で吹き飛ばすことだ。

「えっと、どこから突っ込めばいいのかな」

小坂家突っ込み隊長の光輝は脱力しながらモニカにもたれかかった。

『肉食系女子』ってそういう意味じゃないとか
そもそもマジものの意味で『肉食系』だとか
現役魔王に『女子』ってどうだとか

むしる漢の中の漢だよなとか

光輝の脳内で様々な突っ込みが渦巻いた。

生まれ変わっても姉の天然ボケは治らなかつたらしい。

とりあえず、姉に抱きついて「モニカ姉は天然系モツフルだね」とコメントしておく。

そんな一匹と一人の間に御父様は鼻先をずいに入れてモニカの頭を優しく毛繕った。

「『肉食系女子』？　それも最近の若い子たちの言葉なのかい？
モニカ」

光輝は頭上から尻尾でベシベシされた。

御父様の尻尾は光輝の身の丈ほどの長さがある。

一応潰さぬように力加減はしていたが、頭上から振り下ろされる銀の毛皮に埋もれて怯えるがいい、と御父様は思ったらしい。

が、ひょいっと光輝の上から尻尾をどければ、黒の瞳をキラキラと輝かせた光輝くんがいた。

むしろ喜んでいた。

予想と異なる反応に、何故だ……と、しょげた尻尾に抱きつく光輝。

彼の期待に満ちた目に負けて御父様が尻尾を上下してやれば喜びに満ちた悲鳴が上がった。

【番外編】『懐かしくも愛おしい日々』

それはまだ狩りも許されていない幼き日。

御母様の前足の上に弟妹達とよじ登るほど小さき日。

今は昔の懐かしくも愛おしい日。

銀の雨降る月の夜のことだった。己の尾さえも見えぬ闇の中で黒の幼獣は瞳を閉じた。

思い出すは母の子守唄。

庭には向日葵が咲いていた。

湿った土の匂いがする雨の日だった。

リビングにあるソファ―に母が座っていた。
左右にいるのはまだ幼い晶あきと光輝ひかりだ。

彼らは母のまあるく膨らんだお腹に耳を当てて小さく囁きかけた。

「ゆーき、おねーちゃんだよー」

「勇輝ゆうき。お兄ちゃんだよ。お前はしっかりした子に育つんだぞ。僕は天然なアキラ姉のフオーで精一杯なんだ」

母は優しく幼子達の頭を撫でる。

二人に降り注ぐ小さな笑い声。

「さあ4人でお昼寝しましょう。私と晶と光輝と勇輝。折角こんなに良い天気なのだから皆でお昼寝しましょう」

光輝は怪訝そうに母を見上げる。

「お母さん。今日は雨だよ」

そうねと呟き、母はガラス戸を叩く雨粒を見つめた。

「まるで、水の中にいるみたいじゃない？ こんな日に見る夢は透明に澄んだ、アキラちゃんみたいに優しい夢よ」

もつすぐ三児の母になるとは思えない無垢な微笑みに、

暫し呆けた光輝は、僕が、僕がしっかりしてお母さんを守るんだと決意を固め、

照れて赤くなった晶は、タオルケットと枕を取つてくると寝室へ

逃亡した。

眠りに落ちる幼子に、降り注ぐのは――

重なり響く暖かな鼓動

透明に澄んだ優しい雨音

柔らかに囁く母の子守唄

愛しさ溢れる優しい記憶。

いつまでも……いつまでも続くと思っていた愛おしい日々。

瞳の奥から湧く熱に『くろいの』は不味いと目を瞬かせる。

水の膜に揺らめく視界の向こうで、何かかが光った気がした。

瞬いた拍子に、黒の毛並みを濡らす一筋を何かはそつと舐めとつた。

頬から離れた大きな口は、ぐいっと『くろいの』の首筋を噛み、柔らかな銀の毛並みの上へと降ろした。己が踏みしめているのが御母様の前足であると知った瞬間、何かが体当たりしてきた。

その何かと共に、『くろいの』は御母様の足の上から真つ逆さまに落ちた。

幼獣の悲鳴じみた鳴き声が響く。

体の上に何かが乗っているため、『くろいの』は受身も取れなかった。

だが、その何かを振り落とすという選択肢は存在しなかった。

それは彼女の大切な銀の毛玉達だったから。

庇いこそすれ、彼らに怪我をさせるなどもつての他だったのだ。

ゆっくりと黒の瞳を開けば、彼女を心配そうに見つめる蒼の瞳があった。月の光を弾いてキラキラと光る銀の毛玉たち。ふとよぎった言葉は、懐かしい父親のものだった。

『宝物はキラキラしているものだろう？』

あれは、たしか弟の光輝が生まれた時に、えらくキラキラした名前だと首を傾げた己に父親が行った言葉だった。父は、彼女と弟は自分の宝物だと誇らしげに胸を張っていた。

衝撃に引っ込んでいた瞳の熱が再び繰り返す。

水の膜が『くろいの』と世界を隔てようとした瞬間に、再び彼女は顔面を舐められた。

弟妹たちだった。

小さな舌で拙くも必死に、姉の涙にぬれた目元を、頬を、両耳を毛繕っていた。そのあまりの真剣な表情に『くろいの』は少し可笑しくなる。

ふわりと揺れる小さな黒の尻尾。

伏せていた黒い耳がそろりそろりと持ちあがる。

まだ短い黒の髭もくすぐったげに揺れた。

「怖い夢でも見たのかい？　我が愛し子よ。

案ずることはない。

怯えることはない。

いかなる脅威も我が牙で打ち砕いて見せようぞ」

優しい声が頭上から降り注ぎ、最後の雫を舐めとった。いつしか雨は降り止み、白く輝く月の光が洞窟に差し込んでいた。はつきりした視界の向こうで、月光を弾いてキラキラと光る銀の毛並み達。

『宝物はキラキラしているものだろう？』

ああ、と『くろいの』は思う。

（キラキラ輝く宝物は、ここにもある）

心配げに己を見ている五対の蒼の瞳に、ふるふると首を振って『くろいの』は鳴く。

「いいえ……いいえ、御母様。とても優しい夢を見ました。

水の中、透明に澄んでキラキラと輝く夢を」

その晩、『くろいの』は弟妹達に押し潰されて寝た。心配して『くろいの』から離れようとしなかった銀の毛玉たちは黒の毛玉を枕に満足げに寝鳴きを呟く。銀に埋もれた黒も苦しげながらも幸せそうであった。

御母様は柔らかな銀毛と尾の中に彼らを包み込み、蒼の瞳を和らげて、そつと己も瞼を閉じた。

暖かな鼓動に包まれて獣達は眠りに落ちる。朝の日が昇り、寝ぼけた愛し子達がお互いの尾に耳に背に噛みついて、そのまま組んず解れつの大乱闘に発展するまで。

【23】銀の賢獣と黒の勇者（御父様視点）

王宮の外れには一字の古びた塔がある。

『銀の揺籃』と呼ばれる塔は、名に銀と付くにもかかわらず遠目には濃緑色に見える。近づけば、それが塔の表面に隙間なく張り付く蔦の葉の色であると分かるだろう。この蔦はただの植物ではなく、建物を保護して侵入者を排除する魔術植物である。その証拠に、濃緑の葉を裏返せば銀色の魔術文字が一面に刻み込まれている。

ただし、王族あるいは魔王に類するもの以外が許可なく蔦に触れば、たちまち業火に焼かれ地獄の苦しみを味わうことになるであろう。銀の揺籃には、それ以外にも様々な防衛魔術が備わっており、人間は近付こうとすらない場所であった。

聖母葉の緑守に抱かれずとも、銀の賢獣の研究塔に入ろうとする『勇者』など普通はいなかったが。

この世界において『魔術』と『魔力』は異なる。

魔獣が操る『魔力』は純粹な力業により世界に干渉する。

これに対して、先天的に魔力量が少ない人間が魔獣に対抗するために編み出したのが『魔術』だ。

人間は、長年の研究の結果、精巧な術式を構成することにより、

少ない魔力で強大な魔物に対抗できるまでの力を手に入れていた。

今では知る者は少ないが、銀の賢獣も元は人間であった。

銀の賢者と呼ばれていた彼は、生まれつき人間としてありえないほどの魔力を有しており、その量は銀の女王に匹敵するほどであった。銀の女王の番になるべく魔獣となった今では、彼としては魔力を使う方が頭を使わない分、簡単であった。

だが、細かな条件付けなどが必要な場合は魔術の方が適している。

そして、彼が今練り上げている魔術は、まさに一つの間違いも許されない精確さが求められるものであった。

真理を歪めた塔の中には、物理的には不可能にも思われる量の魔術書と実験具が詰め込まれていた。

最上階にある実験場に銀の賢獣はいた。

幾千もの魔術書が中空に浮かぶ。

彼が魔力を走らせるたびに、銀の魔術文字が宙に描かれ光り輝く。魔力に煽られ、銀毛がふわりと靡いた。

銀の賢獣は、ある魔術を完成すべく研究に没頭していた。

銀の揺籃という王国最高峰の防御を誇る建物内にいたためだろうか、珍しく彼は油断していたのだ。

その彼の無防備な背を密かに見つめる一对の黒の瞳があった。

少年は、先日の一角獣狩りの際に姉から教わった通り、気配を消

し、足音を立てないように銀の大毛玉に近づいた。

「おとーさまー！」

突然、銀の賢獣の背中に何かが抱きついた。御父様の思考がフリーズする。

宙に浮かんでいた魔術書が音を立てて地面に降り注ぎ、銀の魔術文字も掻き消えた。

背筋の毛を逆立てた御父様が、ビクリと尾を震わせ、きゃうん！
？ という大変愛らしい鳴き声を挙げてしまったということは男同士の秘密となった。

逆立った毛並みをんべんと舐め、膨らんだを尾を落ちつけた御父様は、大理石の床に伏せて己の頭よりも小さな人の子と視線を合わせる。

「危ないじゃないか。コーキ。危うく君を傷つけるところだったよ」
悪戯に成功した光輝は黒の瞳を満足げに輝かせていたが、御父様のお叱りに少し気まずげに彼を見上げた。

「……ごめんなさい」
分かったのならばいいよ、と銀の賢獣は優しく光輝に頬ずりした。

異世界の人が子か勇者として召喚されてから一月が経とうとしていた。

小坂光輝という少年は屈託のない性格から魔王一家に直に馴染んだ。

クロードも、最初こそ、魔王の敵、モニカに付いた悪い虫と警戒していたが、今ではすっかり彼に骨抜きにされていた。

本能で生きる魔獣は嘘に敏感だ。そして、そんな彼らの直感が告げる。コーキは本心からモニカを慕っている。彼の『好き』は、恋情ではなく親愛から生まれるものであるとクロードは納得せざるをえなかった。コーキがモニカを見つめる視線には、情欲は一切含まれず、ただ泣きたくなるほどの思慕が込められていた。

コーキが何故そこまでモニカを慕うのかは分からない。彼とモニカに今まで接点は一切なかったはずだ。だが、何かが彼らを結び付け、互いに互いを『愛すべき家族』と認めている。その『何か』が何であるかを、どうやらモニカは誰にも言いつもりはなく、その秘密自体を隠しているつもりらしい。

モニカがコーキを特別視しているということも、そこに『何か』があることも、魔王夫妻からすれば一目瞭然であった。

だが、そんなことはどうでもいい、と魔王夫妻は結論付けた。幾千の時を生きてきた魔獣の女王は、蒼の瞳を細めて己が番に告げた。「我が愛し仔が愛する相手は、我らが愛する相手でもある。我が愛し仔が家族として人の子を愛するというのは、我らもまた、慈しむべき愛し子としてコーキを迎えようぞ」

彼としても愛妻の言葉に異論はなかった。

彼らが光輝から感じるのは、ただ真っ直ぐにモニカを慕い、愛する感情であった。

彼らの愛娘を大事に思う相手を、どうして好ましく思わないわけ

があらうか。

それが、愛らしい幼子ならばなおのこと。

魔王夫妻はコーキを彼らの末子として家族の輪に迎え入れ、クロードは父親としてコーキを守り慈しんだ。

空中散歩が好きと聞けば、己の背に乘せ王都の上空で風となり、（あまりの速さにコーキの目が回ってしまい後から愛娘に叱られ耳をへたらせ）

味噌汁という異世界料理が好きと分かれば、料理長に伝家の宝刀『上目遣い』でおねだりをし、（人間にしたら30代の雄がすることではないと羞恥に尾を震わせ）、

味噌汁には『味噌』という発酵食品が必要と知れば、魔術で開発してやろうとして、王宮を苔と黴で埋めかけ、（宮殿を管理する役人の慟哭に慌てて清掃魔術を開発し）、

一角獣狩りをまたやりたいと言われれば、晴れた日に魔王一家全員で神殿まで遊びに出掛け、（教皇から命の大切さについて説かれ「食物連鎖って知ってるかい？」と牙を剥き出して）、

と家族サービスに努めた。

その合間に本来の魔獣の王族としての仕事とある魔術の研究を行っていた。

ある魔術とは『コーキを元の世界・時間軸に帰還させるための術式』だ。

明るく笑う黒の勇者を見るたびに、このように愛らしい幼子を失った彼の本来の『家族』の悲しみをクロードは思った。自分ならば、愛し子の一頭を奪われれば、悲しみと怒りからその世界を滅ぼしてしまっただろう。突然に家族から引き離されたコーキのために、一日でも早く完成させようとクロードは時間があれば銀の揺籃に籠り研究を進めた。

クロードの協力と、王宮から寄付を打ち切ると圧力をかけられたパレヴィダ神殿の不眠不休の努力により、コーキが元の世界に還るための魔術研究は順調に進んでいた。

どうやらパレヴィダ神殿はこれまでも何度か不正召喚を繰り返していたらしく、膨大な量の資料が教会に存在していた。クロードはまさか他にも召喚被害者がいるのではないかと危惧したが、幸いと言えるのかどうか、成功例はコーキのみであった。例え失敗でも、貴重な異世界召喚の実証例である。コーキを安全安心に、同じ世界、同じ時間軸に還すべく、クロードは研究を続けていた。

その結果、術式は完成間近にまでなっていた。

ただ、気がかりなのはコーキの黒の瞳の奥に見える不安げな光だ。勿論、気丈にふるまっていたても、見知らぬ世界にいきなり召喚された幼子が不安を感じぬわけがない。

だが、クロードは、それとは別の理由があるのではないかと考えていた。

「もうすぐ君を元の世界に還すことができるよ」

そう告げた時の、コーキの泣きそうな表情が脳裏に焼き付いて離れない。

「コーキは「嬉しくて」と言っていたが、魔獣の本能がその理由は嘘であると告げた。

（あれは……絶望か？ いや、恐怖か。まるで何かを失うことを怖がっているようだった）

泣く愛し子がいれば、その頬を舐めてやるのが親と言うものだ。愛妻風にいえば、愛し子を怯えさせるものがいれば、牙で打ち碎くのが親と言うものだ。

——では、泣くのを我慢する愛し子がいれば、どうすればいい？
不安を押し隠し、何も心配事などないかのように己に抱きつくコーキに、クロードは耳を伏せた。

魔術であればいかなる問題も解決してみせる銀の賢獣も、仔育てに関してはただの新米パパに過ぎない。どうやってコーキの不安を聞き出そうか、と悩める育メンを見上げながら、黒の勇者は首を傾げた。

（御父様の耳がへたれてる……どうしたのかな？）

その日、心配したコーキに逆に氣遣われた情けなさに尻尾を頂垂れさせた御父様と、その背を叩いて慰める国王陛下（五児の父）が見られたという。

【24】月に泣く

黒の魔獣は、尖塔の上、己の運命を恨むが如くに天を睨む。

周囲の星の光りをかき消すほどに明るい満月が天上から大地を照らし出していた。

落ちつかなげに揺らめく黒の尾。

不安げに満月を映し、揺れる黒の瞳。

艶やかな黒の毛並みを夜風が玩ぶのにまかせ、彼女は思索の海に深く沈み込む。

コーキを元の世界に帰す魔術が完成した。一週間後に帰還式を行うと御父様に告げられたのは今朝だった。それからずっと彼女は考えていた。否、コーキが勇者召喚されてから、ひよっとしたら、この世界に生まれ落ちた瞬間から、彼女は考え続けてきた。

自分はどちらの世界にいるべきなのだろうか、と。

答えは、まだ見つからない。

期限は、もうすぐそこまで迫っているというのに。

焦りばかりが降り積もり、思考は空回りを繰り返す。

牙を剥きだし笑う御母様

——優しく微笑むお母さん

——宝物だ、と誇らしげに笑うお父

さん

耳をへたらせ幸せそうに笑う御父様

——アキラ姉と瞳を輝かせたコーキ

『くろいの』と尾を振る銀の毛玉達

そして――

「モニカ」

ちょうど思い浮かべていた人物に呼びかけられ、驚きにモニカは黒の尾を膨らませる。背筋を逆立て、にっと奇声を挙げた様は、流石親子なだけあって某へたれ魔獣にそっくりであった。

「よく見つけられたね」

尖塔の小窓から屋根に登ってきたヴォルデにモニカは訝しげに首を傾げた。天狼の側仕えである銀狼騎士団長が王宮の外れにある尖塔にわざわざ足を運ぶとしたら、目的は魔獣モニカ一家の長女を探してきたというもの以外は考えられなかった。だが、闇に融け込む黒の獣をこんな夜中に探した理由が分からなかった。どんな用であれ、出来る限り早く済まそうとモニカは落ちつかなげに尾を振る。今は一匹で居たい気分だった。

「なに、案外簡単だったぞ。今夜は月が明るい」

モニカの隣に腰を下ろし、ヴォルデは星空を見上げた。彼にっられて夜空を望めば、満月が皓々と輝き、遙か天上から王都を見下ろしていた。そういえば、月が欲しいと、弟妹達が泣いたことがあったなあと、モニカは黒の瞳を細める。御母様が「良からう撃ち落としてみるか」と発動させてはならないナニカを始めようとしていたのを慌てて止めたことがあったとモニカは遠い目をした。ふいに、静かな声でヴォルデが呟いた。

「月に向かい泣いているようだ、と思ったことがある」

囁くように言われた言葉の意味が分からず、モニカはヴォルデを見つめる。だが、彼は夜空を見上げたままで、彼女と視線を合わせようとはしなかった。夜風がヴォルデの後ろ頭で一つに括られた黒髪をためかせる。

「ここにはない、ここからでは手が届かない月が欲しい、と。無理だとも度度も諦めようとしても諦めきれず、ただただ月に向かい泣く子供のようなと思っていた」

お前のことだとヴォルデに言われて、モニカの思考は一瞬停止した後、急速に回転を始めた。ヴォルデは何を言っている？ いや、何を知っている？ ばれたのか？ いや、誰も考えはしないに違いない。異世界の魂が魔獣に宿ったなどとは。沈黙するモニカに構わずヴォルデは続ける。

「手が、届いたのだろう」

モニカに向けられた漆黒の瞳は怖いほどに真剣であった。疑問系ではあれども断定した口調で彼はモニカに問うた。お前の『月』はコサカ殿なのだろう、と。尾を膨らませたモニカに、ふいに表情を緩めてヴォルデは口元を手で覆い、肩を揺らした。

「モニカに札遊びは無理だな。顔に全てが出る」

そうか、と呟くと、彼は眩しげにモニカを見上げる。

魔獣形のモニカの大きさは、ヴォルデを一飲みに来るそうなほどのものであった。それでも彼は怯えることなく、彼と視線を合わせるために屈んだ彼女の漆黒の毛並みを優しく手で梳く。

「なあ、モニカ。俺はお前が『月』を求めているとずっと前から気づいていた」

ただ淡々とヴォルデは告げた。彼女が月に向かい泣くのを、知らない振りをしながらも見守ってきたのだと。どんなに親しい間柄でも触れてはならない領域があると、何も出来ない己を齒がゆく思いながらも、彼は祈ってきたそうだ。いつか、彼女が月を手に行けることを。そして、その為に彼に出来ることがあるならば、協力は惜しむまいと決意していた。

「昔、ずっと昔、俺は、月に手が届く事なんてない、と諦めていた」
だがな、と彼は懐かしげに黒の瞳を細めた。

「月の方が俺の手の中に降り立ってくれた」

お前のことだよ、モニカ、とヴォルデは彼女の名を呼ばう。

「きつと、あれを僥倖と呼ぶんだ。俺は、俺の月と一時でも一緒にいられて、本当に……」

そこで俯いたヴォルデはしばらく黙り込み、ぐっと拳を握りしめると、何かを吹っ切るように勢いよく顔を上げた。

「モニカ、お前は俺に月をくれた。だから、次はお前の番だ」

満月を背に、月光に照らし出された黒の獣の瞳を、満月を映し出し、輝く漆黒の瞳が捕らえた。

「月を、掴め」

後に彼女は満月を見る度に、この夜のことを思い出した。

ずっと探していた『月』をモニカが掴み、彼女が決意をした夜のことであった。

【25】今夜は月が綺麗だね、と少年は笑った。

黒の勇者は寢室の大窓から夜空を眺めていた。

満月に照らし出された幼い顔には険しい表情が浮かんでいる。

夜風に黒の髪をなびかせ、彼は皓々と輝く月をただ眺めていた。

「へい！ その少年。おいらと一緒に夜の散歩としゃれこまないかい？」

少年の頭上から一頭の魔獣が音もなくバルコニーに降り立つ。突然の登場と色々と台無しな台詞に、少年は複雑そうな表情で笑った。

「どうしてこの台詞でお母さんを釣れたのが、俺、いまだに理解できない……」

魔獣が吼えた台詞は小坂家一子相伝のナンパ術だった。若かりし頃の父親が幼馴染みであった母親を初デートに誘った時の台詞だそうだが、何故この台詞に母親が頷いたかはコーキにとって小坂家七不思議の一つであったりする。呆れた表情の弟に、姉は可笑しそうにヒゲを震わせる。

「あの二人は意外と割れ鍋に綴じ蓋なんだよー」

不思議そうな表情をするコーキにモニカはふふふ、もうちよつと大きくなったら分かるよ、と笑い、艶やかな黒毛に覆われた背を向ける。

「月が綺麗だね。夜空の散歩と洒落込まない？」

何それ、愛の告白？ と口元を緩めた弟に、うん、魔王一家では恒例のイベントなんだよーとモニカは返した。

黒の獣の背に乗り、黒の勇者は夜の空を駆ける。辿り着いたのは王宮外れにある尖塔であった。モニカは、コーキを背から屋根に降ろすと、魔力を押さえて犬の姿となる。そして、夜風からコーキを庇うように彼女は寄り添った。高いなあと怖がる様子もなく下を見下ろす弟に、王都で二番目に高くて、私のお気に入り場所なんだよ、と姉は尾を振った。一番はどこなの？ とコーキが尋ねる。

「ええと、ほら、御父様がよく籠もっている塔があるでしょう？」

銀の揺籃っていうんだけど、あれが王都で一番高い建物なんだよ」

御父様は、まだ人間だった頃、桁外れに高い魔力量から色々な人間や魔獣に狙われたんだって。そういう人間とかから御父様を護るために当時の王が作ったのが銀の揺籃——銀の愛しき幼子が眠る揺りかご——だって聞いているよ。子供のために王都一の塔を最新の魔術の保護付で建ててしまうなんて過保護だよ、と王子の娘が牙を剥きだし笑う。黒の勇者は、なるほど、御父様の親馬鹿は遺伝かと深く頷いていた。ちなみに、へたれと恐（愛）妻家も遺伝していたりする。

「月に手が届きそうだね」

眩しそうに満月を眺めるモニカに、コーキもまた天を見上げる。

「うん。でも、届かないからこそ月は月なんだよ」

首を傾げたモニカに、光輝は片手を天に伸ばし、月を撃ち落とす真似をする。

「だって月を撃ち落としても、それは、ただの巨大な石ころだ。月が輝いて見えるのは、太陽の光を反射しているからで、月は独りじや光れない。月は宙^{そら}にあるからこそ光り輝くことができるんだよ」
だから、と光輝はモニカを見上げる。

「俺は月を地に引きずり落としたりしない。だって、宝物にはきらきらと輝いていて欲しいものでしょう？」

姉の膨らんだ尾を宥めるように撫でて弟は告げる。

「お別れ、だね」

コーキ、と震える声で己を呼ぶ姉に、光輝は黒の瞳を潤ませ、笑う。

「知っていたよ。モニカは、もう、アキラ姉じゃなくてモニカなんだって。魔王一家の長女で、あの気に食わない男の盟友で、魔獣なんだよね。家族が好きで、王宮の人間が好きで、一角獣と神官の悲鳴が大好きな、この世界を愛するモニカ——でも」

いつかのようにモニカの首に縋り付き、艶やかな黒毛に顔を埋めコーキは呟く。

「俺の姉だから。生まれ変わっても、魔獣になっても、異世界にいても、モニカになっても、姉さんは、俺の姉さんだ」

うん、と頷いたモニカが、弟の背を宥めるように前足でタシタシと叩く。

今夜は月が綺麗だね、と呟く弟に、目と耳を赤くした姉が、再び、うん、と頷いた。

すつきりした、とコーキは少し目元を赤くして笑う。

モニカがどちらの世界を選ぶか。それは、彼女が魔王一家や銀狼騎士団と戯れ、王族やパレヴィダ神官で遊ぶ様を見ていれば、コーキに言わせれば一目瞭然であつたそうだ。特に一角獣狩りの時のモニカは妙に輝いて見えたという。何か恨みでもあるの？ 置き土産代わりに俺が果たしてもいいよ？ と純真な瞳で見上げる弟に、暴走する弟妹は間に合っていますと激しく首を振るモニカだった。

何時、モニカから別れを告げられるか、と怯えるのにも飽き、いつそ、石ころでもいいから持ち帰っちゃおうかと思っていたところだよ、モニカ姉は生まれ変わってもマイペースだね、と弟は爽や

かに笑う。え、私の意志は？ と後じさる姉に、よいではないかと襲いかかる弟。ひとしきりじゃれ合った後に、姉弟は屋根に転がる。

「あんまりモニカ姉が待たせるからさ、俺から言つてやろうと思つていたところだったんだ」

そ、それはお待たせいたしましたして、と耳をへたらせたモニカに、モニカ姉は天然だから仕方ないよ、と弟はその頭を撫でる。弟に慰められ、ますますしょぼんとした耳と尻尾をニマニマと面白そうに眺めていた弟は、ふと思ひ出したように顔を上げ、モニカの黒の瞳をじつと見つめた。

「それよりもモニカ姉。ヴォルデのことなんだけど」

うん？ と首を傾げたモニカにコーキは輝かんばかりの笑顔で告げた。

「俺は、義弟と呼ばせるつもりはないからね」

どうしてコーキをヴォルデが弟と呼ぶの？ と目を瞬かせた姉に、弟の方が脱力した。コーキが、この世界で一番姉が輝いていると思つたのは、彼女が、ある人物と一緒にいる時だった。だが、この天然の姉はまだ自分の気持ちに気づいていないらしい。

あの男もさぞ苦労することだろう、と敵ながら同情するシスコン弟であった。

アキラとコーキの母もまた、天下一品の天然嬢であり、そんな彼女を口説くために生み出した直球かつ古典派の術こそが、小坂家一子相伝ナンパ術であると、父親の数々の苦労話と共にコーキが知るの、また別の話だ。

【26】床の間に飾られた宝物は1%の愛と勇気の冒険と99%の教皇の涙から

副題が長すぎると分かっているながらも、これ以上にじっくりする副題が思い付きませんでした。

【26】床の間に飾られた宝物は1%の愛と勇気の冒険と99%の教皇の涙から

少年が故郷に帰る日は、彼の旅立ちを祝すかのような快晴であった。

銀の揺籃の屋上で、この世界に來た時に着ていた中学の学ランに身を包み、小坂光輝は魔方陣の完成を待っていた。御父様が呪文を唱える度に銀の魔術文字が走り、魔方陣が形作られていく。元の世界ではあり得ない幻想的な光景に、しかし、コーキは見入ることなく、落ち着きなく周囲を見回していた。彼はある獣を探していた。帰還する時が刻一刻と近づいているにも関わらず、彼女が未だ姿を現さない。もしかしなくとも、今生の別れとなるというのに。儀式を中止して貰おうか、と御父様に向かい一歩踏み出した時であった。彼の背後に一陣の風が吹く。馴染みのある気配を感じ、振り返った彼の目に映ったのは、黒の獣ではなかった。そこにいたのは——一人の少女だった。

大きな襟下で結ばれた白いタイと濃紺のスカートが風に靡く。慣れぬその服がセーラー服だと知っているのは、この世界では光輝だけだった。高校の制服に身を包んだ少女は——コーキがずっと探し求めていた姉だった。

「コーキ」

腕を広げた彼女の胸にコーキは飛び込んできた。彼女の脳裏に小さな幼子の姿が浮かぶ。小さい頃、コーキは泣き虫で何かあるとすぐに彼女のもとへ逃げ込んだ。震える弟の背を、いつかのように姉は優しく叩いてやる。不安を押し隠そうとする弟をこの手で抱きしめたいとずっと彼女は願っていた。初めて使う魔術に四苦八苦し、

遅刻しながらも何とか儀式に間に合わせることが出来た、とモニカは弟を柔らかく抱きしめる。

「大丈夫だよ。コーキ。お姉ちゃんはここにいるよ」

おずおずと顔を上げらた弟に姉はふわりと笑いかける。
泣かなくても大丈夫だよ、と。

「コーキ。お姉ちゃんは居なくなる訳じゃないんだよ」

ふるふると揺れる黒の瞳をのぞき込み少女は微笑む。

「ただ、ちよつと遠くで魔獣とか魔王の娘とかしているだけだよ」
いや、それは安心できないよ、と震える声で弟は突っ込みを入れた。笑った拍子に零れた一筋を優しく拭ってやりながら少女もまた瞳を潤ませた。

「……モニカ姉さん」

掠れた声でコーキは姉の名を呼ぶ。

「なあに？ コーキ」

アキラではなくモニカと呼んでくれた弟に、柔らかな声でモニカは応える。コーキは何かを言おうとして逡巡した後、ポツリと呟いた。

「……元気で」

「うん。コーキもね。……お父さんとお母さんと勇輝に宜しくね」

離れたがたそうにしている弟妹の間に割り込んだのは末子のリーナスだった。

「モニカ姉さんばかりずるいー」

そうですね、と続いてコーキの顔を舐めたのはエルティナだった。
「私達だってコーキともつと遊びたかったのですから」

舐める力が強すぎてよるめいたコーキを尾で受け止めたのはアルクインだった。

「もつと異世界の話を聞きたかったな。王都で案内したいところもまだまだあったし」

まったくだ、とバルト口はわざわざ魔獣から犬に姿を変えて光輝に飛びついた。

「一角獣はこれからが旬で脂がのってくるんだぜ。一緒に狩りたかったのにな」

弟妹達の銀毛に埋もれたコーキにモニカは目を細める。

「ね、ねえさん！ 助けて！」

助けを求める勇者に姉は優しく微笑みかけた。

「最後なのだから、存分に毛皮を堪能するといいよ」

でも、お持ち帰りはだめだよーと泣き笑いをして、愛おしい銀の毛玉（勇者付き）に彼女も飛び込んだ。

多少くたびれた勇者に、御父様（魔王の番^{つがい}）が気遣わしげに尋ねる。

「だ、だいじょうぶかい？ コーキ」

心配げに碧の瞳を揺らめかせ、優美な耳をへたらせ、艶やかな銀の尾を震わせる御父様に、悩殺という意味では今のがとどめになりました、と締まりのない顔でへらりと光輝は笑う。

魔王一家と銀狼騎士団、王国、パレヴィダ神殿など、この地で出会った様々な魔獣や人、メタボ副神官長などから、贈られた土産や、ちよつと強引にお強請りした供物を抱え、勇者は異世界に別れを告げた。

完成した魔方陣から放たれる銀の粒子がコーキに収束していく。

「姉さん！」

最後の言葉は魔方陣から生まれた強風にかき消えた。以前にも感じた浮遊感を覚え、彼の意識は暗転した。

最後の銀の粒子が消えた後も、光輝のいた場所をじつと見つめ続けるモニカに、御母様は優しく吼える。

「我が愛し子よ。本当に行かせてしまつて良かったのかい？ 黒の勇者に嫁ぎたかつたのではないのかい？」

嫁？ とちよつと首を傾げたモニカは、不安げに此方を見る御父様に気づき、ふるふると首を横に振つた。

「いいえ、御母様。私は、行きません。私は、この世界で、御母様の娘として生きます」

おお、愛し子よ、と感激に尾を大きく震わせる御母様と、僕はー？ 私はー？ とその周囲で跳ねる弟妹達、参加したいが魔方阵の片付けがなかなか終わらず唸る御父様。そんな彼らの中心で楽しげにモニカは笑う。笑つた拍子に流れた一筋は弟妹が舐めとつてくれた。

その日、とある町の墓地で早朝から一騒ぎがあつた。何でも神隠しにあつたという少年が一月ぶりに見つかつたそうだ。不可思議な品々に埋もれるように倒れていたという少年は、行方不明の間のこととを尋ねる周囲に、「ちよつと勇者をしていた」と冗談めかして笑うだけだつたという。彼の家を訪ねれば、その時の土産だとか何かの角が床の間に飾られていることだろう。白く輝く不思議な角に、ある人が彼に何の動物のものかと尋ねたことがあつた。

彼は、懐かしげに瞳を細めて、こつ答えた。

「姉と狩つた一角獣の角ですよ」

【番外編】『宝物のその後』 『その後のその後』

黒髪の青年がこちらに向かって歩いてきた。

「こんにちは。小坂光輝です。モニカ姉の弟で、現在は…… ネタバレになるので秘密です」

エンジェル・スマイル

余所行きの笑顔を浮かべた彼は、昔を思い出し、懐かしそうに目を細めた。その後ろでは、相変わらず、黒いギザギザ尻尾がウニョウニョしている。

「ここにあるのは、作者が本編に載せられなかったネタ、妄想が止まらず書いてしまったネタ等です。特に、一部では、俺（光輝）の未来の姿が描かれています。基本的に悪のりで書かれたものであり、本編でのイメージを崩す恐れもありますので、ご注意下さい」

それでは、と勇者光輝は最後に礼儀正しくお辞儀をする。

「どうぞ番外編をお楽しみ下さい」

*** 【番外編】『宝物のその後』 ***

三日月が笑う夜空を眺め、セーラー服の少女は虫の音に耳を澄ませた。少女の座る縁側からは、祖母が精魂込めて世話する庭が見渡せる。今は亡き伯母が好んだという向日葵が、今年も天を目指して背を伸ばしていた。祖父母と父に言わせれば、その伯母に彼女は瓜二つであるらしい。懐かしそうに目を細める祖父の顔を思い出し、彼女は作業する手を止めた。そのまま暫く庭を眺めていると、抗議

するかのように手元の物体が淡く輝き始めた。

『自発的に光る』物体を、白布を片手に、彼女はまじまじと観察した。

茶道部の稽古から帰ってすぐに命じられたのは、床の間に飾られている宝物の手入れだった。だが、暇があれば祖父母や父親が嬉しそうに磨いているソレは、彼女が手入れをしなくても良さそうなほど光り輝いていた。内側から明らかに光っている宝物は、父の代から小坂家の家宝とされたという、何かの動物の角だった。

螺旋状に溝が刻まれた乳白色の滑らかな側面

大人の腕ほどの太さと長さを誇る見事に均等のとれた円錐形
夜の闇に放たれる月の光にも似た白く淡い輝き

——胡散臭い、とは、こういう品のためにあるのだ、と少女は深く頷いた。

「晶。明かりもつけずに何をして居るんだ。節電か？」

仕事から帰ってきた父が畳の間に入ってきた。彼女の手の手を覗き込み、ああ、手入れをしてくれていたんだね、ありがとう、と目を緩め、彼女の頭を撫でる。

小坂晶はフルフルと肩を揺らし、きつと父を睨み付けた。

「お父さん、前から言おう言おうと思っただけだ！」

なんだ？ と首を傾げた父親は、ハツとし、ま、まさか……と狼狽した表情で彼女の隣に正座する。

「か、彼氏が出来たのか？ 姉さんに似て天然二ブ二ブ街道を爆走中のお前が！？ 誰だ！ 隣の武か？ この前送ってもらったとい

う善蔵とかいうやつか？ よし、ちょっと連れてこい！ 叩き切つてやるから！」

ちがーう！ と吼えた娘に、おお、吼え方まで姉さんに似てきたなあ、と彼氏疑惑が否定されてほつとした表情の父は、娘の右すとなれーとを軽く躲した。吼え方とはなんだ、亡き伯母つてどんな人物だったんだ、という疑問に、突っ込んだら負け、相手のペースに巻き込まれたら終わりだ、私！ と心の中で自分を叱咤激励し、彼女は宝物を父に突きつけた。

「コレ！」

父は、宝物がどうした、と首を傾げる。

「何なのコレ！？ 夜中に光るわ、時々、中年男の嚙り泣きにも似た音がするわ、変だ変だとは思ってたけど、この前のアレは何なのよ！」

つい先日、小坂家に強盗が入った。

地域の名家である彼女の屋敷に、茶道家であつた曾祖父が集めた名品の数々があるというのは昔から有名な話であつた。不心得者が屋敷に忍び込むことが度々あつたため、小坂家にはホームセキュリティが完備されている。しかし、最近、小坂家が狙われることがますます増えてきていた。それだけの宝物として注目を集めているは、実は曾祖父の骨董品ではない。彼女の目の前にいる現小坂家当主、小坂光輝こさかみつひの集めてきた、彼女に言わせれば、由来不明の胡散臭い、その道の人間に言わせれば垂涎の的の品々であつた。

話は一ヶ月前に戻る。その日も三日月が空に浮かび、チエシヤ猫のようにシニカルな笑みを浮かべていた。二階の私室で翌日の予習をしていた晶は、一階から何かが倒れる物音がした気がした。ヘッドフォンを外し、窓を開けると、はたして、庭には見知らぬ中年の男と、父がいた。

ど、泥棒！ と叫ぼうとした晶は凍り付いた。なんと、父は何を考えたのか、床の間に飾つてあるはずの宝物を片手に泥棒に突進し

ていったのだ。お父さん！ と悲鳴を上げた晶が見たのは、宝物から放たれた『雷撃』に打たれる泥棒と、一仕事したぜーと汗を拭う仕草をする父であった。

後日、事情聴取に来た警察官に、お縄になった泥棒が意味不明なことを言っているとわれ、「変な薬でも使っていたんじゃないんですか？ あはは」と爽やかに笑う父の後ろで、冷や汗をだらだらと流した晶であった。ちなみに、暴走する家族に冷や汗をかき、時にフォローする立場も、伯母と同じである。

閑話休題、それ以来、宝物に近寄るのも怖がっていた晶だったが、母親の命令に、しぶしぶと手入れをしていたのだ。はじめは恐る恐る触れていたが、何も起こらず、むしろ、手入れをした箇所を気持ち良さそうに輝かす宝物に、本当になんなんだコレ、と遠慮無くゴシゴシと磨く手に力が籠もった晶だった。そして、その手の中で宝物は、あ、そこ、そこがイイ！ お嬢さん、もっと！ という風に輝きを波打たせていた。

「電撃浴びせる宝物って、ありえないでしょう！ 何の動物の角なの？ っていうか、本当に動物の角なの？ どこの世界に電撃を放つ動物の角があるって言うのよ！」

言いたいことを言い切り、さあ、噂通り、秘密結社の悪の魔王でも何でも、好きな正体を告白しやがれ！ と、ドカリと胡座をかけた娘に、父親は眉を寄せる。

「行儀が悪いぞ、晶」

まだ誤魔化す気か、と同じように眉を寄せた娘に、仕方なさげに父は眉を下げる。

「もう少し、お前が大きくなってからにしようと思っていたんだけどな」

真剣な表情の父親に、晶はごくりと喉を鳴らす。

「実は、お父さん……勇者だったんだ」

はい、ダウト！ と晶は叫んだ。

異世界に行っていたという話は信じてもいい。だって、父だから。悪の帝王だと言われても驚かない。だが、勇者という点だけは理解できない、と晶は父に熱弁した。彼が、どれだけ町内で恐れられ、彼がどれだけ腹の底まで真っ黒かを。こんな黒くて狸なヌルヌル鰻が勇者なはずがないし、そんな勇者は嫌だ！ と言い切った彼女に、光輝は困ったように笑った。

事実、モニカの世界で彼がしたことといえば、

召喚主である神殿の神獣、一角獣を生け捕りし、その角を乱獲し、御父様との味噌開発に失敗して王宮をコケとカビだらけにし、魔王一家と共に副神官長のお八つを盗み食いする、

といった、一般的な勇者が目指す、愛と勇気の冒険とはかけ離れたものだった。

彼が、どうにか娘に勇者であったことを納得させ、異世界で彼の姉——彼女の伯母と過ごした楽しい日々を語り終わったのは、翌朝のことであった。

そして、屋敷にある、『御母様（魔王）のヒゲ』や『リーナスの尻尾の毛』、『モニカの肉球スタンプ』、『王様秘蔵のブランデー』等の門外不出の家宝の数々を娘に紹介し、門外っていうか、家族以外に見せられるか、こんな非常識な魔王一家の財宝を一つ、と突っ込まれたというのは、また別の話である。

*** 番外編の番外編『家宝のその後のその後』***

小坂家は、その筋では『現代の魔王』として有名な一家であった。

ある時、家族で遊園地に行った際に、魔法少女と魔物の抗争に巻き込まれたことがあった。楽しみにしていたジェットコースターに乗りなくなり涙目の弟を見た姉は、迷惑そうな顔で、激しく閃光と爆音を生み出す魔法少女達を眺め、懷から『御母様（魔王）のヒゲ』を取り出し、一言。

「魔王のヒゲさん、食べちゃって下さい」

その場に魔力を見ることが出来る人間がいれば、その『ヒゲ』が異常な勢いでその場の魔力を食らい尽くす様子に腰を抜かしたに違いない。魔物は断末魔の叫びを挙げ、消滅した。エネルギー源がなくなり、只の女子中学生となった魔法少女に一言。

「うちのシマで何勝手なことしてくれてんだ、お嬢ちゃん。ちよつと、お話ししようか」

そのドスのきいた話し方から魔王一家の姐さんと呼ばれる彼女の『説得』により、その後、小坂家の住む地域で魔法少女が魔物を倒す際には、小坂家に『ご挨拶』がなされるようになったという。

また、ある時、学校帰りの兄の前で、妹が悪の秘密結社に攫われたことがあった。非常に爽やかな笑みを浮かべた兄は、『リーナスの尻尾の毛』を通学鞆から取り出して、小型のリーナスもと擬きを呼び出した。

「小リーナス。悪いんだが、俺の妹がどこに連れて行かれたか、教えてくれ」

こつちだよー、と魔力の無い人間には見えない小リーナスが案内したビルは、その日、突如として爆音と共に粉碎された。人的被害も、他の建物の被害もなかった爆破事件は、世間では奇跡と噂され、悪の秘密結社達の間では愚か者どもの末路として胸に刻まれた。

また、ある時、スーパーでの買い物帰りの母子が、なんとかレンジャーと怪獣の対決に巻き込まれたことがあった。自分たちに降り注いでくるコンクリート片を眺め、母親はのんびりと「まあ、当たったら痛そうねえ」と呟き、『御父様（魔王の番）^{つがい}の指輪』を嵌めた指をパチリと鳴らした。

その瞬間、人々に降り注がんとしていたコンクリート片や鉄骨などが、魔獣に向かって慣性の法則を無視して逆流し始めた。瞬く間に傷だらけになる怪獣を見た息子が「怪獣さん、いたそー」と小さな手を怪獣に伸ばす。その手には、パレヴィダ神殿謹製『服従の腕輪』が填められていた。

人々が正気に返った時、その場には巨大なロボットが残されるのみであった。その日、小坂家の家族に柴犬の『カイ君』が加わった。ジユウ君よりこっちの方が可愛い、という末子のおねだりにより決定した名前であった。

また、その日の内には、何とかレンジャーの代表が陳謝に訪れ、お詫びの品を届けたという。『山吹色の菓子』に眉を顰めた母は、代わりに、新しく飼い始めた犬のための犬小屋を作ってもらうことにした。最新鋭の科学の粋を集めた犬小屋となったのは、言うまでもないことである。

小坂一家は、その筋では『現代の魔王』として有名な一家である。それは、彼らの家族に徒なす存在に対する容赦の無さからついた通り名であった。

『竜の逆鱗』『触らぬ神に祟りなし』と噂される彼らは、今日も家族のいる幸せを噛みしめて、日常を謳歌している。

そんな彼らの日常を護る品々が、何代か前の小坂家当主の姉が、異世界で魔王一家の長女をするために弟の側にいることができないのを憂い、何があっても大丈夫なように持たせた、過保護を越えた、

我が愛に溺れよ、愛おしき弟よ！
な品々であるといふことは、小
坂家の人間のみが知る伝説である。

『番外編1』『天からキラキラと舞い降りるもの』

塔の上からキラキラと輝く何かが舞い降りてくる。

目を瞬かせると、滲んだ視界がはつきりした。

あれは何——否、誰だ？

——その声を聞いた瞬間、ヴォルデの胸の奥から何かが溢れ出た。

勇者帰還の儀を無事に終え、モニカ達は、住まいとしている離宮に戻ろうとしていた。しかし、モニカは塔から降りるに降りられなくなっていた。理由は、目の前で睨み合う三頭だった。

「モニカ姉は僕が乗せるんだ！」

リーナスが大音声で吼える。

アルクインは、そんなリーナスを見下ろして、ふふんと牙を剥きだし笑った。

「リーナスは僕たちの中で一番小さいじゃないか。一番大きい僕の方が乗り心地が良いはずだよ」

エルティナはそんな二頭を長く優美な尾でベシベシと叩く。

「あら、私の毛並みが一番触り心地がいいのよ。私が一番乗り心地が良いはずよ！」

モニカの横に伏せているバルトロは、そんな三匹を呆れ混じりに眺め、くあつと奥歯まで覗かせて大欠伸をする。

「どうする？ モニカ姉。帰りも俺が乗せようか？」

バルトロは行きに人態のモニカを乗せて来たため、帰りは他の弟妹に譲る余裕を見せていた。その彼の抜け駆けとも言える台詞に、

他の三頭が一斉に吼える。

「だめーっ」

「却下！」

「お黙りなさい」

バルトロは、へいへい、と人間臭く肩をすくめ、伏せたまま目蓋を閉じた。既に中天に差し掛かった太陽の日差しが燦々と降り注ぐ屋上は、絶好の昼寝場所であった。日の光に銀毛を輝かせ、バルトロは気持ちよさそうに眠り始めた。

バルトロの横で弟妹達の言い合いを眺めていたモニカは、これはもう暫くかかりそうだと判断して、両親の元へ駆け寄る。仔魔獣達と共に離宮に帰ろうと待っていた彼らに、弟妹達の決着がつくまで自分は待つので、先に帰っていて欲しい、と彼女は告げた。

御母様は、少し考えた後に、よからう、と頷いた。

「私が乗せて帰ろうかとも思ったが、そうだな、先に帰るとするか。人の王の番に過保護は良くないと言われたことだしな。だが、愛し子よ。お前は、まだ人態に慣れておらぬであろう。気をつけて帰ってくるのだぞ」

御母様は蒼の瞳を優しく細め、人の姿をした娘に、そつと頬ずりをした。

御父様は少し思案するように尾を揺らした後、そうだね、とモニカに頷いてみせた。ただし、と彼は蒼の瞳を輝かせ、モニカの肩に銀毛に覆われた前足を乗せる。首を傾げた彼女の視界で、御父様の前足が銀の光を放った。光が収まった時、モニカはセーラー服ではなく、貴族の子女が着るような乗馬服に身を包んでいた。よく似合うよ、と御父様は尾を大きく振った。

「この服ならズボンで足が隠れるからね。人間の女の子は素足を晒

してはならないんだよ」

また今度、人間の女の子としての常識を教えてあげよう、と優しく吼える御父様に、元女子高生としての立場が……、と頂垂れたモ二力だった。

モ二力は塔の端から御母様と御父様を見送った。何気なく下を覗いた彼女は、遙か下の地上からこちらを見上げている人物に目を瞬かせる。王都一高い銀の揺籃、その屋上からであっても、彼女には男が誰かが分かった。そういえば、コーキを送り出す準備や人態の術を練習するために、一週間ほど会っていなかった、と男の顔に焦点を当て、彼女は黒の瞳に魔力をこめた。

天狼の瞳は、狙いを定めれば、例え千里先であろうとも鮮明な光景を映し出す。

その瞳が捕らえたのは、ひどく憔悴した銀狼騎士団長——ヴォルデだった。

長い黒髪は、無造作に束ねられ、何日も櫛を通していないかのようにはさばさであった。顔は無精髭に覆われ、目は落ち窪み、濃い隈に縁取られている。銀狼騎士団の隊服も皺が寄り、純白の布地は所々、紅茶の染みが出来ていた。

何よりも彼女の心を捕らえたのは、何かに耐えるように歪んだ、男の表情だった。ヴォルデは只でさえ強面だ。そんな彼が黒の瞳をギラギラと光らせて塔を睨む様子には、剥き出しにされた獣の牙を思わせる気迫があった。子供が見れば泣き出しそうな顔だ。しかし、モ二力も伊達に5年、彼の相棒をしていたわけではない。初めて見る表情であつたが、彼が何を堪えているのか、彼女には分かった。

何かが身体を駆け抜ける。

モニカは黒の瞳を見開き、黒の髪を魔力でうねらせた。

今、もしも彼女が獣態であったならば、その背筋の毛は逆立ち、尾は限界まで膨らんでいたことだろう。

（どうして、あんな表情を）

彼女は無意識の内に魔力で風を呼び起こし、己の周囲に纏う。そして、躊躇することなく、塔から飛び降りた。

【番外編2】『地獄程度の業火では済みません。』

長く艶やかな黒髪が風に靡く。

白く華奢な指が、己の頬にそつと触れた。

不安げに揺れる黒の瞳が、愚かな己の姿を映し出す。

——ヴォルデは、震える手を光に伸ばした。

風を纏い、天狼の娘は男を目指して飛ぶ。その速さに耳元で風が悲鳴を上げ、長い黒髪が天へと尾を引く。だが、モニカの瞳に映っているのは盟友たるヴォルデだけだった。

「ヴォルデ！」

彼女の声を聞いた瞬間に、ヴォルデの瞳に強い光が浮かんた。しかし、その光は当惑に再び揺れる。己を凝視する男に構わず、モニカはそのすぐ目の前に降り立った。目線を合わせるために宙に浮いたまま、彼女はヴォルデに両手を差し伸べる。一週間でよくぞここまで瘦けたものだ、と痛ましげに彼女は彼の頬を包み込んだ。

「何があつたの？ ヴォルデ」

モニカは過去の自分を責めていた。弟のことで頭が一杯であつたとはいえ、どうして、何日もヴォルデに会わずにいたのか。自分が側についていれば、決してここまで追い詰めさせはしなかったのに。何がここまで彼を責め呵さいなんたのか。それが何であれ、彼女の大切な相棒をここまで苦しめたのだ。——地獄程度の業火では済まずま

い。

モニカの瞳に物騒な光が宿った。

目を瞬かせたヴォルデは、ゆっくりとモニカに手を伸ばした。何かを確かめるように彼女の黒の瞳を見つめ、長い黒髪を手で梳き、恐る恐るといったふうに口を開いた。

「モ、ニカ、なのか？」

うん、そうだよ、とモニカが頷いた瞬間、彼女の顔はヴォルデの胸に押しつけられた。

後頭部と背を圧迫され、モニカは一瞬息を詰まらせた。視界を遮られ、彼女は反射的に逃げだそうとする。だが、後ろ頭に添えられたヴォルデの手が細かく震えているのに気づき、彼女は抵抗するのを止めた。溜息をつき、纏っていた風を解く。浮力を失ったところで、ヴォルデが自分を落とすはずがないという確信があった。彼女の予想通り、ヴォルデはモニカが地面に落ちないように彼女を抱き上げてくれる。彼の腕に座る形となった彼女だったが、その顔はヴォルデの手によって彼の肩に押し当てられていた。そして、ヴォルデの腕の震えは、そのままだった。モニカは、ヴォルデの背を宥めるように優しく叩く。つい先ほど弟にしたように。

「大丈夫だよ。ヴォルデ。私はここにいますよ」

しばらく一定のリズムでゆっくりと叩いていると、次第にヴォルデの震えは収まり、頭を抑える手の力も緩んできた。顔を上げようとしたモニカに、しかし、彼は低く唸るような声で命じる。

「顔を上げるな」

どうして、という疑問は、首筋に感じた髪の毛の感触のくすぐったさに気をとられて消えた。モニカを抱きしめたまま、ヴォルデは地面に胡座をかいて座り込む。その上に乗る形となった彼女は、自分の肩に顔を埋めた男に、小首を傾げた。長い黒髪がさらさらと男にかかる。その髪を払った彼女は、ゆっくりと彼の頭を撫でた。

「どうしたというの？　ヴォルデ。何が貴方をそんなに不安にさせているの？」

まだ幼かった弟に尋ねた時のように、優しく歌うようにモニカは囁く。少しの躊躇の後、こもった声でヴォルデは小さく呟いた。

「モニカが……」

私が？　と続きを促す彼女に、ヴォルデは小さな声で早口に言い切った。

「お前が光輝殿について異世界に行ってしまうと思ったんだ」

モニカは驚きに魔力をほとばしらせそうになる。だが、そのようなことをすれば、魔力探知に優れた御父様が来てしまう。何故かは分らないが、御父様にこの体勢を見られたら不味いと本能が警鐘を鳴らしている。彼女は必死に己の魔力を押さえ込んだ。

取り零した魔力で長い黒髪がフワリと宙に浮かぶ。モニカは、ここ最近の自分とヴォルデの会話を必死に思い出す。彼女は、コーキについて行くつもりはなく、両親や弟妹達に尋ねられても否定してきた。だが、そういえば、ヴォルデに対してコーキの住む異世界に行く気はないとはっきりと否定したことはなかった。

（むしろ、まだ迷っていた時に尋ねられたから、かなり曖昧な態度しか返してなかったような）

特に、一週間前の夜のやりとりは、もしかしたら見ようによって

は、コーキについて行くと誤解されてもおかしくないやりとりだったのでは……？

そして、ヴォルデが見事に誤解した結果が、この憔悴した姿なのだとしたら――。

がくり、と脱力したモニカは、ちょうど良く目の前にあるヴォルデの肩に顔を埋めた。彼女の肩に乗っていた重みが消え、今度はヴォルデが顔を上げた気配がした。しかし、モニカはそのまま顔を隠し続けた。

「ごめん。私はコーキの住む異世界には行かないって、ヴォルデに言うのを忘れてた。……盟友をこんなに心配させるだなんて、相棒失格、だね。私なんて御母様の業火に焼かれて灰になってしまえばいいのに」

そのまま他人の肩で落ち込み続けるモニカの頭を、ヴォルデは不器用に撫で始めた。

「いや、お前が灰になったら俺が困るからやめてくれ。……本当に良いのか？ お前は、あのコーキという男のことが好きなのではなかったのか？」

好きだよー、と返したモニカに、彼女の頭を撫でるヴォルデの手が止まった。だが、続けて彼女が、でも、御母様も御父様も好きだからねー、と言うと、再び動き出した。モニカは、あれ、と思った。なんだか、ヴォルデの胸が、先ほどよりも早鐘を打っていないだろうか。彼の胸に手をあてる彼女に、彼は言う。

「では、俺は？」

んー、やっぱりちょっと早いなあ、と彼の鼓動を確かめながら、モニカは返事を返した。

「好きだよー。ヴォルデモリーナス達も、銀狼騎士団の人達も、みんな大好きだよー」

脈が速いのは、一時的に興奮状態にあるせいかな。でも、随分瘦せてしまったようだし、やっぱりちよつと休ませよう、とモニカは顔を上げるタイミングを計りながら考えていた。だが、天然魔獣に振り回されたことによる過労と、少し期待していた分、他と同列に扱われたことへの大きな落胆で、ヴォルデは非常に脱力してしまっていた。彼が癒しの源であるモニカを自由にするには、未だ暫くの時間が必要であつた。

視界を遮られることは獣にとって命に関わる。抱き込まれるのを許すほど、命を彼に預けてもいいと思うほど、己が彼に心を許しているということを天然魔獣が自覚するには、さらに長い時間が必要であつた。

そんな二人を塔の上から眺める蒼の瞳が四対あつた。実は彼ら、ずっと野次馬していたのだ。

「まあ、大胆ね」

エルティナは、眼下の二人に当てられて熱くなった頬に長い尾で風を送る。

「向こうの茂みから、人間どもがのぞいているぞ。あれは……・銀狼騎士団のやつらだな」

バルトロは、蒼の瞳を輝かせて面白そうに人間達を観察していた。「御父様が見たら泣くかな、それとも、王都ごと無かったことにするかな」

普段は大人しいアルクインが、珍しく牙を剥きだして獰猛な笑み

を浮かべる。

一頭だけ黙り込んでいたリーナスが、ぽつりと呟いた。

「……燃やしていい？」

え、と振り返った三頭が見たのは、頭上に特大の火の玉を浮かばせ、無表情に地上を見下ろすリーナスだった。なんだか、モニカ姉とヴォルデ団長がくつついているのを見ると、胸のずうつと奥からぐつぐつしたのが湧いてくるの。燃やしちゃって良い？ と可愛らしく小首を傾げるリーナスを慌てて止めた三頭だった。

【27】パレヴィダ神殿と愉快な神官達

「ちょ、長女様が来襲したぞー！」

ガンガンと鳴らされる神殿の鐘を見上げ、え、警報？ 私って火事とか大災害と同じ扱いなの？ とモニカは耳を伏せる。鋭敏な獣の聴覚に、青銅の挙げる悲鳴が酷く響いた。

「パレヴィダ神殿の査察ですか？」

黒の瞳を丸くしたモニカに、御父様は厳かに頷いた。

「ああ。違法召喚の件を改めて調査することになってね。魔獣の代表として、モニカ、君に行ってもらいたいんだ」

蒼の瞳を優しく細めて、御父様は誇らしげに鳴く。

「まだ人間の齢で6才ではあるが、天狼は人間よりも精神的な成長が早い。そろそろ、成獣として扱うべき年齢だ。少しずつ、魔獣の王族としての仕事を覚えていこうか」

その手始めとして、神殿に査察に行つて欲しいんだ。心配することはないよ。今回は、人間側の代表として銀狼騎士団の団長が行くのに付いていくだけでいいからね。彼がどんなふうに仕事をするのかを見ておいで。人間が、どのように社会を作り、動かし、守っているのか。それを知ることが、きっと、これからモニカが王族として人間と付き合っていく上で、君の財産となる。

ゆっくりと尾を振つた御父様は、モニカに顔を近づけ、お願いできるかな、と彼女に頬ずりをした。耳をピツと立てたモニカは、「

はいっ。任せて下さい、御父様」と、元気よく返事をして大門前で待っているというヴォルデの元へと向かった。

去り際に、お土産は一角獣にしますねー、と元気よく鳴いていったモニカに、御父様は尾をぶわあっと膨らませる。彼は、一抹の不安と共に神殿のある方角を眺めた。彼らは練習台だからね、多少の失敗は揉み消せるだろう、と己を落ち着かせるように尾を舐め、次のバルトロに仕事をお願いする準備を始めた。

「それでは、今回は、一角獣様を狩るためでも、副神官長のお八つを盗むためでも、教皇の背中にこっそりと肉球スタンプをつけるためでもなく、査察にいらしたということでもよろしいでしょうか」

パレヴィダ神殿の外交官だという神官に尋ねられ、モニカは頷いた。

神官は、明らかにほっとしたように胸を撫で下ろし、何かの合図を背後に控える神官に送った。

しばらくして、神殿の奥の方から大人数の人間が騒ぐ声と物音がした。

神殿の最奥から、囁れた老人おきなの声がした。

「一角獣様を奥庭にお戻ししろ。今回は襲撃ではないらしい」
応える声は、まだ若い。

「駄目です。腰が抜けたらしく立ち上がっていただけません」

困り果てた声に対する返答は、微かに笑いを含んでいた。

「目の前に好物のキリキリ草をぶら下げてみる。あっさりと立ち上がって下さるはずだ」

張りのある男性の声が、西の方からした。

「副神官長様のお八つはどうする？ バターと砂糖がたっぷりと使われた品らしく、ア리가集りたかそうなのだが」

神経質そうな声が、それに応える。

「この機会に減量してもらうことにしよう。おい、その新入り。御子様に囁られたことにして、厨房にダイエット用の麦菓子を作らせろ」

はいっ、と幼子の声が元気のいい返事をした後に尋ねた。

「この御菓子はどうすればよいのでしょうか」

神経質そうな声の主が、少し声音を柔らげて応えた。

「俺達で喰うに決まっているだろう。東の食料庫に隠しておけ。…一枚は駄賃だ。好きにしる。厨房にバターと砂糖の付いた手で行くなよ。よく洗ってから行け」

さつきよりも大きな声で、幼子の声が、はいっ、ありがとうございます、と返事をして、小さな足音を立てて東の方角へと駆けて行った。

張りのある男性の声が、微笑ましそうに言う。

「甘いな」

神経質そうな声が、そっけなく応える。

「ああ、激甘だ。あんなものばかりを食べているから太るんだ、あの方は」

くくく、という、くぐもった笑い声と、何かを叩く音がした。

くぐもった中年の祈りが、南の方から聞こえた。

「おお、神よ。女神ローネルシア様よ。何故、我々にこのような試練を与えるのです」

柔らかい青年の声が、祈りの声に重なる。

「教皇様。王宮からの査察官がいらっしゃいました。銀の女王の御子様も、今回は査察官としていらっしゃっただけで御座います。そ

のように、怯えられることは……」

祈りの声は途切れることなく続いていた。

「どうか、神よ。我らをお助け下さい。ああ、神殿から出たくない。外は魔物の巣窟と化しているに違いない」

しばらく祈りの声のみが聞こえた後に、溜息と共に扉の閉まる音がする。

足音を意識して追うと、少し離れた部屋の扉を開ける音がした。

書類を捲る音共に不機嫌そうな声が尋ねる。

「どうだった」

「駄目ですね。完全に御自分の世界に引き籠もっていらつしやる。……困ったなあ」

ふん、と鼻を鳴らす音と共に、何かがどさどさと積み上げられる音がした。

「全く困ってない顔で、よく言う。あの男は最初から当てにしない。むしろ、邪魔が入らなくて都合が良い。副神官長は予定通り西の貧困街に視察に行かせたな」

くすくす、という上品な笑い声と共に、大量の書類が持ち上げられる音がした。

「ええ。公爵夫人にお守り^もをお任せしたよ。あの方のお気に入りだからね、副神官長は」

この書類は査察官に持って行けばいいのかな、と青年は尋ねた。さつさと持って行け、と男は応えた。

獣の耳は鋭敏であり、聞こうと思えば、千里先の音でも拾うことが出来る。

耳を前後左右に動かして情報収集をしながらモニカは思う。

（一筋縄ではいきそうもない人達ばかりだなあ。……今日の御菓子、美味しそう。お茶請けに出てこないかな）

そんな彼女の耳を眺めながらヴォルデは思う。

（さっきからピクピクと耳を動かしていて、もの凄く気になるのだが。説明役の神官殿も凝視なさっているぞ。集中できていないのが一目瞭然だ。……ポーカーフェイスという意味では、まったく査察に向いていないな、獣態は。どうせだったら、ドレス姿の人態の方が、感情も隠せる上、俺としても嬉しいのだが）

雑音と雑念だらけの神殿で、二人の長い一日が幕を開けた。

【28】ベテラン神官と新米神官見習い

「失礼致します」

柔らかな声と共に、細身の青年が応接室に書類を抱えて入ってきた。先ほど教皇に話しかけていた神官だ、とモニカは伏せの体勢から顔を上げて、固まった。

よく手入れされた金髪は、床に達する程長い。青色の組紐で腰まで一つにまとめられた先が、白い長裾の上に流れるように広がっている。白布の上、床に広がる金色が、太陽の光を弾いて輝いていた。金の睫に彩られた瞳の色は翠色。憂いを帯びた瞳が、艶やかに潤んでいる。透き通るような滑らかな白い肌は、書類を運んだためか頬が赤く色づいていた。

モニカが目にしたのは、名工の作った人形と言われても頷ける、儚げな佳人であったのだ。

（お、女の人！？ え、でも、パレヴィダ教では神官は男の人しかなれないはずだし、やっぱり男の人！？ こんな人いたっけ。会ったことがあるなら、絶対に覚えてははずんだけどな。こんな美人……）

パレヴィダ神官は戒律として髪を切ることができない。血の穢れを嫌うために特定の目的以外に刃物を使うことができないのだ。同じ理由から、月のものがある女性は神官になることができず、その期間は神殿への参拝を禁じられている。

だから、この目前にいる傾国の美女は男性であるはずなのだが、信じられない。魔獣の本能がオスであることを肯定している。

しかし、人間の記憶を持つ理性がそれを否定する。清楚な女性にしか見えない、と。

驚きに尾を膨らませたモニカに、彼はふわりと微笑みかけて腰を折り、パレヴィダ神官式の挨拶をした。

「お初にお目にかかります。私はパレヴィダ神殿が助祭枢機卿、シリルと申します。この度、銀の女王陛下御一家の外交特使の任を拝する栄誉を授かりましてございます。今後ともお見知り置き下さりますれば、恐悦至極に存じます」

美貌の神官は、その声もまた、豎琴を奏でるかのように聞き心地の良いものであった。彼は自己紹介をすると、さつそく持ち込んだ書類について説明し始めた。白魚のような指で報告書を捲る彼に、ヴォルデは時々頷いたり、質問をしたりしている。純白の神官服に身を包んだシリルと漆黒の騎士服を纏ったヴォルデは、一見、清楚な巫女と野性味溢れる男性騎士の恋人達にも見えた。

美女と野獣、という言葉がお似合いの二人を眺めながら、モニカは首を傾げた。

シリルが言うには、彼は、これまで教会の外交官として主に地方神殿を巡礼していたらしい。しかし、つい先日 of 違法召喚事件を受けた人事異動によって、本神殿に配属されたのだという。

道理で見たことがないはずだ、と納得したモニカには反面、一つの疑問があつた。

不祥事による人事異動は、元の世界でもよくあることであつた。だが、その場合に飛ぶのはトップの首であるべきだ。何故、外交官

が入れ替わって、教皇と副神官長がそのままなのだろうか。

その点について尋ねたいモニカであった。しかし、仲良く話し込んでいるらしい二人の間に入るのは躊躇われる。どうしたものか、と尾を垂らした彼女の耳が、扉を叩く音を捉えた。

振り返った彼女が見たのは、大きな台車を必死に押す少年であった。10歳前後だろうか。小柄な身体は、お座りをしたモニカと同じくらいだ。焦げ茶の髪はまだ肩ほどの長さしかなく、彼が歩くのに合わせて左右に揺れていた。弟妹達が幼い頃の短い尻尾を思い出し、モニカはふっと口の端を上げた。大きな焦げ茶の瞳を持つ、頬に散ったそばかすに愛嬌を感じる顔立ちの少年であった。

そのまま机の横まで台車を押してきた少年に、シリルがすつと立ち上がり、モニカとヴォルデに頭を下げる。

「申し訳ございません。この者は神殿に入って1年目の神官見習い、ユーリウスでございます。未だ行儀作法を十分にわきまえておりませんで、大変失礼を致しました。……ユーリウス。銀狼騎士団長様と銀の女王の御息女様にご挨拶をしなさい」

厳しい声のシリルに、慌ててユーリウスと呼ばれた少年は一人と一匹に頭を下げた。

「ごめんな……あつ。も、申し訳ございません。え、えと。初めまして。ユーリウスと申しますっ」

たどたどしく口上を述べる少年に、幼い頃の弟妹達を思い出し、モニカの口角がますます上がる。それを見たユーリウスが、ひえつ、と小さく悲鳴をあげた。

（あ、いけない。無意識に牙が出た。怯えさせてしまったや）

モニカは慌てて牙をしまい、怖くないよー、と長い尾を左右にパタパタ振ってみせた。

それを素直に目で追う少年に、小動物に似た愛らしさを感じて、黒の瞳を細めたモニカであった。

悲鳴をあげたことで再び叱責を受け、ユーリウスは項垂れていた。しかし、その手は慣れた風に茶器を扱い、手際よく茶菓子の用意をしている。聞けば、普段は副神官長の茶係を務めているそうだ。

（この子って、さっき聞いた、副神官長のお八つをお駄賃として貰った子だよね。じゃあ、もしかしてお菓子は、バターと砂糖がたっぷりだっというお菓子かな）

モニカは、期待に黒の瞳を輝やかせた。

彼女の視線を一身に浴びたユーリウス少年が、少し震える手で菓子皿を覆っていた銀蓋を開ける。白磁に藍色の唐草模様が入った皿に乗っていたのは、砂糖と牛乳をたっぷり使った……南瓜プリンかぼちゃであった。

円柱の黄金色のプリンに、焦げ茶色のキャラメルソースがかけられている。漂う甘い香りに含まれる南瓜の優しい甘みを、モニカは獣の鋭敏な嗅覚でしっかりと拾い上げていた。端には白い生クリームが添えられ、何とも美味しそうな一品である。

「銀の女王の御息女様のためにと料理長が腕を振るった南瓜プリンでございます」

恭しく説明するユーリウスに、モニカは嬉しそうに耳をぴんと立て、黒い鼻をひくひくと動かした。

早くー、と前足をあげてお強請ねだりをしながら、彼女は考える。

（これ、さつき盗み聞きした副神官長のお八つとは別の品だ。焼き菓子っぱかったし。……あとで、こっそり、つまみ食いに行ってみようかな）

銀の女王の御息女様の意識は、南瓜プリン一直線であった。

モニカに急かされたユーリウスはプルプルと震えていた。

（お腹がすいていらつしやるのかな。ぼ、僕、食べられないよね、人間は食べないんだよね。ううう。怖がっちゃダメだ！ 白百合の君みたいに、神官として、き、毅然とした態度で。……む、むりい）

新米神官見習いは、白百合の君に救いを求める目線を送った。

涙目のユーリウスを見ながら、シリルは心の中でガッツポーズを決めた。

（よし、狙い通りですね。ユーリウスもお気に召されたようですし。さすが、愛らしき子犬の君。二つ名に恥じない、小動物っぷりですね。そのまま、プリンと一緒に御息女様の気を引いて下さいよ） 白百合の君（ベテラン神官）は、私が見守っていますよ、もう少し頑張ってみなさい（そのぐらい一人でどうにかしろ）、という暖かな視線を子犬の君に返した。

一人真面目に報告書を読むヴォルデは思った。

（部下に聞いたことがあるな。ダントツの可愛さの『子犬の君』に、見るだけで昇天しそうな『魔性の聖人』。……ここは、本当に神殿なのだろうか）

パレヴィイダ教は、三大宗教の一つに数えられている。有名な話だが、その信者のほとんどは、女神ローネルシアの信仰者というよりも、ただの神官のファンであった。後にそのことを知った某現代日本出身魔獣は思った。いつそのこと、タレント事務所にでもなれば

いにしへと。

【29】柴犬のくるん尻尾と愛らしい瞳が大好きです。

「砂糖とミルクはどうないますか」

紅茶の用意をしながらユーリウスが尋ねた。

「砂糖もミルクもたっぷりお願いします」

期待にわっさわっさと尾を振り、彼女は応えた。

パレヴィダ神殿の副神官長は『子豚の道化師』という異名をとっている。

彼の道楽は食べることであり、その結果が丸まると肥え太った『子豚ちゃん体形』であった。だが、彼が肥えているのは身体だけではない。その舌も、王国随一の食通として知られていた。

脳みそまで脂肪、と噂される彼が育てた茶係だ。さぞかし美味しい紅茶と菓子を出してくれることだろう。待ちきれないモニカは、前足で宙を掻き、はやくーとお強請^{ねだ}りをした。

ユーリウスが背筋を震わせるのに、怖がられているなあ、とモニカはぱたり、と尻尾を絨毯に落とした。

パレヴィダ神官が自分を恐れるのは、仕方のないことだと分かりながらも、内心複雑な思いを彼女は抱いていた。

モニカは、パレヴィダ神殿を度々襲撃している魔王一家の長女である。

普段は魔王一家のストッパー役であっても、彼女もまた魔獣であ

る。怒った時には容赦なく神殿を攻撃するし、腹が減れば一角獣を狩る。

神殿が黒の勇者を召喚した時には、彼を元の世界に還せない場合はパレヴィダ神官を一人残らず灰にすると宣言した。だが、業火で神木の一本を火達磨にして見せたのは、流石にやりすぎだったか。

彼らに『黒の小魔王』と恐れられていることをモニカは知っていた。

そんな彼女の催促だ。

機嫌を損ねないように必死らしいユーリウスに、モニカは眉間に皺を寄せる。

（確かにネズミみたいに真ん丸くてふわふわで思わず爪が出そうだけど、私達魔獣は人間を狩ったりはしないんだけどな）

彼女の瞳に、ユーリウスは完全に小動物として映っていた。

「どうぞ、御息女様。お召し上がり下さい」

相変わらずプルプルと震えたユーリウスが、モニカの前の床に皿を置き、銀のスプーンを添えた。横には皿と同じ柄の深皿に入れられた紅茶も用意されている。

犬の口を配慮した形で出されたようだ。

黒の鼻面をふんふんと鳴らし、一舐めした彼女は黒の瞳を細めた。ほどよい温度に、香ばしい香りの、優しい味をしたミルクティーだ。

さて、南瓜プリンも、と顔を上げたモニカは、ふと小首を傾げて前足を持ち上げた。黒い艶々の長毛に覆われた肉球が見える。今の

モニカは、応接室に入るために魔力を押さえ、大型犬の姿になっている。端から見れば、黒犬が小首を傾げて、己の黒い肉球をじいっと眺めているように見えることだろう。

（スプーンを、この肉球でどうやって使えと……）

魔力を使えば中空に浮かばせられなくもない。だが、少々疲れる。その上、魔力操作に気を取られて南瓜プリンの味を楽しめないことは必須だ。

むう、とモニカは唸った。

ひいい、とユーリウスが悲鳴をあげた。

どうしたものか、と己の肉球を見つめたまま、耳を垂らしたモニカは、ふと、己を凝視するユーリウスに気づいた。ふるふると震え、涙目になっている。よほど、魔獣である己が恐ろしいらしい。

少年神官見習いのあまりの小動物っぷりに、ふと、モニカの中に悪戯心が生まれた。モニカは、いいことを思い付いた、と顔を上げ、涙目のユーリウスを上目遣いに見つめる。黒の魔獣は、小首を傾げて少年に向かい右前足を上げてみせた。

「スプーンが持てないから、食べさせて」

え、と固まるユーリウスに、モニカは、ぐわり、と奥まで歯を覗かせてみせる。鋭い牙がぎりりと白く光った。

彼女の期待通り、ふわぁっと再び悲鳴をあげてユーリウスは後退った。

「む、無理ですうつ」

ぶんぶんと顔を左右に振る少年。一つに括られた短い茶髪が、尾のように激しく揺れた。

（し、柴^{しば}ー。この子、柴犬の子犬みたいっ）

「ぶ、ぶあっはっはっ」

お母様そっくりと評判の笑い声をあげれば、「どうぞ余りおかにかいになれませんよう」と、シリルに苦笑された。

豪快に笑う黒の獣に、潤んだ焦げ茶の瞳がまん丸に見開かれていた。

結局、モニカはスプーンの代わりに己の舌を使って食べた。シナモンが効いたプリンは絶妙な柔らかさと甘みであった。彼女は満足げに黒の瞳を細める。

彼女が、ペろり、とピンクの舌と前足で口周りを整える様子を、皿を片付けながらユーリウスが見ていた。

彼が皿を台車に乗せたのを確認して、モニカは少年にゆっくりと近づく。びくりと肩を揺らした少年に、モニカは困ったようにヒゲを垂らした。

「そんなに怖がらなくても、私達魔獣は、人間を食べたりしないよ」

美味しい南瓜プリンと紅茶をありがとう、とユーリウスの胸に頬を擦りつけると、少年は焦げ茶の目をまん丸にして、わたわたと恐縮した風に両手を振った。

「も、もつたいない、お言葉でございます」

褒められ、嬉しそうに頬を染める様はさながら…… 全力で短い尻尾を振る子犬のようであった。犬種は柴で決定だ。なんとも愛くるしい小動物に、元日本人のモニカはフルフルと尾を震わせる。飛びかかりそうになる己を必死に自制した彼女であった。

【30】ダイナミック教育法と教育パパン魔獣バージョン

感謝の念を込めて、モニカはユーリウスの頬を一舐めした。
うひゃあ、とくすぐったそうに笑った少年に、モニカはふふつと微笑む。

失礼しましたっ、と元気に退出の挨拶をした彼に、モニカは尾をゆったりと左右に振った。

ゆつくりと振り返ったモニカは、熱心に話し合っている銀狼騎士団長ヴォルデと神官シリルを視界に収め、牙を剥きだしてひっそりと笑った。

（さて、お仕事の時間だー）

二人は気づいていなかった。

彼女の黒い瞳に物騒な光が灯ったことに。

「ヴォルデ、私にもその書類を見せて」

御父様は、今回はヴォルデの仕事の仕方を見ていれば良いと言っていた。しかし、モニカは、眺めるだけで済ますつもりはなかった。異世界召還は、人間が思うほど簡単なものではない。召還対象が死ぬことはざらであり、この世界に掛る負荷は甚大だ。一つ間違えば、この世界が滅んでいたかもしれない。しかも、パレヴィイダ神殿は、よりにもよって彼女の宝物——コーキを異世界召還という危険にさらしたのだ。

（この人達、絶対にコーキを隷属させようとしていたよね）

モニカが小坂光輝を神殿から救い出す際に、神官達は盛んに『コサカコウキ』と彼の名を叫んでいた。何故フルネームなのかを疑問に感じた彼女は、弟に気付かれぬよう、こっそりと御父様に相談した。

そして、『服従の腕輪』の存在を知ったのだ。

服従の腕輪とは、その名の通り、相手の真名を呼ぶことで使人者への隷属を強いる魔術具だ。パレヴィダ神殿の生臭坊主どもは、そんなものを、こともあるうに彼女の大切な宝物に使おうとしたのだ。

召喚魔方陣に服従の術式を見つけ、モニカは激怒した。

一瞬、パレヴィダ神殿を灰にかえてしまおうかな、とも考えた。

そんな彼女が、ここまで大人しくしていたのは、コーキのためだ。ここで暴れて、弟の返還の儀に支障が出ると困る。そう考えた彼女は、じっと耐えてきた。さながら獲物を狙う肉食獣のように。パレヴィダ神殿に牙をつきたてる、その時を。

「ああ、構わないが……書類が読めるのか？ その肉球で」

深紅の絨毯を踏みしめているモニカの前足に目線をやって、ヴオルデは尋ねた。

「御父様が、本を読むときのために作ってくださった術式があるんだ」

魔獣が人間の中で生きていると、どうしても細かい作業が必要になる。そういう時に魔術を使えば、最小限の魔術で最大限の効果を得ることができる。

魔力で解決することも可能だが、力加減が難しく、魔力を無駄に消費しがちだ。

例えば、

魔力でお湯を沸かそうとしたエルティナは、東の離宮をまる焼けにしかけ、

——御父様が慌てて魔力で水を呼びだし、消火して、

魔力で薬草を摘もうとしたアルクインは、庭師が丹精を込めて作り上げた庭を大地ごと宙に浮かせ、

——面白がったバルトロが、庭を復元する前に作った落とし穴に御父様がはまり、

魔力で高い位置にある皿を取ろうとしたリーナスは、由緒ある白磁の皿を空の彼方に旅立たせ、

——一枚、二枚、三枚……一枚足りない……と恨めしげに呟く離宮官吏を見た御父様が悪夢に魘される、

といった風に、御父様と離宮官吏達は完全に愛し子達とその魔力に振りまわされていた。

ちなみに、御母様は、「全てのものは、いつかは無に帰す。それが、今か千年後かそれより先か、それだけのことだ」と、牙を剥きだして微笑むだけだった。

耳とヒゲをへたらせた御父様は、幼魔獣達に人間と暮らしていく上で必要となる魔術を必死に教えた。幸いなことに幼魔獣達は皆、彼の魔術の才を受け継いでいた。術式を構築して魔力を流す方法をすぐに覚え、中には自ら新しい魔術を編み出すものまでいた。

満足そうに尾を振る御父様は気づいていなかった。

遊びたい盛りの幼魔獣達に『魔術』なる新しい玩具を与えればどうなるか、に。

魔術は魔力が小さい人間が強大な魔獣に対抗すべく編み出した術式だ。では、強大な魔力を持つ魔獣がそれを意のままに操れば、どれほどの威力になるのか。

その答えを御父様が知るのは、それからしばらく後、魔獣一家が住まう離宮を管理する宮内省長官の声にならない悲鳴を聞いた時だった。

【番外編】 27・5話、27・5・5話

【27・5話】『小さなリーナス』

リーナスは兄弟達の中で一番小さかった。

王宮の柱に家族で印した肉球スタンプを見上げ、彼は、しょぼんと尻尾を垂らす。

成長の証として刻まれた肉球跡は上にいくほど新しい。

赤色は、爪まで刻まれた御母様。

青色は、丁寧に押された御父様。

藍色は、所々、人態化した手の跡もあるモニカお姉ちゃん。

紫色は、所々、尻尾の跡も付けているエルティナ。

緑色は、兄弟の中で一番大きいアルクイン。

橙色は、ちよつと掠れてしまつて雑なバルトロ。

黄色は、兄弟の中で一番小さい、僕。

他の兄弟の肉球スタンプは、上にいくほど大きくなり、両親のものと変わらない大きさになっていく。だが、リーナスの肉球スタンプだけは、まだ他の兄妹の半分ほどしかない。

（どうして、僕は小さいままなの？）

御母様に相談してみた。

「我が愛し子よ。大きななど気にすることはない。見よ。今朝捕つてきた竜だ。私はこれの頭ほどの大きさだが、勝負を挑んでみれば、喰うのは私で、喰われるのはこやつだった。大事なのは、相手を倒す牙を持つか否かなのだ。ほら、お食べ。我が愛し子よ」

——竜の骨は、噛み応えがあつてとっても美味しかったの。

御父様に相談してみた。

「リーナスは、一番魔力に対する容量が大きいからね。身体がまだ魔力に馴染んでいなくて、ゆっくりと育とうとしているんだろう。大丈夫だよ。あと千年ぐらいしたら、きっと一番大きいのはリーナスになるよ」

——御父様の難しい子守歌を聞きながら、お昼寝をしたの。

モニカお姉ちゃんに相談してみた。

「リーナスは小さいままでいいんだよ。だって、そっちの方が可愛いから」

——そ、そうかな。

そうかな、と首を傾げてリーナスは肉球スタンプの柱を見上げる。

小さいから、すぐにお腹一杯になって幸せになれるんだ。

小さいから、もっともつと大きくなれるんだ。

小さいから——モニカお姉ちゃんが可愛いって言ってくれるんだ。

リーナスは、うん、と頷くと一番上にまた一つ肉球スタンプをつけた。

前と変わらず小さな肉球跡に、彼はにっこりと笑って、兄弟達の待つパレヴィダ神殿へと駆けていった。

【27・5・5】『卑小な人間でございます』

人間は所詮小さなことで右往左往する生き物だ。

離宮の柱に銀の女王一家が刻んだ肉球跡を見上げ、彼は、ふみゃん、と眉尻をさげた。

初めて銀の女王御一家が肉球を印される光景を見た時の衝撃は忘れられない。

（北から取り寄せた最高級ビアンコカララの大大理石がー！）

絶叫しそうになった。

だが、宮内省の長官としてのプライドが、それを邪魔した。そして、私は、さらなる衝撃の光景を見ることとなる。

なんと、御子様方で一番小さい御方、リーナス様が後ろ足で立ち上がり、よいしょ、よいしょと上の方に肉球を付けようと、背伸びを始めたのだ。なんと愛らしい……！ そのまま家に持ち帰らなかつた私は偉いと思う。

銀の女王一家が住まう離宮を管理する宮内省には苦勞が絶えない。落雷・爆破・水没は日常茶飯事だ。荘厳な宮殿を何の躊躇いもなく破壊する銀の女王御一家に、今日も長官の声にならない悲鳴が拳がる。

そんな彼が、ちょっと疲れたと思った時に見上げるのが、この柱だった。

見よ、天を目指し印されたリーナス様の肉球を。

なんとお小さく愛らしいことが。

リーナス様の肉球スタンプが見られるのは離宮職員だけ！

「可愛いは正義！」

長官は、明日も頑張ろう、と天に拳を突き上げた。

【番外編】 28・5話、30・5話（前書き）

！

【番外編】 28・5話、30・5話

【28・5話】『かぼちゃ南瓜プリンが出されるまで』

「茶請けの菓子を作れって、今からか？」

パレヴィダ神殿の料理長は唸った。

厨房は、昼食の後片付けを終えて、まさに晚餐に向けた闘いを始めようとしていたところであり、正直言っ て新しい菓子作りに回す余力がなかった。

「む、むりですか……」

おろおろと料理長を見上げるチワワの君…… 違った、子犬の君。今年5歳になる甥っ子を思い出して料理長は頬を緩めた。

「ん。よし、コイツを持っ てけ」

差し出されたのは、晚餐用に作られた南瓜プリンであった。

よく冷えた皿を手に、子犬の君が嬉しそくに目をぱあっと輝かす。
「ありがとうございます！」

弾むような足取りで応接室に向かう子犬の君。料理長は、その後ろ姿に左右に勢いよく振られる尻尾の幻影を見た。

「いいんですか。アレ、今日の副神官長のデザートでしょう？」

ソースをかき混ぜながら尋ねる部下に、料理長は笑って答えた。
「ちょうどいいから、今週から副神官長様にはダイエット週間に入

つていただくことにするか。丸々と太った方が、動きが面白くて愛嬌があると信者の御婦人方に受けていたらしいが、流石に膨らませすぎたからな」

先週なんぞ、銀の女王が起こした風にコロコロと転がったらしいぜ、と苦笑する料理長に、流石は、どんな悲しいことがあってもあの方を見るだけで笑いが止まらなくなるという『子豚の道化師』様ですね、と返した部下だった。

信者にも料理人達にも、ある意味で愛されてはいるが、まったくもって敬われていない副神官長だった。

ちなみに、豪快に転がった副神官長を見た銀の女王は、ぶあつはっは、と高らかに笑い声を上げて、面白いものが見られたから今日は満足だ、と珍しく一角獣を狩ることなく帰って行ったそうだ。

***【30・5話】『御父様の趣味は実用魔術の開発です。』*

「それでね、僕の子がねー」

蒼の瞳が酔いに潤んでいる。銀の毛並みが月光を弾いて白く光っていた。

月夜の天狼ほど、神秘的で美しいものはない、ただし――。

国王は遠い眼をした。

（ただし、自分の妻と仔の自慢をする酒臭い酔っ払いでなければ……）

銀の女王の番がここまで酔っぱらった責任は国王にもあった。仔育ての悩みを愚痴りに来た彼に、明日は忙しいので可及的速やかに穩便にお歸りいただこうと秘蔵の酒の数々を出して来たのは、確かに国王だった。

だが、国王は知らなかったのだ。
まさか、銀の女王の番がここまで強いとは……！

思わぬところで彼の強さを知った国王は、部屋の中に散乱する酒樽と酒瓶を見まわした。このままでは埒が明かない。明日は朝からパレヴィダ神殿の視察をはじめとした執務が目白押しとなっている。このまま貫徹は、きつい。

（よし、一気に潰すぞ）

国王は『最終兵器』をベッドの下から取り出した。

「ところで、北方から取り寄せた『火蜥蜴の銀雫』があるんだが、一杯どうだ」

大の大人でも一杯で酩酊する品だ。

固唾を飲んで見守る国王の前で銀の魔王の番は酒瓶に口を近づけた。

匂いを確かめるのか、と見つめる国王の予想は外れた。

なんと、銀の魔王の番はガラス瓶を口にくわえ、ぐいっと上向いて瓶ごと飲み干したのだ。ごくごくと喉を鳴らす銀の魔王の番に、国王は眼を丸くした。

（なんという勇者……！）

絶句した国王に、瓶を床に置いた古の勇者は美味しい酒の礼を告げ、再び愛妻と幼魔獣達の愚痴の体裁をとった自慢話にもどったのだった。

国王は知らなかった。

銀の魔王の番の趣味は実用魔術の開発であり、その中に、体内の一定以上のアルコール分を分解するものという『夜明けは遠い！徹夜飲み用最終魔術（最終兵器対応ヴァージョン）』があるということ。

国王は覚悟した。

明日のパレヴィダ教皇からの説法の時間は、自分の人生最大の苦行となるであろうことを。

彼の予想通り、銀の魔王の番の話は夜明け鳥が一番鳴きをしてもお続いたのだった。

【31】盗み食いは駄目と言われたので、おねだりしてみた。

不可視の点を宙空に穿^{うが}つ。並び立つ点が線になり、円になり、球となる。

そこに、モニカは己が身のうちから漆黒の魔力を流し込んだ。現れた球状の魔術陣を中心に、室内に風が渦巻き、卓上の書類を吹き上げる。

モニカの頭上で無数の紙が舞い踊る。

そのあまりに強い魔力と風圧に、二人の人間が思わずといったふうに瞳を閉じるのが見えた。

モニカもまた、漆黒の瞳を閉じた。

黒の毛皮とヒゲを風が弄ぶに任せて、彼女は魔術の翼を広げる。

意識を拡散させ、魔術の見えざる手が書類から拾い上げた情報の海を、魔術の翼で泳ぐ。

人であれば発狂したであろう、情報の洪水。

それを飲み干し、モニカは低く唸った。

——見つけた。この記録だ。

目的のものは見つかった。素早く尾を一振りして、情報収集及び探査魔術を霧散させる。それと同時に、物体移動の魔術陣を新たに組み上げ、発動させた。

風が止んだのを感じた二人の人間が再び目を開けた時には、最後一枚が、ひらりと元あった山の一番上に舞い降りるところであっ

た。

舞い上げられた書類は全て元通りとなっていた。

「シリル神官」

モニカは白い牙を剥きだし、漆黒の瞳に金髪くらみの佳人を捉えた。

「異世界召喚事例簡易表の53枚目にある、8年前の春告げ鳥月にあった失敗召喚について少し聞きたいことがあるのだけれど、いいかな」

神官シリルが信じられない、と言いたげに目を見開く。

慌てて書類を捜し出した彼の手が微かに震えているのに、モニカは気づいた。

「た、確かに、その事件について53枚目に記載があります」

ヴォルデが卓上に幾つも築かれた書類の山を見やり、呆れたような声で尋ねた。

「モニカ。今の一瞬でここにある書類全てを読み切ったとでもいうのか」

モニカは両前足を踏ん張り、胸を張って答えた。艶やかな黒毛がふわりと揺れる。

「もちろん。だって、御父様自慢の魔術だもの」

常に机上を書類の山で埋めているヴォルデが、今度俺にも教えてくれないか、と感心した声で求めるのに、モニカはきょとんと眼を丸くした。

「いいけど、狂うよ？」

え、と固まったヴォルデにモニカは小首を傾げた。

「だって、私達天狼と人間とでは魔獣としての器が違うもの。魔力許容量も空間把握力も、なにもかもが。天狼用の魔術を使って無事な人間がいたら、そっちの方が怖いよ」

怖い、と言いながら、ん？ とモニカは顎に尾の先を当て、考えた。

（あれ、そういえば、御父様って元は人間ではなかったっけ？）

暴走しがちな御母様や弟妹達の影に隠れがちだが、実は、常識外れという意味では魔獣一家で最もデタラメな御父様であった。

パレヴィダ神殿の違法異世界召喚は、なんとも呆れたことに、数百年にわたり、何百回と繰り返されていた。あまりの多さに、査察用資料は規模の大きさなどを基準にして主要なもの以外は簡易な記述のみとなっていた。

そして、モニカが指定した召喚は、簡易な記述の召喚事例に分類されている、とシリルは申し訳なさそうに告げた。

「少々お待ち下さい。詳細な資料と担当者を呼んでまいります」
足早にしかし優雅に立ち去った神官に、モニカは黒の瞳を細めた。

シリルの顔色がかすかに変わっていた。

常人であれば分からなかったかも知れない。

だが、モニカは魔獣だ。

魔に生きる獣の瞳は、彼が纏う魔力の揺らぎを確かに捉えていた。
（私が査察に口出したことがそんなに予想外だったのかな）

食べ物と小動物に騙されたりするとか、本気で信じられていたのだろうか。

モニカは、これまでの自分達魔獣一家とパレヴィダ神殿の交流を

思い返してみた。

副神官長をボロ雑巾にする御母様。

一角獣が美味しい肉をよこせと咆哮するバルトロ。

教皇の純白の法衣に肉球スタンプを押すエルティナ。

魔力の風で副神官長を怪我をさせないように優しくそつと転がすアルクイン。

副神官長のお菓子をじいつと見つめるリーナス。

つぶらな瞳でティータイム中の副神官長を見つめるリーナス。

根負けして菓子皿をリーナスの前に置く副神官長。

満足そうに菓子をあむあむと齧るリーナス。

ほどほどにね、と言いつつもあまり止めようとはしない御父様。

——これからは、もう少し平和的な交流を心掛けてみようかな…
…、と少し耳を伏せたモニカだった。

【32】勇者の条件

「お待たせいたしました」

神官シリルが、書類を抱えた神官を伴って再び戻ってきた。初めて見る銀髪の神官はアルフォンスと名乗った。生真面目そうな顔は、整っているが、どこか厳格さを漂わせている。紺色の瞳には、何の感情も浮かんでおらず、どこか冷たい印象を受ける青年だった。

彼は、慣れた様子で手早く卓上に書類を広げると、モニカとヴォルデに一礼した。

違法召喚について説明をはじめた低い声に、モニカは右耳をピクピクと震わせる。どこかで聞いたことのある声だ、と手繰り寄せた記憶の先で、副神官長についてシリルと話していた神官だと彼女は気がついた。

（でも、この声、なんか聞き覚えがあるな……。それに、この人の顔も、どこかで見たことがあるような気が……）

一瞬別のことに気を取られたモニカだったが、尾を左右に振って余計な思考を散らした。

そんなことよりも、今は、違法召喚に関する情報の方が先だった。

「記録によれば、8年前の春告げ鳥月に、異世界召喚が行われています。主導者は当神殿の教皇です。召喚原因は、同日、一角獣が一頭、銀の女王陛下に生け捕りにされ、その抗議に行った先で銀の女王の番様^{つがい}に牛の丸焼きを献上することになったため、とされています。結果は例によって失敗。目視召喚物、魔力反応共になし。以上が、当神殿に残されている主な記録です。召喚触媒、召喚魔術師の人数・氏名・経歴、召喚魔法陣の写し等に関しましては、こちら

の書類にございます」

アルフォンスの示した書類をヴォルデが覗き込む。
全体にさつと目を通し、彼は首を傾げた。

「特に他の違法召喚と違いはないように見えるが……。モニカ、この事件のどのあたりが気になったんだ？」

人間三人の視線を浴びたモニカは、ヴォルデの台詞に、ぞわり、と背筋の黒毛を逆立てた。

……確かに、人間側から見れば、他と変わらぬ失敗召喚にしか見えないのも無理はない。

報告書に記された通り、召喚魔術を発動するも何も現れなかったというのは、嘘ではないのだろう。

——それは、理解できる。だが、これは、この『失敗』召喚は、モニカにとって、他と比べものにならない意味を持っていた。

「そうだね。確かに、人間の目には何も見えなかったと思うよ」

モニカの意味深な台詞に、ヴォルデは改めて書類の召喚結果の項目を睨んだ。

「『人間の目には』？」

モニカは己の黒い前足を見下ろした。

そう、人の目に、見えはしなかっただろう。

「だって、召喚されたのは、魔力を持たない、異世界の人間の魂だったのだから」

それまで黙っていたシリルが冷静な声で尋ねた。

「どうして、そのようなことが分かるのですか。8年前といえば、

まだ御子様はお生まれにもなっていないっしやらなかったではありませんか」

己の返答を待つ翠の瞳に、モニカは牙を剥きだして笑って見せた。それは、己の敵を見定め^{えもの}た、肉食獣の笑みだった。

「それはね」

ゆっくりと彼女が神官二人に近づけば、彼らは本能的に後ずさった。

それにますます牙を剥きだし、モニカは囁くように小さく鳴いた。

「それは、私が、その魂の生まれ変わりだからだよ」

だが、彼女の言葉は神官アルフォンスによってすぐに否定された。「馬鹿な。召喚者の魂が銀の女王の御子に生まれ変わるなど、ありえません」

そう、ありえないはずだったのだ。

召喚者の、『勇者』の魂が、銀の女王の腹に宿るなど。

だが、それは実際にありえ、起こった。

その結果が、モニカ——異世界の魂が宿す色を映した漆黒の毛皮と瞳を持つ天狼だった。

モニカは、卓上に広げられた書類のうち、一枚を黒の瞳で見つめた。

パレヴィダ神殿は、数え切れないほどの違法召喚を繰り返してきた。

だが、何度失敗しようとも、彼らが決して変更しようとはしなかった召喚条件があった。

それは、召喚対象『勇者』の条件だった。

古今東西、どの世界でも、きっと同じであるその条件は——『魔王を倒しうるもの』。

（確かに、『勇者』が『魔王』の仔になるなんて、普通は考えられないよね。私は、魔王——御母様を倒しうる、害しうる存在として、この世界に呼ばれたのだから）

【33】最初の記憶

もし、召喚直前に事故で『小坂晶』が死んでいなければ。

もし、『小坂晶』の魂が、銀の魔王の御仔以外の存在として生まれ変わっていれば。

もし、『くろいの』が、魔獣となった己を受け入れなければ。

もし、コーキとモニカが出会わなければ。

可能性は無限にある。選ばれなかった選択肢を考えても仕方がない。分かっている。分かっているのだ。それでも、起こらなかった未来を考える度に、モニカはゾワリゾワリと黒毛を蠢めかせずにはいられなかった。

彼女は乳飲み仔として目覚めた当初、自分が魔獣として生まれ変わったことを受け入れられなかった。

知らない世界。己の母だと本能が教える、巨大な銀の獣。生まれただけらしい、目も開いていない銀の幼獣達。空腹を訴える腹。己が獣だなどと信じたくない、と乳を吸うことを拒否する心。

真っ黒に塗りつぶされた彼女の心に光を灯したのは、御母様と幼獣達だった。

初めてモニカのことを『くろいの』と呼んだのは御母様だった。乳を飲まず弱る幼獣に彼女は優しい声音でそつと囁いた。

「我が愛し仔よ。世にも稀有なる色を宿しし『くろいの』よ。何を

それほど憂うというのか。何がお前を怯えさせるといふのだ。案ずることはない。お前を恐れさせるものが何であろうとも、この牙で切り裂いてやろう。我が愛し仔のためならば、私は、この命すら惜しくはないのだから。

……『くろいの』。我が愛し仔よ。だから、どうか、生きておくれ」

小さく震える御母様の声に、弱弱しく黒の瞳を開いた獣が見たのは、眩い銀色だった。

既に日が落ち、洞窟に差し込む月光を弾く銀色が、『くろいの』の黒毛を優しく包み込んでいた。

御母様の腹に抱え込まれた『くろいの』はゆるりと顔を上げた。

そして、己を見つめる四対の蒼の瞳に気がついた。

いつの間にか、弟妹達は目が開くようになったらしい。

その小さな蒼の瞳が、彼女を、巨大な銀の獣に包まれた小さな黒毛玉を映していた。

きゅう、と一匹が鳴いた。

それに続いて、他の三匹も次々と鳴き声を上げる。

お母様とはまるで違う、拙つたないくてたどたどしい思念が込められた鳴き声だった。

「『くろ、いの』」

「『く、ろいの』、のむ」

「お、かあ、さまの」

「のむ」

小さな銀の毛玉達が彼らの体を押し付けてぐいぐいと『くろいの』

を御母様の腹に近づけさせる。

まだ四足で歩くことも覚束ない様子だった。

それでも彼らは必死に、柔らかな銀毛と温かな体温でもって小さな黒毛玉を取り囲んだ。

十分に乳を飲んでいないため冷え切った彼らの兄弟を暖めようとするかのように。

『くろいの』は幼獣達に押されて御母様の腹を見た。

そこには仔魔獣にとって命の源泉とも言える乳があった。

どうやら、これを飲め、と言っているらしい。

『くろいの』はゆっくりと頭上を見上げた。

心配げに揺らめく蒼の瞳と目が合った。

初めて見た時には、その迫力に彼女が気絶してしまった巨大な獣。覇気に満ちていた表情は、今、不安に彩られ、蒼の瞳も陰ってしまっているように見えた。

「『くろいの』」

巨大な銀の獣と小さな銀毛玉達が、口々に彼女の名前らしきものを呼ぶ。

色こそ違えど、彼れらと同じ姿をした小さな黒毛玉が揺らめく蒼の瞳に映っていた。

その黒の獣は、酷く飢えた心細げな顔をしていた。

背中と両隣りに弟妹達を張り付けたまま、ぽすん、と『くろいの』は御母様の腹に顔を埋めた。

温かった。

柔らかくもあった。

ふかふかしていた。

寂しさで冷え切った心に、温かい何かが流れ込んでくるかのようであった。

くう、と鳴いたのは、はたして『くろいの』の腹であったのか、喉であったのか。

久々に、激しい空腹感が『くろいの』を襲った。

そこから先は、本能だった。獣の思考が求めるがままに『くろいの』は乳をむさぼり飲んだ。

そんな彼女につられるように、弟妹達もまた乳に吸いついく。

御母様は安堵の溜息をつき、彼らが乳を吸いやすいように態勢を変えてくれた。

顔を上げずとも、彼女が優しく細めた蒼の瞳で彼らを見守ってくれているのが分かった。

小坂晶であった魂が、『くろいの』としてこの世界で生きたいと、生きようと思った、最初の記憶だった。

モニカにとって家族は生きる意味と同義だった。
心に灯った銀色のキラキラとした光達。

その家族を害する存在として、自分はこの世界に喚よばれた。

それを知った衝撃は、筆舌に尽くしがたいものがあった。

地中深く埋めて二度と日の目を見なくさせたい事実だった。

——その、事実を。

モニカは、二人の神官を感情を消した黒の瞳に映して白い牙を鈍く光らせた。

（一生の秘密を、この私に鳴かせたんだよ。しかも、盟友の目の前で。

さあ、覚悟はできているよね、神官サマ？）

【34】ありえないことは往往にして起こりうる。

「馬鹿な。召喚者の魂が銀の女王の御仔に生まれ変わるなどありえません」

思わずといったふうに神官アルフォンスが呟いた。
かすかに眉間に皺を寄せた彼に、モニカは白い牙を剥きだして嗤う。

「ありえたからこそ、ここに私がいるんだよ」

ゆつくりと二人の神官に近づきながら、モニカは歌うように鳴く。
楽しげな調子にも関わらず、そこに込められた思念からは感情が読み取れなかった。

押し殺した激情を覗かせた瞳が神官達を射竦める。

いつしか、室内は黒の魔獣が放つ魔力で満ち、口を開くことすら躊躇わせる威圧を人間たちに与えていた。

「私にはね、異世界の少女の記憶があるの。彼女は貴方達も良く知っている人物の姉だったんだよ。誰だと思う？」

凍りついたように動かない神官二人の前で立ち止まり、モニカは小首を傾げる。

「コサカコウキ」

その名に目を見張る神官達に、モニカは喉を鳴らした。可笑しくて仕方がないというように。

「そう。小坂光輝。貴方達が異世界から呼び出した勇者は私の弟だったんだよ。わらっちゃうよね。前世の弟が今世の母親を倒す勇者だなんて、三文小説にしても下らない」

細められた黒の瞳に神官達が映される。

「もう一度、コーキに逢わせてくれたこと。御母様の仔としてこの世界に出逢わせてくれたこと。その二つだけは貴方達に感謝しているの」

ありがとう、と吠えたモニカの瞳には、しかし、冷たい光が宿っていた。

「でもね」

彼女は魔力を解放して巨大な黒の天狼に戻った。

室内に満ちる濃密な魔力に神官達の背を冷たい汗が伝う。

「やっぱり、御母様とコーキを傷つけようとした貴方達pareヴィダ神官をただでは許せない」

ヴォルデが慌てたようにモニカに向かい一歩踏み出す。だが、彼が声を発するよりも早くモニカは尾を振った。それが合図だった。神官達に語っている間に構築した魔術陣に漆黒の魔力が注ぎ込まれる。

彼女は王都に響かんばかりの大音上で高らかに吠えた。同時に、神官二人の足元に円形の魔術陣が浮かび上がる。黒く染まった陣には彼らには理解できない複雑な文字と文様が描かれていた。だが、彼らがその陣に気づく前にその魔術は発動する。

室内に魔力の渦が吹き荒れた。机に山積みになっていた書類が舞い上がり、耳障りな悲鳴をあげる。モニカが先ほど使った探索魔術より強い風に、人間三人は腕で顔を庇い、姿勢を低くした。だが、モニカだけは瞬くことなく黒の瞳を開いていた。自分が行使した魔術の結果を最後まで見届けていた。

風が吹きやんだのを感じて、人間達がゆっくりと顔の前から腕を外し目を開けた。

室内は惨憺たる有り様であった。

書類が部屋中に散らばり、床を覆っている。

ティーカップは卓上から落ち、絨毯に紅茶色の染みを広げていた。花瓶は倒れ、机の上にできた水溜りに花が浸ってしまっている。

シャンデリアは未だ揺れ続け、蝋燭が全て落ちてしまっていた。

床を覆う大量の書類に紛れ、見つけ出すのに苦労しそうだった。火がついていなかったことだけが幸いと言えた。

室内にさつと目で観察した二人の神官は、あれだけの風が吹いたにしては軽い被害に安堵の表情を浮かべた。だが、己の横にいる神官を目に入れた瞬間に彼らは叫び声をあげた。

「髪が！」

パレヴィダ神官は終生髪を切らない。長く神官でいるほどに伸ばされた髪は女神に捧げる信仰心の現れともいわれている。その髪が肩のあたりでバツサリと切られていた。

おそろおそろというふうに己の髪に触れた彼らはその短さに絶句した。

ヴォルデは室内の惨状も目に入らないという様子で神官二人の短くなった髪を凝視していた。少し震える声で彼は呟いた。

「なんてことを」

そこに込められた非難にモニカは悲しげに尾を垂らし、静かな声で鳴いた。

「髪を切ったのは貴方達だけではないよ。この世界にいる全パレヴ

イダ神官の髪をさっきの魔術で短くしたから」

眉間に皺を寄せたヴォルデがモニカに怒鳴った。

「モニカ！ 何を考えているんだ！ こんなことが許されるはずが……」

続くはずだった言葉は風の魔力で口を塞がれて途切れた。

ヴォルデを強制的に黙らせたモニカは、再び大型犬になると神官二人を見据える。

近づけば怯えたように後退る神官二人にモニカは告げた。

「呪いをかけようか、パレヴィダ神官、貴方達に。私の命をかけた呪いを。もし、これから言う約束を破った時には」

白い牙を鈍く光らせて彼女は唸り声を上げた。

「全てのパレヴィダ神官の首を切る。それが可能なのは、外の騒ぎを聞けば分かるよね？」

沈黙を保つ室内とは裏腹に、外からは悲鳴や怒号、人が駆け回る音などが絶え間なく聞こえてきていた。パレヴィダ神殿全体が大混乱の中にあるようであった。

それだけではなく、モニカの魔獣の耳は王都でも同様の騒動が起きているのを聞きとっていた。国中のパレヴィダ神官のいる地が同じ状況となっているはずだった。

シリルは目を閉じて肩を震わせていた。その細い肩をアルフォンズが宥めるように叩き、掠れた声でモニカに尋ねた。

「何を私達に約束させようというのだ。黒の魔王」

ゆっくりと尾を振りながらモニカは答えた

「二つの約束を。一つは、二度と異世界召喚をしないこと。もう一つは、私が被召喚者であることを誰にも話さないこと」

その言葉を聞いてシリルがかつと眦を決した。

そんなこと、と激情に震える声でシリルが叫んだ。

「言われなくとも二度としないし、誰にも話さなかった！ 異世界召喚なんてバカな真似、俺が助祭枢機卿になったからには絶対にさせないつもりだったんだ。あんたが異世界人だったことなんざ、外交取引にも使えねえことだ。話したらこっちがヤバくなるようなことを、口が軽くてお気楽なバカ共の誰に言うつてんだっ！ そんな下らないことのために俺達の髪を切ったっていうのかよ、この馬鹿魔獣！」

室内の空気が凍った。先ほどとは別の意味で。
アルフォンスとヴォルデが目を丸くして神官シリルを凝視している。

美貌の佳人はなおも叫び続けていた。もはや意味のある内容ではなく、下町訛りの聞くに堪えない罵詈雑言に変わった糾弾を、止められるものは人間にも魔獣にもいなかった。

後にヴォルデは思った。

召喚しなくともパレヴィダ神殿には立派な勇者がいるではないかと。

【35】いつか見た、瞳。

目前の優美な佳人が叫ぶ過激な言葉の数々にモニカはあっけにとられていた。パレヴィダ神殿の外交官だと聞いていたこともあり、腹に一物ある人物だと考えていた。モニカの脅しに対して、逆に脅し返すか、何らかの反論をしてくるだろうと予想していた。だが、彼の口から出た言葉は対外交渉に優れた神官とは思えない暴言だった。これほど直情的な人間であったとは想定外だ。

叫び続けるシリルにどう対応したものかと考えるうちに、ふつふつと腹の奥から湧きあがってくるものがあつた。随分と好き勝手を言ってくれる。

「黙れ、人間。喰らうぞ」

喉の奥から低い唸り声が出た。薄まっていた魔力が再び室内を満たし始める。

煩い人間を黙らせるつもりだった。だが、シリルはここでもモニカの予想を裏切った。

胸に手を当てた彼は、真っ直ぐモニカを睨みつけて叫んだのだ。叫びすぎて掠れた声で。

「ああ、喰えよ！ どのみち近いうちに死ぬんだ、好きにしる。俺に直接牙をつきたてるのがあんただろうが俺自身だろうが馬鹿貴族だろうが、俺を殺すのはあんただ。俺が必死に守ってきたアホ共を殺すのは、アンタだっ」

ガラガラと暗い光を宿した瞳がモニカを射竦める。

人間程度の威嚇に怯えるモニカではなかった。しかし、その物騒な言葉に彼女は黒の瞳を細めた。

「……死ぬ？」

訝しげな声にシリルがいらだたしげに答えた。

「ああ、そうさ。パレヴィダの贄たる証、生涯切ることの許されぬ髪を切ったんだ。出家の際に誓った通り、俺達はこれから一週間以内に死ぬ。そうじゃなけりや、ここに入った原因に殺される」

そこまで言ってシリルは言葉を途切らせた。

翠色の瞳に、尾を限界まで膨らませ、背筋を逆立てたモニカが映っていた。

まさか、と小さな声で彼は呟いた。

「まさか、知らなかったとは言わねえよな、パレヴィダ神官の掟を」

震えた声に答える時間も惜しかった。モニカは急いでヴォルデにかけた魔力の拘束を解く。説明を求める黒の魔獣に彼女の盟友は深いため息をついた。

彼はまず、シリルに向かって首を振って見せた。

「彼女は知らない。魔獣は精神的成熟が早いとはいえ、まだ七歳なんだ。パレヴィダの掟などという人間社会の暗部を、一部とはいえ知らせるにはまだ幼すぎる。銀の魔王陛下とその番殿とも相談の上、十歳頃から少しずつ教えるつもりだった。……モニカ」

彼はシリルの横に片膝をついてモニカと視線を合わせた。

幼い子供に言い聞かせるようにゆっくりとした調子で淡々と彼は語る。

「パレヴィダ神官は一部の人間から『生きる屍』『白亜の囚人』と呼ばれる」

揺れる黒い瞳を、後悔の色に染まった黒の瞳が見つめる。

もっと早く教えていれば、そう彼が思っていることが声に含まれ

た思念から痛いほどに伝わってきた。

「パレヴィダ神官という身分は、本来ならば殺されるはずだった人間を社会的に一度死んだことにして命だけは助けるものだ。生前の名も地位も財産も家族も友人も、何もかもを捨てて彼らは神官になる。理由は様々だ。正妻に殺されかけた妾の子、承継権争いに担ぎ出されるのを厭った王族、一族郎党死刑になるはずだったがあまりに幼いと許された子」

母性の象徴たる女神ローネルシアの名の下に、彼らは生命を国家から保証される。

ただし、とヴォルデが言ったところで、シリルが暗い声で続けた。「ただし、パレヴィダの掟を守ることが条件に、な。一、元の名を捨て、神官名を授かること。一、王命には絶対服従であること。…

…一、国家への忠誠の誓いとして、生涯髪を切らないこと」

シリルの声には悲痛な嘆きが含まれていた。

彼の揺れる翠色の瞳に、モニカは見覚えがあった。

それは、いつか、暗い洞窟の中で見た覚えのある瞳だった。

（ああ、これは。この目は――）

「掟を破れば、国家反逆罪で俺達は殺される。あんたに首を切られる前に、髪を切られた時点で俺達の命は風前の灯つてわけだ。分かったかよ、御仔サマ。今さら分かったところで、全部遅い」

そのまま顔を覆ったシリルの肩を、今度こそ慰めるようにアルフオンスが叩いた。

室内を覆う沈黙を破ったのは、黒の魔王だった。
「分かった」

ぼつりと呟いた獣に、潤んだ翠の瞳が向けられる。
「だから、分かったところで遅いって言ってるだろうがっ」

頬を伝う銀滴は、零れ落ちる前に舐めとられた。

瞬く翠の瞳。そこに映された黒の魔獣が、大きく口を開けた。
胸を反らし、白亜の天井のそのまた遥か彼方天上を睨み上げ、獣は再び咆哮する。

室内を再び襲った暴風に人間三人は声なき悲鳴を上げる。ふいをつかれた神官二人は衝撃に床に膝をついた。彼らは気づかなかったかもしれないが、体勢を崩した彼らを、そっと包む風があった。

魔力に振り回される空気の悲鳴が止み、身体を襲う風力が消えたのを感じて人間達は目を開けた。

応接室は先程以上に酷い有様だった。

「予算おりっかな、コレ。壁の塗装も剥がれてっし、完全に改装決定だろ」

もはや素を隠す気力もない様子でシリルが言う。

それに応えるアルフォンスの声もげっそりとしていた。

「必要ないだろう。一週間後には、この神殿の住人は誰も生きてはいまい」

そっか、と呟きシリルは頭を掻いた。

「うっわ。ばさばさだ。髪がなげえとこっという時不便、だよ、な…」

そこまで言っつて、彼は慌てた様に己の髪を掴んだ。

先程はなかったはずの長髪が彼の目の前にずっしりとした重みを伴って現れる。

しばし呆然とした後、彼は黒の魔王——モニカに目をやった。

気まずげに目をそらした後、モニカはシリルの鼻に己の黒い鼻頭を合わせて、小さく鳴いた。

「ごめんなさい。やり過ぎました」

え、と目を丸くしたシリルに耳を伏せたモニカは言った。

「神官の髪は全部元の長さに戻したよ」

「ほ、本当にか？ 全員？ 一人残らず？」

震える声で、シリルは尋ねた。

それにモニカは力強く頷き、答えた。

「確かに、全員戻したよ。ただ……」

続くはずだった言葉は、きゅうつという鳴き声にとってかわられた。

勢いよくモニカに抱きついたシリルは、彼女の首筋に顔を埋めたまま震えていた。

毛筋を濡らす水滴を感じたモニカは、神官を長い尾で優しく覆った。

小さな声が胸元からモニカのうちに響く。

「ありがとう」

「よかった」

「これで、あの子達は。少なくとも、あの子達だけは救われる」

何度も、何度も。

（似ている、と思った）

（あの時に見た御母様に）

（己の愛し仔を、私を失うかもしれないと揺れていた、蒼の瞳に）

【35】いつか見た、瞳。（後書き）

11/23に投稿予定だったものを前倒し投稿しました。

【36】シリルとパレヴィダ神殿（1）

己が馬鹿だということは、シリル自身が一番よく知っていた。

自分が短気で短絡的な大馬鹿野郎だという自覚があった。

それでも、

こんな自分でも、

何かの役に立てるんじゃないかと思つて、

あのお人好し達を守りたいと願つて、

使えるものは何でも使つて、彼はここまでできた。

守りたいと願つたものがあつた。

笑つていて欲しいと祈る存在がいた。

胸の奥、己の何を犠牲にしてもよいと思える、失いたくない温もりがあつた。

好色家の辺境伯爵が洗濯女に産ませたのは、妖精のような子供だつた。

何かに使えるかもしれぬと伯爵が手元に留めるほどだ。

それは美しい赤子だつた。

しかし、伯爵の目論見は幼子が育つにつれて潰えた。

子供は、容姿こそ優れていたが中身があまりにも——『愚か』であつた。

伯爵は己の駒として幼子に教育と施そうと試みた。
しばしば鞭すら加えた。

しかし、幼子は相も変わらず『愚か』であつた。

利用価値を失い、伯爵が興味を無くした幼子に正妻は囁いた。

「汚らしい子供め。ここはお前のような下賤な者のいてよい場所ではない。出て行きたければ、いつでも出ていきなさい」

幼子が大人の庇護なしに生きていけないと知っていて、彼女は辛辣な言葉を連ねた。

どうせ出て行けはしないだろう、と。

子供は無垢に輝く翠色の瞳に、歪んだ奥方の笑顔を映して思った。
（言っていることが難しすぎてほとんど分かんないよう。……ん、このおばさん、誰だっけ）

幼子のきょとした表情に、徐々に奥方の声は小さくなっていた。

心境としては、飼い犬に八つ当たりで怒鳴り散らして、私なにやっているんだろう、と空しくなった時に似ていた。しかも、犬の方がまじだった。犬は時として人語を解し、人の心情を察する。だが、この子供は絶対に彼女が言っていることの大半を理解していなかった。

幼子は終始微笑んでいた。緊迫した空気を読まずに、何を言っているのか分からないけどとりあえず笑つとけ、と考えていることが丸わかりであった。

自分が罵られているのだと理解させようと奥方は子供でも分かる言葉を使おうとした。そして、「だからでちゅねー」と赤ちゃん言葉を使っていることに気付いた彼女は遂に口を閉ざした。息子にも使ったことが無かったのに、不覚。貴婦人な奥方は頂垂れた。

疲れた様子で去る彼女を見送り、子供は小鳥が囀るさえずような声で囁いた。

「はい」

誰も聞く者のいない返答だった。

（女の人が出てつてもいいって、いったた）

（『ハクシャクさま』は、ボクにしゃべるなっていう）

（ボクは、バカだから）

（外でなら、好きな言葉を、好きな時に、好きな様に、話してもいいんだよね）

（きつと）

彼は自分しか知らない城壁の小さな穴、そう、幼子一人がやっと通れる穴をくぐって、外に出た。

——その後、子供がこの城に戻ることはなかった。

「これはまた、汚らしい子供だ。とても伯爵家の血筋とは思えぬな」

10歳ぐらいの時のことだった。

（当時の自分は己の年齢を知らなかった。後に母親と伯爵家等に対する調査から逆算した年齢として、たぶん10ぐらいだろうということらしい）

川での沐浴すらここ数年していなかった体からは、すえた臭いがしていたはずだ。

（自分では鼻が慣れてしまっていて分からなかった）

身に纏っていたのは、拾ってから一度も洗ったことのない、服と呼ぶのもおこがましい襤褸切れだった。

（金の髪はくすみ、翠の瞳は濁り曇って虚ろだった、とても今の前から想像できんな、とかの神官は後に目を細めて笑った）

手足は当然、泥まみれの埃まみれ。虫にたかれ、頬と下腹部が不自然に膨らんでいた。

（不衛生な環境による疾患と栄養失調で自分の体はボロボロだったらしい）

目を開けるのすら億劫な彼が、ぼんやりとした視界の中、映したのは――

「ブ……タ？」

どうせ幻覚を見るならば、焼き豚とか煮込み豚の方が良かった、と零しながら少年は翠の瞳を閉ざした。

だから、彼は見る事ができなかった。

目を丸くした後、慌てて彼を抱き上げたギルバート大司教（当時。現在は副神官長）も、その後ろで必死に笑いを堪えるアルフォンス神官（当時。現在は司祭枢機卿）も。

この時の話で、後にシリルはアルフォンスにことあることに笑われることになった。

「いや、実に傑作だったぞ。」

ギルバート様は声を震わせながら、

『この私をブタとは……許せん！ おいアルフォンスつ。こいつをさっさと連れて帰るぞ。儂以上の豚になるまで肥え太らせてやる！』とおっしゃってな。

辺境伯爵の隠し子が随分前に出奔したらしいと知って、あの方は酷く心配していたんだ。長いことかかってようやく行方が分かり迎えに行けば、案の定行き倒れて餓死寸前だった。

内心早く連れ帰りたいと思っているくせに『悪徳神官』として何時もの調子で皮肉を言っていた。ああ、これはこの子に嫌われて落ち込んだギルバート様をまた慰めることになるぞ、と考えていたらだ。

その子供が掠れる声で『豚』と呟いて『焼き豚になって出直してこい』ときた。

『悪徳神官サマ』としてギルバート様がどう返すつもりか、思っただけの台詞だ。

『肥え太らせてやる！』とか格好つけて叫ぶ悪役を、物語でも芝居でもなく、現実の中で実物として見ることになるとはな。どんな喜劇だ。笑い死ぬかと思ったぞ」

さながらお前は悪徳神官に攫われた姫といったところか、残念ながら肥え太らせられなかったようだがな、とニマニマ笑う同僚にシ ril は複雑な心境だった。

自分としては幼少期の暴言などという失敗談を語られるのは微妙

だった。しかし、この話をする度にアルフォンスは破顔してギルバート副神官長は懐かしげに目を細めた。

（俺と出会ったことで、彼らが笑えるというのならば、まあ、いいか）

彼らが昔話をする度、シリルは頬を微かに赤く染めて困ったように微笑むだけだった。

パレヴィダ神殿に入ってから暫くのことはよく覚えていない。
高熱が出ていて危険な状態だったそうだ。

目を開けて一番最初に目に入っただのは――

「ブ」私はギルバートという。小僧、ギルバートだ。ほら、言ってみろ」

タ、という言葉はブ……ギルバート大司教のマシングントークによってかき消された。

（豚がしゃべってる）

目を丸くした彼に、ギルバート大司教はふんつと鼻を鳴らした。
傍にいた少年神官に何事かを囁くと、彼はのしのとペンギンのように体を揺らして出て行った。すぐに戻って来た大司教は、医療担当の神官を連れていた。

そこからは、怒涛の展開だった。

出家の意思を聞かれ、

（入信を前提に、「命が惜しいだろう、美味しいものが食いたいだろう、ほら今ならこんなに可愛いチビ神官もいるんだぞ」と白布に包まれた赤子を見せられたりして、そのあまりの勢いに押し切られた）

名を付けられ、

（「元の名は忘れる。シリル」と言われて、「もともと付けられていなかった」と答えたら奇妙な顔をされた）

パレヴィダの掟を教えられ、

（「破ったら死ぬぞ。シリル」と言われて、「どうして死んだらいけないの」と尋ねたら、「泣くぞ、私とちびっこ神官達が」と返された。納得した）

綺麗な神官服と清潔な寝床、温かい食事を与えられた。

（妙に豚肉料理が多かった。んまんまとがつついていたら、知らない老神官に「儂の分もお食べなさい。シリル。年寄りに連日肉料理はきつくてのう。まったくあの男は若人ばかり甘い。老人のために滋味滋養のあるあつさりとした料理を用意してもらいたいものじやな」とよく分からない愚痴をこぼされた。翌日から薬草粥と薄い味付けの魚料理が出されるようになった）

そして、彼は見習い神官となった。

ギルバート大司教直々に命じられたのは、自分よりも年下の少年神官達の世話係だった。

【36】シリルとパレヴィダ神殿 (1) (後書き)

12/4に投稿予定のものを前倒し投稿しました。
次回更新は12/11を予定しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541o/>

So what?

2011年12月3日19時43分発行